
妖精の輪と時のロンド～妖精たちのいるところ

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の輪と時のロンド〜妖精たちのいるところ

【Nコード】

N5323G

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

大学から帰る途中、隆志は妖精郷に引きずり込まれた。そこで同じく妖精郷に迷い込んだ少年アーサーと出会い、彼を人間の世界に戻そうとするが…。チェリーズ・ホットの本編、隆志の失恋相手の話を予定していましたが、パソコンの動作不良で二万字ほど消えました。いきなり強制終了。消えた二万字は戻らず。…すごいダメージ…。こちらは無事だったので、悩みましたが、先に上げました。軽い事は軽いです。…しかし隆志が鬼畜になつてる気がする…。

フェアリー・リングは輪を描き、時は螺旋を描いて重なり続ける。無限に輪を描く時間の中で、私は一人の妖精と出会った。

A・ロイド『私の愛した妖精』より

ほのかに花の香りのする、やわらかな大気。光を含んできらめく青い空。鮮やかでいて、幻想的な野山の緑。

引きずり込まれたな。そう思った。

俺の名は瀬尾隆志^{せのお たかし}。二十歳になったばかりの大学生だ。髪は栗色。目はステイル・グレー。光の加減によって茶色にも緑にも見える、妙な色をしている。全体的に色素が薄い。顔だちも国籍不明な感じがする。子どものころはよく『ガイジン』と言われてからかわれた日本人らしく見えないらしい。それには理由があつて、俺の祖母は一応、英国人だった。対外的にはそういう事になっている。

だが実の所、そうではない。祖母ノーラは英国から来たと言え^{たかふみ}ば来たのだが、人間ではなく妖精だった。留学していた祖父、隆史と恋に落ち、日本までついてきたのだ。ノーラは娘を産み、その娘、江利子が俺の母親となった。

そういうわけで、俺は妖精の血を引いている。自分の事は人間だと思っ^ているが、祖母が妖精だった事もあり、幼い頃から良く、人間ではないものたちからちよっかいを出されてきた。異界に迷い込むのもしょっちゅうだ。今もおそらくそういう状態だ。これまでの経験から、俺はそう判断した。

確か、大学から帰る途中だったよなあ……。

自分の記憶を確認する。そうだ。大学に行くと講義が休みになっ

ていた。理由は不明だが、その日俺が取っていた授業はことごとく休講になっており、一日がまるまる空いてしまったのだ。そうかと言って、何か予定があるわけでもない。そろそろ梅雨明け宣言が出されるだろう七月頭、突然の休みをもらって俺は逆に、困ってしまった。仕方なく家に帰ろうとして……、

思い出した。歩いていて角を曲がろうとしたら、後ろから車が来た。大型の外車。いかにもという感じの高級車だった。邪魔になるかと横に移動して、車に先に行ってもらおうとしたら、なぜか止まった。ドアが開いてそうして……、

あれ？

俺は眉をひそめた。そこから先が曖昧だ。

「誰かが出て来た……」と思ったけど。なんで俺、こっちに移動してるんだ？」

美しい場所。美しい風景。目の前にあるのは、輝く空に緑の野山。りんごの木々が花盛りだ。白い花が美しい。大地にも花が咲き乱れ、鮮やかに世界を彩っている。流れる小川はりんりと鈴に似た音を響かせ、銀色の光を放っている。肌に感じるのは魔力を含んだ大気。ここは間違いなく妖精郷だ。排気ガスの匂いが漂う人間界ではなく。

「まさかと思うが、その場で引つ張られたんじゃないだろうな」

それなら突然の人間消失が起きている。向こう側では騒ぎになっているだろう。だとしたら、ちょっと嫌だ。

「まあ、それはそれだ。何とかなる」

しばらく考えたが、わからない事はどうしようもない。戻ってか

ら何とかしようと棚上げした。今までの経験からも、うまく誤魔化せばどうにでもなる。人間は自分の常識が崩れるよりは、わかりやすい嘘を信じたがる生き物だ。実はマンホールのふたがはずれて、落っこちてましたー、とか言っておけばOK。問題ない。

その顔でその性格は詐欺だと良く言われるが、俺は結構アバウトだ。……顔は関係ないだろう、顔は。

周囲を見回す。

「コーンウォール……？　っぽいな。日本の風景じゃない。って事は、俺を呼んだのは、ばあちゃん関連か」

日本の妖怪系から妙なアプローチをされる事もあるが、英国から来た妖精の血を引いているせいかな、ちょっかいを出されるのは、ケルトやアイルランド系の妖精からの事が圧倒的に多かった。

「何だか、肌がむずむずするし……大気中の魔力が妙に強い。何があつたんだ」

首をかしげたが、とにかく情報がない。何か知ってそうな相手を見つけるしかないだろう。

そこで自分の所持品を確認する。妖精の時間は人間のそれとは違っていて、こっちで何日も過ごしても、人間の世界では一時間もたっていないかったり、逆にこっちの一時間が、人間の世界では何日にも相当していたという事もある。要はあまり人間向きではないのだ。早めに帰るのが一番。こういう時にはだから、使えそうな物を持っているかどうか、確認するのがくせになっていた。

鞆は持っていない。向こうに落として来たのだろう。ポケットにあつたのは、

ハンカチ。

駅でもらったティッシュ。

食べかけのチョコバー。

キーホルダーと家の鍵。

『妖精天使タイニー・ケイティ』のミニフィギュア・ストラップつき携帯電話（表示は圏外になっている）。

……だった。

「役に立ちそうなもの、ないなあ」

天使の羽をはやしたボーイッシュな女の子のフィギュアを眺め、俺はつぶやいた。決めポーズをしている妖精天使は、イギリスの何とかいう小説家を書いたファンタジー小説、『私の愛した妖精』を原作としたアニメの主人公だ。日本のアニメが大好きだという彼の作品にはオタクの萌え心を直撃するものが多く、この春にアニメ化された『タイニー・ケイティ』もそうした作品だ。天使でありながら地上に落ちて妖精になってしまったケイティが、世界に混乱をもたらす悪の女王と戦い、悪に染まった妖精を次々と改心させる。友情あり、涙あり、人間の男の子とのロマンスありの、変身魔女っ子系の物語である。

ちなみにケイティはなぜか、時々女王様モードになる。元・悪の妖精、今ではケイティの忠実な下僕（……）の青年カインをビシバシいたぶったりするのだが、その辺がたまらないと妙なファンが増殖中。

「瑠璃子、好きだもんなあ、これ……」

十三歳になる俺の妹、瑠璃子は『ケイティ』のファンで、グッズを集めるのに精出していた。このストラップは何かでダブったとかで、無理やり押しつけられたものだ。

『ケイティって、お兄ちゃんに似てるよね!』

その時、瑠璃子は満面の笑みを浮かべてそう言った。俺は可愛い妹に怒りを炸裂させるべきか否か悩んだ。

「似てないだろ」

フィギュアを見つめてぼそつとつぶやく。茶色の髪に緑の目の妖精天使は、あくまでも可愛い女の子だった。ボーイッシュではあるが、女の子だ。二十歳を過ぎた男がこんなものに似ていたら、世の中大混乱だろう。

携帯やハンカチをポケットに戻すと、俺は歩き出した。

「あれ？ タカシ。こっちに来てたんだ」

少し歩くと、ピクシーに出会った。しわしわの顔に茶色の上着。ブラウニー（家つき妖精）系の優しい小人だ。彼は陽気な笑顔で挨拶してくれた。

「やあ。何だかわからないけれど、迷ったみたいだ。誰かが俺を呼んだのかな？」

「そういう話は聞いていないけどね。ああ、それともあれかな？ 人間の男の子が迷い込んでいるんだよ」

「人間の男の子が？」

「あんたも昔は良く、迷い込んでたよね。どうも『見る』目を持っている子みたいだ。いちやいけない時に、いちやいけない場所にいる、輪の中に入っちゃったらしくてね。こっちにいる」

俺は眉をひそめた。妖精の輪。フェアリー・リング妖精たちが踊った後にできる輪だ。

特定の時にできた輪は、思いもよらない力を発揮して、本来なら離れている二つの世界をつないでしまう。その子は故意か偶然か、そうした力を持った輪の中に踏み込んでしまったらしい。

「無事なのか？」

妖精の事を何も知らない人間が迷い込んだ場合、放っておいたら大変な事になる。ここには悪意を持つ妖精だつて存在するし、妖精にとつての好意でも、人間には大迷惑という事は良くあるのだ。

俺も何度、可愛いからと食われかけたり、閉じ込められたりした事か。

「今の所は無事だよ。モーザ・ドゥーグに追いかけていたんで、仲間が助けてやったんだ。あんたやノーラが、人間には優しくしてやれつていつも言ってるだろ？　なのにその子は、礼も言わずに叫んで逃げた。失礼じゃないか？」

モーザ・ドゥーグ、黒妖犬。マーザ・ドゥーとも呼ばれる。死と不運を運ぶ妖犬だ。生ある者がこの犬に触れられれば、即座に命を落とす。そんなものに追いかけるなんて、さぞ怖かっただろう。

「その子を助けた仲間に、ありがとうと伝えてくれないか。多分、妖精の事は何も知らない子どもなんだ。何が何だかわからなくて、怯えているんだよ」

だが助けてあげたのに悲鳴をあげられた妖精には、不本意だっただろう。とりあえず、とりなしておく。ピクシーは陽気な笑みを浮かべた。

「別に気にしちやいないさ。子どもは好きだしね。タカシ、あんたももう一度、小さな子どもになっちゃくれないかね？　うんと可愛がるよ？」

「俺は大人になる事を選んだんだ、ピクシー。この自分が好きだから、子どもに戻るつもりはないよ。悪いけれど」

「そうかい、残念だね」

「それで、その子はどこにいるんだ？」

「丘の方だ。怖がつて、穴に隠れてる」

教えてくれた方角に目をやると、緑の丘が見えた。

「助けに行ってくるよ。教えてくれてありがとう」

「なんてことないさ。ああそれより、キスしてくれないかい？」

頬にキスをすると、ピクシーはにこにこした。俺は彼に別れを告げると、丘に向かった。

水晶や貴石が露出する岩々が、光を浴びて小さな虹を作り出している。花々の咲き乱れるなだらかな丘を進むと、妙なトンネルが出現した。苔むしたそこをのぞきこむと、奥に誰がいる。

「そこに誰がいる？」

声をかけてみると、動いた。こちらを見透かすようにしている。

「だれ？」

かえってきた声は、細くて高かった。子どものものだ。思ったより年齢が低いらしい。俺は相手を怖がらせないよう気をつけながら、声をかけた。

「大丈夫。俺は人間だよ。こんな所でどうしたんだい」

「どうしたって……、」

声をつまらせてからこそ動き回る音がして、子どもが出てきた。綺麗な金髪に青い目。十歳ぐらいに見える男の子。頬や手足が泥で汚れているが、着ているものは上等なものようだ。上品な雰囲気、困気が漂っている。汚れてはいるが、小さな王子さまのようだった。多分上流の子どもだろう。

「本当に人間？」

俺を見て子どもは目を丸くしてから言った。疑わしげだ。俺は背をかがめ、彼と視線を合わせてから微笑みかけた。

「そうだよ。君は人間？」

「そうに決まっている」

「そうか。俺は、隆志だ」

子どもはまばたいてから、「カシー？」とつぶやいた。うまく発音できないようだ。

「タ、カ、シ」

ゆっくり発音すると、繰り返す。

「タイ……カシー。変な名前」

「日本人だから。聞き慣れない音に聞こえるだろうね。呼びにくかったら、好きに呼んでくれて良いよ。タックでもカシーでも」

「それは失礼だよ。タ……カシ。ちゃんと発音する」

少年はきつぱりとそう言うと、俺の名を発音した。おお、格好よいなあ、と俺は思った。日本の子どもで、この年齢で、相手に対し

て失礼だとか何とか気づかえる子どもがいるだろうか。

「この名前、何か意味があるの？」

俺はうなずいた。

「俺の名前は漢字で書くから。漢字には、一文字ずつ意味がある。隆志のタ力は、昇るとか、上がるとかいう意味だ。シはこころざし。強い意志を現す言葉だよ。意志を強くもって、高く上げるという意味……かな」

少年はぼくを見つめ、「意志を高く上げる……」とつぶやいた。

「ぼくは、アーサー」

きちんと躰けられているらしい。名乗った俺に彼も名乗った。

「イングランドに平和をもたらした王さまの名前だね。良い名前だ」

そう言つと彼はちよつと赤くなった。

「それで、アーサー。君、どうしてこんな所にいるの？」

「わからない」

子どもは言つた。自分の置かれた状況を思い出したのだろう。一瞬、泣きそうな顔になったが、我慢した。言葉を続ける。

「ちよつと、散歩しようと思ったんだ。ちよつとだけのつもりだった。そしたら……どこをどう歩いているのかわからなくなって……。そ、それで、変なのが出てきて」

「変なの？」

「し、信じられないかもしれないけど！ 目の中で火が燃えてる、黒い犬とか！ 変な馬とか！ お、おとぎ話にしか出てこないような化け物が……っ」

黒妖犬。変な馬は、ピクシーが化けたものだろうか？ 今度こそ泣きそうになった彼を、俺は抱き寄せた。

「うん。大丈夫。良くがんばったね。俺も見たことがあるから、君を嘘つきだなんて思わないよ」

「ほんと？」

「本当。さっきもピクシーを見た」

アーサーはくしゃつと顔を歪めると、しがみついて泣きだした。よほど不安だったのだろう。可哀相に思っただけ俺は、しっかり抱きしめてやった。

しばらく好きに泣かせてから、落ち着いたところを見計らい、俺はアーサーの頭をぼんぽんと軽く叩いた。

「さて。じゃあ、アーサー。君をどうにかして帰してあげないとね」「かえられるの？」

泣いた事が恥ずかしかったのか、アーサーはうつむいていたが、この言葉に顔を上げた。

「うん。その前に尋ねるけど、ここで何かを飲んだり食べたりした？」

アーサーは首を振った。俺はほっとした。

「良かった。ここでは何も食べてはいけないよ。帰れなくなるから」「そうなの？」

「そう。妖精に連れて行かれた子どもの話を聞いた事はない？ 妖精のくれる食べ物をお口にしたら、帰れなくなってしまうんだよ。この先、妖精たちに何か食べると言われても、食べちゃ駄目だよ」

俺のように特殊な場合をのぞき、迷い込んだ人間は、選択を誤ると戻れなくなってしまう。アーサーは真面目な顔になった。

「ここは……、妖精の国なの？」

ああ、この子頭が良いな。俺はそう思った。今の流れでそう推測できるんだ。

「そう。君は多分、何かがきっかけになって迷い込んでしまった。ここは人間の世界じゃないよ」

アーサーは俺をじっと見つめたが、「うん」とうなずいた。

「タカシも迷ってこっちに来たの？」

まだ微妙に『タ、カシー』と聞こえるが、何とか発音できるようになっている。努力家でもある。良いなあ、この子。俺の中でのアーサーはかなり高評価になっていた。

「俺の場合は、引きずり込まれたって言ったほうが正しいな」

苦笑すると、心配そうな顔になった。

「タカシは帰る方法がわかる？」

「大丈夫。どうにかできるよ。君の事も何とかして帰してあげるから、安心して」

アーサーはまばたいてから、ちよつと赤くなつた。

「うん、……あの。ありがとう。でも無理はしないでね。ぼく、タカシの事もちゃんと守れるから、何かあつたら頼ってくれて良いよ」

おお、男の子だ。俺はちよつと感動した。でも守るって……頼りなく見えるのかなあ。

……見えるのかもな。俺、マッチョじゃないしな。なんでか、つかないんだよな筋肉。がんばってるのにな。

「無理はしないよ。しなきゃならない場面では、するけどね」

アーサーは俺が落ち着いているのに感心したらしい。ほう、と息をついた。

「すごいな、タカシは。ぼくは取り乱してしまったのに……」

「君の年齢で落ち着き払われたら、俺の立場がないよ。年上の人間に見栄を張らせてくれたらありがたい」

そう言うと、アーサーはくすりと笑つた。

「タカシは妖精の事、詳しくそうだけれど……日本人は、みんな妖精に詳しいの？」

「そうじゃないよ。俺の場合は、詳しくならざるを得ない事情があるってね、色々と」

「事情？」

「その辺はあまり尋ねないでほしい。それに今は、君の事を考えないよね。もうちょっと詳しい事聞かせてくれるかな。君はどの辺から迷い込んだの？ どれぐらいの間ここににいるのかな。覚えている事で良いから教えて欲しいんだけど」

アーサーは眉をしかめた。考え込む。

「走り回って逃げたから……どこからとかわからない。時間は……、一時間か、それぐらい？」

「それぐらいなら、人間の世界ではあまり時はたっていないと思う。場所は……何か覚えていない？ 目印みたいなものないかな？」

アーサーは首を振る。

「じゃあ、迷う前はどこにいたの？ 人間の世界では」

「ジョンおじさんの家だよ。遊びに来ていたんだ。親戚じゃないんだけど、お祖父さんの友だちだった人で。ぼくの……体がちょっと弱いから、健康に良いだろうって」

「体、弱いのか？ 今は大丈夫？」

「あ、今は平気……ここに来てから苦しくない」

まばたいてアーサーは自分の胸に手を置いた。

「いつもなら、苦しくなってるのに」

「ここは、人間の常識や時間からは切り離されているからね。……喘息？」

「うん。咳が出る」

何だか恥ずかしそうな顔でアーサーは言った。

「すぐに咳をする奴は弱虫なんだって」

「誰がそんな事を……」

「みんな。そう言ってる」

アーサーは小さな声で言った。同年代の男の子にでも言われたのだろう。子どもは自分と違う相手を敏感に察知するし、それが気に入らないとなると、いくらでも残酷になれる。俺が良い例だ。『ガイジン』と言ってはやしたてた相手はみんな、自分のした事を忘れてしまっているだろう。だが俺の中には今も、小さな痛みとなって残っている。

ボクハ、ミンナトチガウノ？

チガウカラ、ワルイコナノ？

ダカラ、ミンナ、ナカマニイレテクレナイノ……？

『ガイジン、ガイジン、あっち行け』

『出てけよ、ガイジン、自分の国に帰れ』

『ここは日本だぞ、出てけ、出てけ』

声をそろえて言う子どもたち。ドッジボールをしようとしても、入れてもらえない。近づけば避けられる。遠くからひそひそ言う。

何がいけないんだろう。

どこが悪いんだろう。

どこかが悪いから、嫌われるんだろうか。

何を、どう直せば。嫌われずに済むんだろう……。

（やば。思い出してきた）

むか。となつて俺は拳を握りしめた。純粹だったよな、あのころ

の俺。必死で周りの人間の機嫌を取ろうとなんかして。

そうなのだ。俺は見かけやら何やらが理由で、延々といじめにあっていた。子どもの頃。そりゃもう色々された。教科書を隠すなんてのは序の口で、給食をわざとひっくり返される、同じグループでもわざと無視する、ボールをぶつけられる、提出するノートやテストの解答を勝手に書き換えられる、そんな事ばかり。もちろん、蹴飛ばされたり突き飛ばされるのは、しょっちゅう。加減を知らない子どもがやるもんだから、俺の体は年中痣だらけだった。

それでも俺は、何とか近づこうとした。自分が周りの子どもと違っているのは知っていたし、だからこそ溶け込もうと努力した。できる事は割と何でもやったと思う。

だがイジメはエスカレートするばかり。

結局、最後にはブチ切れた。あれは三年生の終わり頃だった。ただろつか。ガタガタ言っではやし立てていた子どもを俺は、全員まとめてぶちのめした。

教育的指導というやつだ。

昼休みだった。給食当番が給食を配っていた。俺も給食を受け取って、自分の席にトレイを運んでいる途中だった。そこでいきなり囲まれた。いつも俺にからんできて、やたらはやし立てていた三人組だ。ちなみにそれまでの俺は、弱々しいイメージだったらしい。諸般の事情からしょっちゅう学校を休んでいたし、妖精の血を引いたせいかどうか知らないが、成長が遅くて小柄だったのだ……今もあんまり背は高くないが。相手は発育が良く、どう見ても俺より強そうだった。でも関係なかった。いい加減、忍耐も限界に達していた俺は、給食を机に置こうとしてそれを取り上げられ、『ガイジンに、こんなもの喰えるのか』と言ってわざと落とした相手を、無言でぶん殴った。

女子はきゃーきゃー騒いだし、泣きだす子もいたが構わなかった。俺を囲んでイジメを開始しようとしていた全員を、ていねいに指導した。妖精に誘拐されたり喰われかけたりが日常茶飯事だった俺は、

ある意味修羅場慣れしていた。十歳程度の子どもなど、相手にもならなかったのだ。

集まって一人をいじめる割に、そいつらは喧嘩慣れしていなかった。殴られたのも初めてだったようだ。何やらシヨックを受けていた。で、俺は全員を床に沈めた後に、へたり込んでぶるぶる震えているそいつらに、そいつらが今までに言った言葉を一つ一つ繰り返して、そういう事言っただけだと思ってるのか？ とか、おまえら自分の価値、自分で下げてるんだぞー、とか言った。悪いと思ってるのかと確認すると、全員が同意した。じゃあ、きちんと謝れよと言うと、もう言いません、とかごめんなさい、とか口々に言ったので、わかってくれたのだと思う。

ただ食事を粗末にしたのは悪かったかなと思った。騒ぎで他の子の給食までもがひっくり返り、食べられない状態になってしまったのだ。それで、へたり込んだイジメっ子たちに汚れた床を指し示し、『おまえらのせいで汚れただろ。掃除しろよ』と言った。

ちよつとやり過ぎたかな、と思ったので、微笑みつきで。

……なぜか無茶苦茶びびられた。

その後、血相を変えた先生がすっ飛んで来たり、そいつらの保護者が学校に怒鳴り込みに来たり、色々あったが、俺には別に恥じる所は何もなかったのだ。堂々としていた。担任は悪い人ではなかったのだが、突発的な出来事に弱かった。何かあってもおろおろしながら『駄目だよ』とか『いけません』と言うばかりで、俺へのイジメにも見てみぬふりをし、『みんな仲良くね』としか言えない人だった。騒ぎを起こした俺にも涙ながらに『暴力は駄目なんだよ』と訴えていたが、だったら何か手を打てよ。当事者が自力で解決しようとする前に。

担任のおろおろっぷりと、怒鳴り込む保護者たちに、同級生たちはしかし、逆に結束を固めた。女子主導で。どうも俺は女子に受けが良かったらしく、男子が執拗にいじめに走ったのも、その辺の反発があったかららしい。

母が呼び出され、俺たちは校長室に連れて行かれた。そこにはイジメていた子どもたちの保護者の群れがいて、口々に賤けが悪いだの、片親しかいない子どもはこれだから、とかわめき散らされた。俺はものすごい不良のようだった。

そこへ今まで瀬尾くんをいじめてたのは、そつちでしょ！ と一人の女子が怒鳴り込みに来て、次々と女の子たちがなだれ込んできた。他のクラスの子までいた。もう一つおまけに、クラスの男子たちと、俺をいじめていた当人までやって来た。校長室はぎゅうぎゅうになった。

瀬尾くんは悪くない！ と大合唱。いじめていた子たちが延々と、俺の教科書をかくしたり、給食を取り上げたり、足をひっかけようとしたり、仲間外れにしたり、囲んで『ガイジン、日本から出て行け』とはやし立てていたりしていた事を、全員が暴露。当の本人までもが『こんな事もやった、あんな事もやった』と叫び、『だから瀬尾くんは悪くないんだよ』と言い出す始末。

あまりの騒ぎに全員が、校長室の前で立たされた。一クラス全員と他のクラスの者までもが加わっていたので壮観だった。なぜかその後も次々と別のクラスの人間が列に並びだし、人の列は延々と伸びていった……日本人は並ぶのが好き、というのは本当だったようだ。

しまいに校長がブチ切れて、『おまえら教室に戻れ！』と叫んだが、『みんな瀬尾くんが悪いって言うけど！ 瀬尾くんが悪いんだつたら、あたしたちも悪いはずです！』『イジメを止められなかったんだから、あたしたちにも責任があります！』『だから罰としてここに立たされてます！』『瀬尾くんが戻ってくるまで、立ってます！』とか女子が次々と叫んだ。思うに昔も今も、女性の行動力はハンパじゃない。男子は勢いに押されて、後ろでおろおろしているだけ。でもみんな、同意した。誰も戻ろうとしなかった。

母、江利子はそれを見て大笑いした。『すごいわ、あんたたち！』と言いながら。並んでいた子どもたちは母のコメントを聞いて、全

員笑顔になった。『おー』とか何とか言いながら、校長室の前に並んでいた。俺も何だかおかしくなって、げらげら笑った。『ありがとなー』と言ったら、全員から手を振られた。校長は頭を抱え、担任は胃を抱えていた。

結局、俺には校長室の三日間の掃除、という罰が与えられた。いじめていた子たちには、保護者への厳重注意と、一ヶ月にわたる学校周辺の清掃作業が言いつけられた。ゴミ拾いだ。向こうの親はぶうぶう言っていたが、当の子どもの方が、『悪い事をしたのは俺だから、ちゃんとやる』と言って真面目に掃除をやりだした。

ちよつと悪かったかなと思っただので、そいつらの掃除を手伝ってやったらなぜか、懐かれた。その後なんでもか、延々とつるむ事になった。高校に入った辺りではばらになっただが、今でも時折連絡が入る。

回想終わり。終わり良し。そういう事で、全部良し！

今は、アーサーだ。

俺は彼の前にひざをつくと、目線を合わせた。

「アーサー。君は黒妖犬と出くわして、逃げ切った。自分でも不安だろうに、俺が迷い込んだんじゃないかって、気づかなくてもくれたね。俺の名前にしたって、きちんと意味を尋ねて、正しい発音をしようとしてくれた。勝手に縮めて、自分の好きなように呼んでかわなかつたのに。本当に弱虫な子どもは、そんな事はしない。本当に弱虫な子どもは、自分が一番だと思っっているから、何でも自分に都合の良いように変えようとするよ。君は、そこにあるものをそのまま見ようとしてくれている。わからない事はわからないって、多分、素直に言えるだろう。」

少し話ただけでわかった。君の心は強い。そうして、妖精たちの事が受け入れられるほどやわらかい。弱虫な子どもは、自分の常識が壊れるのが嫌で、目の前に何かあっても拒否してしまう。君にそれはなかった。君は、君の事を弱虫だって言った人間たちよりも、

ずっとずっと強い人間だ」

アーサーは目を丸くした。それから赤くなった。

「ぼく……、でも。強くなんか」

「俺の言う事が信じられない？」

俺はにっこりした。

「俺はこれでも、色々見てきている。妖精も、人間も。さつきからずっと感心していたんだよ。君がとても落ち着いていて、俺に対しても気づかってくれているから。君、とってもカッコいいんだよ、アーサー」

アーサーは、真っ赤になった。

「え、ええっと」

「本当だよ。人間の強さって、腕力じゃないんだ。意志の強さ。それもね、ただ強いだけでは折れてしまう。柔軟さがいるんだよ。それが強さを支える。心が柔軟ではないと、知識を得ても使いこなせない。知恵がそなわらなくなる。」

優しさのない強さは本物じゃないって言葉、聞いたことない？」

アーサーが首を振る。

「そういう言葉があるんだよ。『強さとは力ではない。ただ強いだけでは無慈悲に陥る。優しさを持たない強さは本物ではない』」

どこで聞いた言葉だったけ、と自分の記憶を検索し、ああ、タイム・ケイティの言葉だったと思い当たる。ただひたすら強さを求め

る悪の妖精に、人間の少年がつかまった回だった。自分は弱虫だと嘆く少年に、そして強さのみを求める悪の妖精に対して、彼女は毅然としてそう言ったのだ。……こう考えると、使えるアニメかもしれない。

しかし純粋な少年には、感慨深い言葉に聞こえたようだ。

「ただ強いだけでは無慈悲に陥る……優しさを持たない強さは本物ではない……」

目がきらきらしている。彼からの尊敬のまなざしに、俺はちよつと居心地が悪くなった。だってこれ、アニメからの受け売りだし！

「あー、とにかく。君の話。おじさんの家から外に出たの？」

咳払いをしてから尋ねると、アーサーはうなずいた。

「うん。昼間は村のお祭りを見ていたけれど、夜は駄目だって言われた。ちよつとのぞいて見たかっただけなのに……」

後悔をふくんだ言葉だった。けれど俺は首をかしげた。

「祭りって？」

「ミッドサマー・イヴのお祭りだよ。タカシは見えてないの？」

「ミッドサマー・イヴ夏至祭……？」

でも夏至は十日以上前……時差？ いやそうじゃないや。旧暦か、ひよつとして？」

グレゴリオ暦の夏至は、六月二十一日だ。ミッドサマー・イヴは聖ヨハネ祭として二十四日に行われる。ただユリウス暦を使っているのなら、日にちがずれる。

「七月にあるの?」

「変だなんてばくも思ったけれど、この辺りでは普通なんだって」
「村の名前は?」

アーサーが言った村の名前は、聞いた事もない名前だった。さらに尋ねると、コーンウォール地方であるらしい事がわかる。古い伝統の残る土地なのだろう、と見当をつける。

「だとすれば、妖精との関わりも大きくなるか。変化を嫌うからなあ」

妖精の暦は今もユリウス暦だ。確かそうだった。

「ま、でもそれならどうにかなるかな。そうそう簡単に入り口が閉じる事はないだろうし」

「何のこと?」

「土地によって、魔法の動く日が少し違ってくるんだよ。俺のいた辺りでは別だったから……ああ。俺は日本からこっちに来ているんだ」

「? 日本から来ると祭りは見ないの?」

「そうじゃなくて……ええとね、アーサー。妖精の国では人間の常識ではあり得ない事が良く起こるんだよ。たとえば君は今、英語で話しているだろう?」

「もちろんだよ」

「俺は日本語で話してる」

「え?」

アーサーは目を丸くした。

「だってタカシの英語、綺麗な発音だよ?」

綺麗な発音、の所で『クイーンズイングリッシュ』の音が聞こえた。そうか、と俺は思った。やっぱり上流の子だ、この子。

「それは君が、俺の言葉を自分の知っている言葉に置きかえて聞いているからさ。相手を見て、自分の良く知っている言葉を当てはめている。だから通じる。そういう事が起こるんだよ、ここでは」

「そうなんだ……」

「便利ではあるよ。いちいち通訳を頼まなくても良いからね」

「あつ、そうだね。すごいや」

アーサーはぱつと目を輝かせた。歳相応の顔で、ちょっと可愛かった。俺は笑った。

「俺の言葉が綺麗に聞こえるって事は、君には俺は、乱暴な人間には見えてないって事だね。ありがとう」

「だってタカシ、妖精みたいだし」

「妖精？」

「うん。すごく可愛い」

真面目に言われ、俺はどう返すべきか悩んだ。

「俺、男なんだけど」

「えっ？ 嘘っ」

本気で驚いている。

「お姉さんだと思われてたんだー……」
「えっ、違うのっ？」

何だか切なくなつた。そりゃ、アングロサクソン基準だと、ひよるひよるかもしれないけどさー。

「さっき抱きついてたじゃないか。胸、あつたか？」

そう言つと、慌てた顔になつた。

「え、ええと、ごめん。そう言えはななつて……、あ、違つ、ええつと。タカシはその、ぼくの知つてゐる人間と少し違つて見えるから。東洋の人間だからかな？　だ、だから、ちよつと違つてゐなつて……ええと」

「それは、あるかもしれないね」

鋭いな、と思いつつ俺はうなずいた。立ち上がる。自分が妖精の血を引いている事は別に、話さなくても良いだろう。

「話を戻すけれど。俺はさっきまで日本にいたんだ。それが道を外れたかどうかして、こつちに来てしまつた」

「そうなの？」

アーサーは目を丸くしている。

「じゃあぼくはコーンウォールから、タカシは日本からここに来て出会つたの？」

「そう。妖精の国では、時間や空間がねじれたり、変になつたする事が良くあるんだ。前にも似たような事があつたから、俺はどうになるよ。問題は君なんだけれど。入ってきた所から出て行くのが一番安全な方法なんだ。だから……そうだね。この辺りを少し歩いてみようか。君を見ていた妖精がいるかもしれないし……どこか覚えのある場所に出るかもしれない」

そう言つと、アーサーはうなずいた。

「よう、タカシ。こつちに来てたのか」

なだらかな丘を歩いていると、貝のイヤリングを耳につけた若い男が突然現れ、俺たちの前に立った。黒髪に浅黒い肌をした、しなやかな動きをする青年だ。精悍、という言葉が似合う。にやりと笑うと色気のようなものが漂った。俺より背が高いので、見上げる格好になる。

「やあ、ケルピー」

ケルピー 水棲馬。俺にとっては顔なじみの妖精だ。アンシーリーコート（悪い妖精）であるくせに、なぜか人間めいた行動をとる変わり種。十年近い付き合いになる。最初は俺を食おうとしたが、今ではやらとまとわりついてきて、くだらない冗談を連発する、うるさい妖精と化している。俺はごく普通の態度で挨拶した。アーサーは、誰？ この人。という顔をしている。ケルピー 水棲馬の名は知らないらしい。知つていても、この陽気な態度の男を見たら、人間を食べる怖い妖精だとは思えないだろう。

「来てたんなら俺に会いにきてくれよ」

「さつき来た所なんだよ。それに急いでいるんだ」

「いつもそう言うよな。ところで、なんだそいつ。おまえの非常食か？」

ケルピーはアーサーを見下ろした。非常食、という言葉にアーサー

「はぎよつとした顔になった。俺はケルピーの視線を遮るような位置に立つと、アーサーをかばった。」

「俺の連れだ。脅かすな」

「別に脅しちやいないぜ。おまえの連れなら喰えねえなあ」

ちよつと残念そうに言うと、ケルピーはこちらに目を向けた。

「で、何してるんだ」

「この子を人間の世界に戻してやりたいんだよ。間違えて迷い込んだらしくてね。この辺りで向こうとつながっているような場所、見ていないかい？」

「ああ。今の時期だと穴が開きやすいんだよな……教えたら、何かくれる？」

ケルピーはねだるような笑みを浮かべた

「何かって、何を」

「嫁になつてくれ」

「嫌だ」

即答すると残念そうに肩を落とした。

「ちよつとは迷うとかしてくれよ。俺は本気なのに」

「迷い込んだ俺を、頭から喰おうとしたくせに」

「いや、あれはさあ……おまえ、無茶苦茶好みって言うか、うまそうで、つい。あ、でも今は喰うとか考えてないから。本当だから」
「おまえたちが嘘をつけないのは知ってるよ」

ふー、と息をついて俺は答えた。

「でも俺、嫁をもらう方で、嫁に行く方じゃないから」

「俺が嫁になれば良いのか？」

真顔で言つとケルピーは、「おまえの為ならドレスを着るぞ」と言い切つた。

「特定の趣味の人が喜びそうな気がするけど、俺はうれしくないから。俺の好みは可愛い人間の女の子なんだよ。ドレスを着たおまえじゃなくて」

「わがままだな、タカシ」

「わがままか？ 俺のこれは、わがままなのか？」

何か間違つていると思つたが、耐えた。情報がとにかく欲しい。

「とにかく、知っているのなら教えてくれ。この子を家族の元に帰してやりたいんだ」

「無報酬じゃなあ」

ケルピーはにやにやしながら肩に手を回してきた。そうして近々と顔を近づけると、男の色気垂れ流し状態の目で俺を見つめ、耳元に唇を近づけて言つた。

「どうしてもつて言うんなら、教えてやるよ。取引しようぜ。一晩、俺と過ごしてくれるなら、いくらでも教えてやる」

恐ろしくエロい声だつた。

あえぐような声がした。アーサーらしい。横目で見ると、彼は真っ赤になつて俺たちを凝視していた。俺はケルピーに目線を戻すと、片手を上げた。耳に唇を寄せている妖精の頭を抱くような格好に手

を伸ばす。

そうして相手の髪をつかむと、ぐい、と後ろに引っ張った。

「ぐああああ？ 痛い痛い痛い！」

「離れる、エロ妖精」

「エエエ、エロ？ そんな事は何も……」

「素か。素でそこまでエロなのか。隠せその顔、十八禁だ。見ろ、子どもが困惑している」

「ひどい……」

じたばたしながらケルピーが離れた。俺は手を離れた。

「おまえの冗談は笑えないんだ。で？ どこなんだ、その場所」
「教えない！」

意地になったのか、ケルピーがわめいた。

「俺たちの事は知ってるだろう！ 取引だと言ったら、取引以外では教えられない！ おまえが俺と一晩過ごすか、それと同じぐらいの価値がある対価を払わない限り、俺は絶対に教えないっ！」

そうきたか。

俺はふー、と息をついた。

「おまえたちの掟は知っている。取引と言ったら、取引以外では何も教えられないだろうな、確かに」

妖精にとって、言葉はとても重いものだ。一度した約束は決して破らない。彼ら自身の存在が、契約でできているようなものだからだ。約束を破る事はそのまま、彼ら自身の存在を破壊する。妖精が

取引でなら教えると言った場合、この言葉を翻す事はできない。言葉にした時点で、『約束』になってしまっているからだ。

「仕方ないな」

俺が言つと、アーサーが「えっ？」と声を上げた。ケルピーも。

「えっ？ えっ？ そそそそそれじゃ俺と、俺と一晚……」
「ケルピー」

さえぎると、につこりして俺は言った。

「長い付き合いだったな。会う事はもうないだろうが、達者で暮らせ」

沈黙が落ちた。

「な……な？」

仰天しているケルピーに繰り返す。

「聞こえなかったのか。おまえとはこれきりだ」

きつぱり言つと、慌てたケルピーが「待て待て待て！」と叫んだ。

「ちょっと待て！ なんだそりゃ！」

「言葉通りだ。おまえとは二度と会わん」

「いやちよつと。ちよつと待てよ何で……怒ってるのか？ 怒ってるのか、おまえ？ 笑顔なのになんか怖いぞ！」

「怒っているかって？」

ふふ、と笑って俺は答えた。

「当たり前じゃないか」

沈黙が落ちた。さつきより重かった。

ケルピーはおろおろし始めた。

「ごごご、ごめん、ごめんなさいタカシ、怒らないで下さい俺が悪かった」

「うん。圧倒的におまえが悪いよ」

「ええとでも、何で怒っているのかわかんないんですけど、どこがいけなかったんでしょうかタカシさま」

「わからないんだ。そうか。ふーん」

「あのあのあの、すみせん俺ちよつと調子に乗ってました、だからどこがいけなかったのか教えて……って言うか二度と会わないとか言わないでっ」

「いやだ」

ケルピーはムンクの叫びのポーズになった。よろよろとよろめく。

「ちよつと……可哀相だよ、タカシ」

見かねたのかアーサーがこそつと言った。

「何が可哀相なものか。こいつは何度も何度も何度も何度も、嫁になれとか嫁に来いとか、断っても断ってもこりずに繰り返す。あげくは一晩一緒に過ごせ？」

笑顔のまま俺は言った。

「ふざけるな」

ドスのきいた声に、アーサーが思わず後退った。ケルピーが髪を逆立て、本性を現しそうになった。

「ええとでも、タカシ、この人……？ 妖精？ 何か知ってるみただし。その、あんまり嫌うのは可哀相って言うか」

それでも取りなそうとする子どもに俺は、優しいまなざしを向けた。

「優しいね、アーサー。でも俺、ちょっと愛想が尽きちゃったんだよね」

微笑むとアーサーはなぜか、顔を赤くした。

「あいそうがつきた……」

愕然とした顔でケルピーが大地に膝をつく。俺はそちらを見て続けた。

「俺はね。アンシーリーコートでも、変わろうとする努力を始めた者には、敬意を払うよ。ケルピー。おまえは本来なら、人間を食べる妖精だ。それなのに俺と知り合ってから、一度も人間を食べていない。その努力はすごいと思っていた。その点で俺は、おまえを尊敬している」

静かに言うとケルピーは、ぼかんとした顔になった。

「そうなの？」

「うん」

「そうか」

ケルピーはうつむくと、真っ赤になって恥じらった。乙女かおまえは。

「でもね。これは許せないよ。アーサーはおまえが可哀相だと言った。おまえの事を気づかせてくれたんだよ。おまえは、おまえの事を気づかせてくれる優しい子どもを、家族の元に帰そうとしなibaldiかりか。それを利用して俺を好きにしようと企んだ。あまりにひどい仕打ちじゃないか？」

「……えーとぼく、そういうの考えてなくて……」

「しっ 静かに」

アーサーが何か言おうとするのをさえぎり、俺は続けた。

「どうなんだい、ケルピー。俺が怒る理由がわかるだろう？」

「そうだな…… おまえはそういうの、嫌うもんな…… なんてひどいやつなんだ俺は……」

うちひしがれた顔でケルピーが大地に突っ伏す。

「タカシ。おまえが怒るのも当たり前だ。俺は……俺はっ」

「わかったら、この子が帰れる場所教えて。そしたらさっきの『二度と会わない』発言は取り消すから」

ケルピーの前にひざまずくと、にっこりして俺は言った。

「ほんと？」

優男が必死にこちらを見ている。捨てないで！ という思いばかりだ。こういう所、純粹だなあと俺は思った。人間なら、こんな風にあからさまに感情を現す事なんてできない。子どもの時ならともかく、成長してからは。

「ほんと。長い付き合いだし。おまえは俺の大事な友だちだもの。それにこれなら、一晩過ごすと同じぐらいの対価にならない？」

そう言うと、ケルピーの顔が瞬時に笑顔になった。

「その通りだあつ！ 俺について来いっ！」

いきなり元気になったケルピーが立ち上がった。うきうきした感じで歩きだす。俺も立ち上がり、アーサーを振り返った。

「案内してくれるって。良かったね」

アーサーは何か感じ入ったような顔で俺を見上げた。

「ぼく今、『男をたぶらかす悪女』って言葉の意味がわかった気がするよ……」

「どついう意味かな？」

笑顔になった俺に、アーサーも笑顔になった。

「タカシってすごいなーと思っただけ」

「ああそう」

「おののく妖精をいたぶっているタカシ、すごく素敵だった……」
「……」

なぜそこでウツトリする、少年。

「人聞きの悪い事を言うな。俺は優しく説得しただけだ」

「そうなの？」

「あんなのは、いたぶった中に入らない」

「もっといじめたりするんだー……」

だからなぜ、夢見る瞳で頬を染めるんだ。

「とにかく急ごう」

この子の人格形成に、ちょっと悪い影響が出たかもしれない。俺は少しばかり反省した。

ケルピーを先頭に、道々、話をしながら進む。

「じゃあ、アーサーは九歳なんだ。もっと年上かと思っていたよ」

「うん。タカシは？」

「二十歳だけど……」

「えっ？ 十二歳じゃなくて？」

「何だそれは。二十歳だ」

「ご、ごめんなさい、ぼく、てつきり……」

うつたえるアーサーに、俺はため息をついた。

「東洋系の人間は若く見えるからね。でも一応、英国人の祖母がいた事になっているから、それなりかなって思ってたんだけど……」

「タカシはちょっと妖精めいているって言うか……不思議な雰囲気があるよ。だからかな。あんまり生身の人間って感じがなくて。最初見た時、本当に人間なのかどうか迷ったもの」

ケルピーがふり向く。

「このガキ、鋭いじゃねえか」
「ケルピー」

たしなめるように言う俺に、ケルピーはちょっと笑った。アーサーは何かあると感じたらしい。「何？」と尋ねた。

「何でもない。俺は二十歳だし、大学にも通っている」
「何を勉強しているの？」

「建築関係。生活環境とか歴史とか……妖精に関わる事が多くてね。その関連で、地形とか歴史とかが気になって。で、建物の方に興味が向いた」

答えると「ふうん」という返事がかえってきた。

「日本にいるんだっけ。こっちに留学したりしないの？」
「ああ……うち、両親が離婚しているから。あまり金のかかることはできないんだ。妹もいるし」

そう言うと、アーサーはちょっと気まずそうな顔になった。

「ごめん」

「別に良いよ？ 父さんと母さんは、憎み合って別れたわけじゃないから。父さんは俺が大学に入る時、ちゃんと援助してくれたしね。妹についても多分、してくれる」

笑ってみせると彼は、ほっとしたような顔になった。本当に育ちが良いって言うか、氣遣いの子どもだなあ、と俺は思った。これぐらいの男の子でこんなに人に氣を使える子って、日本ではあまり見かけないぞ。

「タカシのおばあさんは、こっちの人なんだね。じゃあ、親戚が英国にいろん？」

「いないと思う。ばあちゃんは天涯孤独だった」

多分。人間の戸籍はどうにか作ったけれど、チェンジリング取り替え子というわけではないから、親戚はいないはずだ。

「でも、いるかもしれないよ？　ぼく探してあげようか？　おばあ

さんの名前はなんていうの」

「ノーラ。ノーラ・グウィン。とりあえずは」

「とりあえず？」

首をかしげる彼に何か言おうとした時、ケルピーが立ち止まった。

「おい。まずいぞ」

そう言う彼に、俺も立ち止まる。アーサーが不安そうな顔になった。

「どうした？」

「ヤバイのが来る」

大氣の匂いをくんと嗅いで、ケルピーが言う。

「隠れた方が良くぞ、タカシ。そっちの子どもも」

「亡者の群れか？」
ホースト

「いや、この感じは……」

眉をしかめたケルピーは、振り返るといきなり俺をひつつかんだ。

「ちよっ、ケルピーー！」

「こっち来い！」

「アーサーも！ あの子は俺の預かりなんだよ、約束したんだから
！」

そう言うと、ケルピーは舌打ちしてから少年に目をやった。

「人間の子ども、とつとと来やがれ、こっち……」

言いかけて、言葉を止めた。

駆け寄ろうとしたアーサーの足が止まる。

大気が重くなる。

何か、よくないもの。黒く滲む悪意が大気から染みだすように現れる。

「タ、タカシ……」

「動くな。静かに」

俺は身振りでその場にとどまれと少年に合図して、まだ腕をつかんでいるケルピーの手を軽く叩いた。

「放せ」

「無茶するなよ」

「しない。これが……？」

ケルピーは目を少し、細めた。

「モーザ・ドゥーグだ」

ごっ、と強く風が吹いた。さっきまで暖かだった大気が冷たく凍える。そして、

真っ黒で巨大な犬がそこにいた。赤く燃える目をした犬が。

(……バスカヴィル家の犬って、こんなのかなあ)

現れた黒妖犬に、俺は思わずそう考えていた。子どもの頃、眼鏡をかけた小学生探偵のアニメはもちろんのこと、ホームズやルパンにハマったものだが、今読み返すとホームズの話には、別の観点から考えさせられるものが多い。

人間の持つ偏見を、それによって生まれる愚かしさを、ドイルは作品の中でさりげなく書き出していた。人種的な偏見みたいなものはあったが、それはその時代の制約というものだろう。それでも彼は、彼にできる限りの範囲で、人間が偏見を持つ時に現れる醜さや、無知による醜悪なまでの悲劇を描き出した。

バスカヴィル家の犬もそうした話で、燃える目の犬の伝説に怯えた人々が、右往左往する。金や地位に執着した犯罪者が伝説を利用する事で人を破滅させようともくろみ、運命に返り討ちにされる話だった。そう言えばコナン・ドイルは妖精大好き人間だった、とふと思う。

とは言えこうした余裕も、モーザ・ドゥーグ黒妖犬の標的になっていないからだ。魔性の黒犬は巨大な体に今にも飛びかからんとばかりに力を込め、アーサーをひたと見つめていた。

子どもががたがたと震え出す。

「ケルピー。あの子を助ける方法は？」

「触られなきゃ大丈夫だ。動かず耐えろ」

「子どもだし、無理じゃないかな……」

「だつたら運がなかったな」

ひそひそとささやく俺に、ケルピーが返す。俺は黒妖犬から目を離さないまま、ケルピーをぽかりと殴った。

「言つただろう。あの子は俺の預かりなんだ。無事に返すと約束したんだからな。俺に約束を破らせる気……まずい」

耐えられなくなつたのか、アーサーが身じろぐ。黒妖犬が全身に力を込めた。俺は前に飛び出した。

「あ、おい！」

「こら、モーザ・ドウーグ！ その子に手え出すな！」

怒鳴りつけると黒妖犬はこっちを向いた。「無茶はしないって言ったろうが」とぼやくケルピーの声が聞こえたが無視した。

らんらんと光る炎のような目が、俺を見つめる。ぐるる、とうなる声がした。

「よし！ 標的変えたな」

「何がよしなんですか、タカシくん。まだ人間の君が触られたら、ただじゃすまないんですがつ」

ケルピーがわめくのに、俺はふんと鼻をならした。

「その辺は、おまえに任せる」

「なにその他力本願!？」

「そういうわけだから、モーザ・ドウグ！ おまえの相手はこのケルピーだ！ 行け、ケルピー。時間かせいでくれ。俺たち逃げるから」

ひどくないですか。

そんな目でアーサーが俺を見た。

「なんで俺がそんな事」

ケルピーもそう思ったらしい。嫌そうな顔で俺を見た。

「だって俺、おまえの事信賴してるから」

「え。そう？」

ケルピーが真っ赤になった。うれしそうだ。俺はにっこりして言った。

「俺の知ってる中では、おまえが一番強い妖精だ。こんな妖精に負けたりしないだろ？ それとも俺の信賴を裏切るのか？」

「まさか！ おまえの信賴は間違いではないぞ！ やいモーザ・ドウグ、俺が相手だ！」

すっかりその気になったケルピーが、一気に本性に戻る。水に濡れた馬の姿に黒妖犬がうなり、敵意を露にした。

「アーサー！」

俺はアーサーに合図すると走り出した。気づいた黒妖犬が飛びか

かろうとするが、ケルピーがそれを阻む。

「俺のタカシに手え出すな！」

「所有格で語るなよ」

ぼそりと言いつつ、駆け寄ってきた子どもの手を引いて走る。
背後では、怪獣大戦争が始まっていた。

どんどん走って、曲がりくねった道を進み、緑の丘の麓にある、りんごの木の下にやって来る。白い花が満開だった。

ぶんぶんと歌う蜂。穏やかな光。せせらぎの音。

「ここなら安全だ」

そう言っただけが立ち止まると、アーサーは息を整えた。

「ケルピーさん、大丈夫かな……」
モーザ・ドゥーゲ

「黒妖犬は、死を運ぶものだ。俺や君が触られると死ぬけど、あいつは妖精だから。攻撃を受けても大したことはないはずだよ」

そう言っただけ、目をぱちくりとした。

「ぼくら……だと死ぬの？」

「うん、あれ、触れると死ぬたぐいの妖精だから。出くわしたらとにかく、静かにして行き過ぎるのを待たないといけないんだよ」

彼は気まずそうな顔になった。

「ぼく、叫びそうだったから……」

「うん？ まあ叫ぶよね、あれは。でかいし。ケルピーならうまくやるから大丈夫」

頭をがしがし撫でてやると、彼は俺を見上げた。

「タカシって豪胆だよ。怖い事とかないの？」

「いっぱいあるよ?」

笑って答えると彼は目を丸くした。

「そうは見えないけど……」

「黒妖犬と一人で対面したら、怖いさ。死ぬのは嫌だし。大事な人に何かあるのも怖い。家族とか、友だちとかにね。俺は人間だから人間なりの悩みや悲しみ、苦しみはあるよ。迷う事もね。でも、その時その時で、できる限りの事はしようと思ってる。逃げる事だけはしたくないんだ。恐怖や悲しみからも」

俺は答えた。

「妖精の事でもね。できる限り誠実に対応しようと思っている。…さっきはケルピーがいてくれたから、何とかなと思ったんだよ」

アーサーはふと、表情を曇らせた。

「信頼しているんだ」

「うん? そう……かな」

「あのひと、馬の姿になってたね……」

「ああ、水棲馬^{ケルピー}だから」

アーサーはちよつと黙った。

「ええつと……ケルピーって……あの」

「うん?」

「あの、……ひょつとして、あのケルピー? 人を食べる……」

恐る恐るという風に尋ねる。

「うん。アツハ・イシュキとも言っね。人を食べる妖精だよ。あのケルピーは変わり者で、そういう事しないけど。アンシーリーコート（悪しき妖精）だよ」

そう答えると、アーサーは黙り込んだ。

俺を見つめ、りんごの木を見上げ、もう一度俺を見て、困ったように顔になった。

「タカシ。あなた一体、何者なんですか」

口調が改まった感じになっていた。さっきまではもう少し砕けた口調だったのに。

「普通の人間」

答えると、アーサーは目つきを鋭くした。

「無理がありますよ、それ。魔法使いですか？ それとも何か、神秘を見つけた探求者？」

俺は息をついた。

「そっちの方が、よっぽど無理がある説明だけど。俺は普通の人間だよ、良くも悪くもね」

「じゃあどうして、アンシーリーコートがあなたの為に働くんです？」

「さあ？」

首をかしげて俺は言った。

「俺にはわからないよ。ただアンシーリーコートも時には、変わりたいと願う事があるようだ」

「そうなの？」

「あいつはそうだよ。最初は俺を食おうとした。でも今では、やら人間臭くなっている」

俺は苦笑らしきものを浮かべた。

「そういうあいつが俺は嫌いじゃない。そう思う。それだけだよ」

「それって、でも……」

「タカシは確かに普通の人間だよ。血筋は多少、こちら寄りだがね」

不意に、割って入る声がした。俺たちがそちらに目をやると、木の影から青年が現れた。若々しい顔に真つ白な髪。薄桃色の瞳。古風で、それでいてきらびやかな衣装を身にまとっている。金と緑の刺繍で縁取られた白い上着とフェーリア（キルト）。大きな金のブローチで肩の所で留めたプライド（マント）。赤みを帯びた黄金のトルク。美しい装飾をされた短剣を腰にさし、胸の所で交差しているベルトには柄を金で象嵌された長剣をさしている。ただ彼の物腰は優雅で、詩人めいてもいる。穏やかな表情を浮かべる優しい顔を見ても、そんな印象が強かった。

布地の下からのぞく手足を見れば、彼が武器を持って戦える存在であることにわかるのだが……。

光が中からあふれ出しているような存在感がある。シーリーコート（善き妖精）の特徴だ。

「普通とは、特別だと言うことだからね」

穏やかに言うと、彼は俺の前に立った。

「久しぶりだね、トリスタン。白い花の騎士」

声をかけると彼は破顔した。

「会いたかったよ」

そう言うとな俺を抱擁し、頬に口づけを落とす。

「トリスタン……？ え？ 円卓の騎士の？」

アーサーが首をかしげる。白い青年は微笑んだ。

「タカシが私につけてくれた名前だ。初めて会った時に。私には名がなかったから」

「名前が……？」

「忘れてしまっていてね。おかげで存在が消えそうになっていた」

初めて出会った時、この妖精は、半分消えかけた状態でふらふらしていた。当時十二歳だった俺が話しかけると、記憶喪失である事が判明した。妖精の場合、記憶＝自分自身という所がある。記憶を失うと言うことは、自分自身の存在を失う事に等しい。肉体にまで影響が出る。そのまま放っておけば、彼は確実に消滅していただろう。

俺には細かい事は良くわからなかった。ただ名前すら忘れてしまった相手が気の毒だった。だから当面の呼び名をつけてあげたのだ。するとその途端、彼の存在が鮮やかになり、輪郭がはっきりとなった。現実味を持った存在になったのだ。あれには驚いた。

後ではあちゃんが説明してくれた所によると、どうも彼は何かの攻撃にさらされ、『核』の部分を損傷したらしい。『核』とは妖精

にとつての本質と言うか、心臓にあたる部分だ。記憶の集中する場所でもある。そこを損傷したおかげで彼は名前を失い、存在が希薄になっていった。だが俺が新たに名を与えたので、『核』が修復され、存在がしつかりと世界に固定された……らしい。そんな事を言っていた。

『呆れた子だねえ。損傷した『核』の修復なんて、普通は妖精王クラスにしかできないよ』

何事かが起きたと慌てて様子を見にきたばあちゃんは、しつかりくつきり存在しているトリスタンを見て言った。俺としては単に呼び名をつけたただけだったので、何がすごかったのか、今でも良くわからない。

「こいつ、半分消えかかりながら、ふらふらしてたんだ。尋ねたら名前がないって言うから……じゃあ俺がつけてやるよって。そのころアーサー王と円卓の騎士の話が好きだったから、トリスタンの名前をつけた。歌がうまかったから」

俺は彼の言葉を補足して説明した。

「豎琴の騎士だっけ？ トリスタン卿は。人間の名前じゃまずいかって尋ねたら、それで良いってこいつも言っただし。昔はもっと、ちゃんとした名前があったと思うんだけど……」

元はかなり古い、力のある妖精だったはずだ。この姿からして、ケルト系なのは間違いない。ひよっとしたら、トゥアハ・デ・ダナーンダーナ神族の一人だったのかもしれない。

彼はけれど、微笑んだ。

「そうだね。でも忘れてしまった。今の私は君のトリスタンだ。不満はないよ」

そう言うつと、トリスタンは再び俺を抱き寄せ、頬に口づけた。さらにもう一度。

「トリスタン。くすぐりたい」

「すまないね。君と出会うとどうにも抑えがきなくなる。私の心は君のものだから」

アーサーは、なんとも言えない顔でこちらを見ている。

「アーサー。念の為言っておくけど、俺とこいつは何でもないから
「そうですか」

明らかに信じていない顔で言われた。

「トリスタン。ちょっと離れてくれるか」

「つれないね、愛しい人」

「わかってて言うてるだろう、アーサーが誤解する」

「私はかまわないが？」

「俺がかまう。離れてくれ」

そう言うつと、残念そうな顔をしてトリスタンは離れた。

「タカシって、浮気者なんですか……」

アーサーの目が何だか冷たい。浮気つてなに。

「そうではないよ、人間の子ども。彼は深い慈愛の心を持っている。
それを誰にでも注いでくれる。それだけだよ」

晴々とした顔でトリスタンが言う。なんだそりゃ。

「ものすごい浮気者って聞こえます」

「彼の心は誰のものにもならないのさ。私たちは彼に愛を注ぐが、けれど彼の心は私たちのものにはならない。悲しいがね。だが愛とは、見返りを求めるものではないだろう？ 私たちは心を注ぎ続ける。彼からの微笑みやまなざしがあれば、生きてゆく事ができるのだよ」

「何げに俺が、ものすごくひどい人みたいに聞こえるんだけど。トリスタン。おまえが説明するとややこしくなるから、ちよつと黙っててくれる……？」

トリスタンは黙った。俺は困った顔をしてからアーサーを見やった。

「好かれやすいんだよ、俺。昔から。シーリーコート（善き妖精）にもアンシーリーコート（悪しき妖精）にも」

「そうなんですか」

「良く迷い込んでいたし。知り合いも多くなってね。でも俺自身は、普通の人間だから」

アーサーは、納得いかないという顔をした。

「普通の人間がシーリーコートからアンシーリーコートからも、好きだ結婚してくれ愛してるって言われるんですか」

「そこまで言っていないだろう、トリスタンは！」

「言っても良いかね？ タカシ、結婚してくれ」

あっさりトリスタンが言い、俺はにこにこしている相手を睨んだ。話を混乱させないでくれよ！

「俺の好みは人間の女の子なんだ。普通の」

「一度結婚してみようよ。私はそれなりに上手だよ。人間の女の子の事なんて、頭に浮かばなくなるよ?」

「さらりと怖い事言うな。俺、結婚するなら女の子って決めてるから。子どもの頃からの夢だから」

「じゃあ、一緒に暮らすだけでも良いよ。君が望まないのなら触れないし、無理強いはいしない。ただ、君を見つめる事を許してくれ。私の心が君を愛することだけを」

「とっても心の広そうな事言ってるけど、それだと俺は二度と人間の世界に戻れないだろう。おまえの事だから、俺が根負けするまでどこかに閉じ込めようって魂胆なんだろうが!」

「タカシ……まだあの時の事を怒っているのかい? 私が君を閉じ込めたのは、愛するがゆえだよ。君の上に流れる時間を少しでも遅らせて、そのばら色の頬が曇る事のないように、美しい姿のままにいられるよう、大切にしようとしただけじゃないか」

「閉じ込めてる時点で、ものすごく迷惑なんだよ!」

存在がはつきりした後、こいつは何を思ったのか、俺を時間の流れない場所に閉じ込めた。他の妖精王にもされた事があったので、『またか!』という感じだったが。無害そうに見えたので油断した。妖精は閉じ込めるのが好き、という事をとりあえず学習した。

エレン。

そこでふと、胸が痛んだ。この春に出会った歌姫の面影がよぎる。妖精王の一人に気に入られて、時の牢獄に閉じ込められていた娘。彼女を助けようとして、危うい取引をしたのはついこの間だ。俺はもう少しで、妖精王に囚われる所だった。

エレンは解放された。ただ彼女が囚われてから、百年が過ぎていた。戻るべき肉体も、もはやなかった。

彼女の魂はだから、行くべき場所を目指した。

もう二度と会えない。地上では。

「あの一、そんな事が？」

おずおずとした風にアーサーが言った。俺は氣を取り直して答えた。

「何度か連れ去られて閉じ込められた。こいつらの愛情、人間向きじゃないんだ、正直言つて。なあ、トリスタン。俺はおまえの事、嫌いじゃないよ。子どもだった俺に、色んな事を教えてくれたし。でも俺は、人間の女の子が好きなの」

「残念だ」

ため息をついてトリスタンは首を振った。

「だが私の心は常に君と共にあるよ、愛しい人」

「だからそれヤメテ。誤解されるから。おまえだったら可愛い妖精がより取り見取りだろう。俺みたいな人間をかまわなくても」

「君は特別だよ。どうしてこちらで暮らさないのかな。人の世界は君には、つら過ぎるのではないかね」

俺はふと、黙った。トリスタンは、知っているよと言いたげなまなざしで、俺を見ている。

人間の世界では俺は、どこかはみ出している。姿形の問題ではない。どこかに違和感を感じてしまう。

俺の居場所はここではない……。

なぜそう感じてしまうのかわからない。ただずっと、その思いがある。どんな時でも。かと言って、妖精の世界に来れば安心かと言うと、そうでもない。俺はここでも異端だ。

どこにも所属できない者。それが俺だ。

それでも俺は、人間であり続ける事を選んだ。今後も選び続けるだろう。

「つらいよ。もちろんじゃないか」

俺は答えた。微笑んで。

「人間の世界は憂いで一杯だ。おまえの言う通り」

「こちらで暮らせば良いのに」

「それはできない」

きっぱりと言うと、なぜと目で問われた。

「なぜなら俺が人間で、それ以上でも以下でもないからさ」

「タカシ」

「家族が待つてる。俺の人生はこっちじゃなくて、向こうに大半があるんだよ、トリスタン。それは俺のもので、誰かが肩代わりできるものじゃないんだ。どれだけつらくてもね。……それで良い。それが俺の生き方なんだよ」

「君はそれを、選び続けるのか」

少し悲しげに彼は言った。

「君の歌が私は好きだった。奏でる音楽も。いつまでも聞いていたと思ったよ。あのまま私と共にここで暮らせば、もっと磨きがかかっただろうに。人の世の醜さは、君を枯らしてしまうのではないかね」

「そうだったら、それはそれだ。俺に力量がなかった。それだけの話だよ。詩や音楽は、滅びない所からやって来る。俺たちはただ、それを受け取って世界に解放している。……教えてくれたのは、お

まえだろう、トリスタン。同じ事だ。俺は、どこにいても俺であり続ける。力が俺を満たしながら世界に向かうのならそうなるだろうし、俺が枯れ果ててしまおうと言うのなら、それもそれだけの話だ」

「私は君が惜しい。決して変わらぬよう、とどめたい」

「俺は嫌だ。ずっと変化を続けていたい。人間にとつての永遠は、変わり続ける所にあるんだよ」

俺たちは見つめ合った。平行線だ。分かり合える事は決してない。変わらない事で永遠を体現する妖精と、変わり続ける事で永遠を輝かせる人間とでは、相手を思う心の有り様すら違ってしまう。そう思っていると、トリスタンが息をついた。

「相変わらず私を魅了するな、タカシ」

「はあ？」

今の会話のどこに、魅了だの何だのの余地がありましたか？

「逆らえるはずがない。これほどに輝く君に。君の変化は私を捕らえて離さない。それが永遠だと言うのなら、君こそが私の永遠だ」

「あのすみません。言ってる事が良くわかりません」

何ですかソレ。

「出会って以来、君は私の前で、どんどん変わっていった。固かった蕾が次第にほころび、朝日の中で咲き初めるように、君は美しくなり、日々変化した。目が離せなかったよ。今も離せない」

「美しいは言い過ぎだと思います……」

固かった蕾ってナニ。花ってナンデス力。

「タカシ。君こそは永遠に咲き続けるべき一輪の花」

……。

俺はとうとう天を仰いだ。勘弁してくれ。

「相変わらず美辞麗句が絶好調だな、トリスタン……」

ざわざわする全身を掻きむしりたいのを抑えつつそう言うと、白い騎士は微笑んだ。

「事実を言っているだけだ。君を見ていると、自然と言葉が溢れてくる」

「俺はちよっと、その辺をのたうち回りたい気分だよ」

「おや。称賛が足りなかったかね」

「いやもうヤメテ。かゆい。無茶苦茶かゆい」

「相変わらず、恥ずかしがり屋だね、君は。そんな所も愛おしいよ」

ささやく彼は微笑むと、宙に目をやった。

「そういう恋人たちの語らいを、邪魔しようとする者。無粋ではないかね？」

「え」

俺は目を丸くし、次いで飛び上がってアーサーの元に走った。大気が重くなり、黒い影が滲む。ゆらりとゆれたそれは、次第に形を取り始めた。

黒い犬の形に。

冷たい影。死の予兆。情け容赦なく命を刈り取るもの。

ぐるる、と唸って黒妖犬が、その場に姿を現した。赤くらんらんと光る目は、俺にひたと向けられていた。

「ケルピー……まさかあいつ、やられたのか？」

ささやくように言うと、アーサーが震える声で言った。

「タカシ。こいつ、大きくなってない？」

俺は黒妖犬を見つめた。確かに大きくなっている。先程の黒妖犬は、大きいとは言え、まだ犬の範囲内の大きさだった。だが、今は子牛ほどの大きさに膨れ上がっている。

トリスタンが、は、と息をついた。

「馬妖精の事は知らないが。実に無粋だね。下賤なものの分際で、私の領域を侵し、大気を汚した。この私、丘のあるじにしてりんごの木の祝福を司るものの領域を！ しかもあるう事か、私の恋人を見つめるなどという不遜な事をしでかすとは」

かつ、と光が走り、トリスタンの手の中に何かが現れる。銀の弓矢を手にした彼は、弓をかまえ、矢をつがえた。

「立ち去るのならは見逃そう。そうでないのならば射る」

「誰がおまえの恋人だよ……」

思わず突っ込むが、トリスタンは頓着しなかった。黒妖犬も。真っ赤な炎を目の奥にちらつかせる魔性の犬は、牙を剥き出して唸ると、俺に向かって突進してきた。

ひゅっ、

光と化した矢が妖犬を射抜く。

矢が当たる直前に、黒妖犬は大気に溶けて消えた。

「わっ」

矢は俺の体をかすめて飛び、背後に落ちた。

「おや。大丈夫だったか、タカシ」

「当たる所だったぞ」

「傷ついたなら、すぐに手当てをしてあげるよ。そのまま私の所で暮らせば良いし」

「それが目的？　それが本当の目的？」

思わず睨んでしまうと、ふふ、と笑ってトリスタンは銀の弓を消した。半分ぐらい本気だっただろう、おまえ。

「それにしても……トリスタン。記憶戻ったのか？」

「なぜ？」

「さっき、丘のあるじにしてりんごの木我的祝福を司る……って」

「ああ。いいや。記憶はないよ。だが自分の属性ぐらいはわかるからね。私は丘と、りんごの木に属するものだ。それぐらいはね」

「そういうものなのか……？」

「そういうものだ。それに、それ以上のものを私は求めてはいない。求めても無駄だからね。それだけの話だよ。タカシ。君のつけてくれた名前は美しい。とても気に入っている」

「適当だったんだけど……」

微笑むとトリスタンはずっと近寄ってきて、ささやいた。

「君の言う、永遠を感じるよ。君に呼ばれるたび。その唇が私を呼ぶたびに、永遠が私の心を震わせる」

指輪が香水の宣伝ですか。

「私は永遠を手に入れたい。君をね。側に置きたい。始終私の名を呼んで欲しい。そうすれば、永遠を手に入れる事ができる……」

「あり得ないからそれ。錯覚だから」

きっぱり言うと、トリスタンは「残念」と言って笑った。

「あ、あのう……」

そこでおずおずと、アーサーが口を挟んだ。振り向くと少年は、矢を拾ってきていた。トリスタンに差し出す。

「これ。取ってきました」

「おや。わざわざすまないね、人間の子ども」

そう言ったがトリスタンはしかし、矢を受け取る事はせず、アーサーを見つめた。それから俺の方を向く。

「この子は何なんだい、タカシ？ 君の弟か何かかね」

「似たようなものかな。俺の預かり。こっちに迷い込んだんだよ。フェアリー・リングに踏み込んで。だから急いで帰してやりたいんだ」

説明するのが面倒でそう言うと、トリスタンは「ふむ」と言った。

「助言が必要かね？」

「もらえるとありがたい」

助言、の一言に少し驚いたが、そう答えた。トリスタンはあまりそういう事を言わないし、しない。けれどもくれる時には的確な言葉をくれる。

白い妖精の騎士はアーサーを見下ろした。

「弟のようなものと言ったのも道理だ。君たちは良く似ている」

アーサーはもちろん、俺も驚いた。

「似てるか？」

「似ているよ。この子の方が、君より遠くはなっているが」

「何の事……？」

アーサーが訝しげな顔になる。俺も妙な顔になった。

「トリスタン、何の」

「我が一族のかけらが、はるか遠くから響いてくる。タカシ。この子は君と同じだよ。随分と薄まってはいるが」

俺ははっ、と息を飲んだ。この子。

「父方の血筋か母方の血筋かまではわからないがね」

「だからこちらに来やすかったのか」

「そうだね。まあ、随分と古い。契約ももはや記憶にはなく、破棄同然の状態なのだろうが……モーザ・ドゥーグはこの血を目当てに来るのだろっ」

アーサーは何が何だかわからないという顔をしている。けれど俺にはわかった。

この子も妖精の血を引いている。俺と同じように。

3・(前書き)

入れる予定だったアーサーの両親の名前を入れ忘れ。慌てて修正しました。

アーサーは何が何だかわからない、という顔をしている。綺麗な羽根のついた芸術品のような矢を差し出したまま、困ったように俺とトリスタンを交互に見つめた。

「ええつと……なんの」

「大した事ではないよ」

「うん、大した事じゃない」

トリスタンが言い、俺も言った。言葉は同じでも、意味合いは違う。トリスタンの『大した事ではない』は、わずかに妖精の血が混じっていても、おまえは人間に過ぎない、という意味だ。見捨てても、自分には何の問題はないのだと。俺の『大した事じゃない』は、……。

がし。

いきなり頭をつかまれ、アーサーは「ひえっ」というような変な声を出した。かまわず俺ががしがしなでると、目を白黒した。

「おうわっ？ 何なの、タカシ？」

「可愛いなーと思って」

「はあっ？ ぼく男ですよっ？」

「そうだな。強く生きる」

意味不明。という顔をされた。

「いやちよつとね？　頭なでたくなつた。妹いるし、俺」
「はあ」

「人間って好きだよ。馬鹿みたいに醜い事もするけど。でも馬鹿みたいな綺麗ですごい事もする」

アーサーは、何？　なんのこと？　という顔をしている。かまわず俺は続けた。

「だから、おまえは必ず帰してやる。無事に。家族の所に」

手を離すと、トリスタンの方を見る。文句があるなら言ってみるという風に。

「大した事じゃないだろ？」

トリスタンは呆れた風に肩をすくめた。

「酔狂すいきやうだね」

「どっちにしろ、あいつ、俺にも目をつけてるよ」

「それは許しがたいな」

さらりと言ってから、トリスタンはアーサーに目をやり、俺に目をやり。何か企んだ顔をして、ふふ、と笑った。

「それで、タカシ。私に何を頼みたいのかね？」

「頼む？」

「私には関わりのない事だ。だが私の祝福は、多少の助けにはなるのではないかね」

瞠目する。^{どつちもく}

「基本、人間には関わらないのがおまえたちだろう」

そう言つと、「氣まぐれだ」と返された。

「どうする。私に頼むかね？」

「正直、祝福とかもらえるのなら、ありがたいけれど……見返りとか要求する？」

「当然だ」

「嫁になれとか、結婚しろとか、一緒になれとかはナシだから」

そう言つと、残念そうな顔をされた。言つ氣だったのか？

「一晩過ごせとか、そういうのもナシだから」

「妙に具体的だね」

「さつきケルピーに要求され、」

「なんて事を言つんだ、あの馬妖精！ 何も悪さはされなかっただろうね？」

「……たけど、何とか逃げた」

真剣な顔で俺に詰め寄ってきた妖精に、俺は氣押されつつ言つた。

「君はあのたぐいのものに甘過ぎるよ、タカシ。あれらは憎悪と破壊から生まれた影のものだ。君が関わって良い存在ではない」

「いや、向こうから関わってきてると言うか……、割と良い奴だぞ、あいつ」

「馬妖精に感化されたのか？ 私の君が。純粹にして美しい君が！ ああ、でも、君は優しい。清らかな心の持ち主だ。あの忌ま忌ましい馬妖精に、だまされても仕方がない……許しがたい、あの馬！」

トリスタンは何やら険悪な表情になると、「やはり閉じ込めて」とか「記憶の操作を」とかぶつぶつ言い始めた。

「ええと……すみません。あなたの不穏な心の声が、音声で聞こえてくるんですが」

恐る恐る声をかけると、にっこり笑いかけてきた。

「私は君の為になる事しか考えていないよ」

「そこに俺の希望や要望が、全然入っていない気がするんですが。あなたの思惑のみがある、『俺の為』みたいなんですが！」

「いけないかね？」

「いけないに決まってるだろう！　ちよつとでもそんな真似してみろ、二度と口きかないぞ！」

叫ぶとトリスタンは、余裕の微笑みを見せた。

「タカシ。君にはまだ、わからないかもしれないけど。好きな相手を独占したいというのは、男なら、誰でも持っている感情なんだよ」

「感情を持つのは仕方ありませんが、本当にやったら犯罪です。

痴漢も犯罪です。犯罪は許しません」

「私を痴漢と呼ぶのか」

「おまえの手は今、どこにある」

さりげなく俺の腰に回っていたトリスタンの手を、俺はべしつとはたいて落とした。

「見返りをくれないのかね？」

「おまえの祝福は、痴漢が見返りなのか」

地を這うような声で言うと、トリスタンはおやおやという顔を
した。

「そんなはずないだろう。合意の上で一晩」

セクハラです。セクハラ妖精がここにいます。

「おまえそれ、ケルピーと同レベルだぞ……」

「何て事言っんだい。なら、君の心臓が百度脈打ち、その七倍にな
るまでの間ならどうかね」

それってどれぐらい。

「成人男性の心拍数が一分で六十から七十……ええっと？ 百度つ
て一分半ちよいな感じ？ その七倍……七百割る六十ないし七十……
十分強？」

思わず計算してしまい、首をかしげる。

「いきなり時間が短くなったな？」

「それだけあれば充分だよ。終わる頃には君は、私との結婚に同意
しているから」

……。

何するんですか、十分で。

「どっちにせよ、セクハラだろう。さわやかに微笑みながら言う事
か。大体十分で何する……いや、言わなくて良い！ 言わなくて！

子どもがいるんだぞ、トリスタン！」

嬉々として口を開こうとした妖精を、慌ててさえぎる。

「キス！ キス一回！ それじゃだめか？」

「一回だけ？」

「それ以上は、俺の神経がもちません」

肩を落として言うと、トリスタンはふふ、と笑った。

「いとけない君。愛しい者よ。穢^{けが}れなき君には口づけも、未知の領域にあるものか。その聖域に、最初に触れるものと、私になるのか」

誰かこいつの口を閉じてくれ！

「ほっぺたにつ。ほっぺただけっ！」

「それじゃつまらないよ」

「つまるつまらないの問題じゃない……ちょっと待て。おまえ、ものすごく目が真剣なんだけど？」

「それはもちろん」

す、と顎に手を添えられ、顔を上向きにされた。

「君の口づけをもらうのに、いい加減な態度では失礼だろう」

……。

いや。その。だから。怖くないよお嬢さん、私がリードするからね、みたいなその目、なに。

うわ。ちょっ、顔。近い。近いって！

「待って下さいっ！」

どう逃げようと思っていたら、横から叫ぶ声がした。アーサー。

「どうしてタカシとキスなんですかつ！」

「どうしてって。タカシは君を守りたいんだよ。だから私に、君への祝福を頼みたいのさ」

トリスタンが言った。アーサーが顔を歪めた。

「そんなのっ」

「必要だ、アーサー。トリスタンは魔力が強い」

いらないう言う前に、慌てて言う。ここで彼が拒絶したら、そのままそれが『妖精からの助力はいらない』という契約になりかねない。

「正直、俺一人じゃ君を守りきれかわからない。こいつはシーリコートで、暗い力をはね除ける。君には必要だ」

「だったらその場合、ぼくが代償を支払うべきでしょうっ！ タカシがキスされるんじゃないかってっ！」

子どもが叫び、俺たちはぽかんとした。

「アーサー……トリスタンとキスしたいのか？」

「違いますっ！」

念の為尋ねて見ると、真っ赤になって怒鳴られた。

「すまないね、人間の子ども。君も可愛い事は可愛いのが、

私の心はタカシの元にあるのだよ」

真面目な顔でトリスタンが言い、アーサーは憤死しそうな顔になった。

「違いますったらっ！ あなたちよつと最低ですよっ！ 人の弱みにつけこんでキスをさせるって、ひどくないですか！」

「言い出したのはタカシだよ？ 祝福の代償にキス一回」
「でもひどいです。好きな相手にする態度じゃありません」

アーサーはきっぱり言いきった。

「好きな人には、誠実に心を伝えるのが本当でしょう。弱みにつけこんで触らせるとかキスをさせるとか、そんなの本当の…… 真実の愛じゃありませんっ」

わあ。

正論です。でも何だか変です。

トリスタンの目つきが、何やら不穏なものになった。俺の側から離れ、アーサーの方に向き直る。

「言うじゃないかね、人間の子ども。私の心に偽りがあると言うのか。それとも君は、君の方がタカシに対して誠実だと言いたいのかね」

「あなたよりは誠実なつもりですっ！」

「ふ。ただの人間が、タカシに何をしてやれる？ 今でも、かばわれてばかりだろう」

「少なくとも、弱みにつけこんだりはしてませんっ！」

二人は睨み合った。何なんだ、この会話。

「私は私にできうる限り誠実に、彼に対しているよ」

「ぼくだって、ぼくにできる限り誠実に、彼に対しています」

「常に真実の愛を、彼に捧げている」

「あなたの愛は、とても真実のものには見えません」

だから何なんだ、この会話！ 男三人（内一人は妖精だが）でどうして、真実の愛について語り合わないといけないんですかつ！
しかも対象が俺って、どうかしてませんかっ！

「おまえら。ちょっと黙れ」

声をかけると二人がこちらを向いた。俺は頭痛を覚えてこめかみを揉んでいた。

「なんかこう、……変だよ、会話が。成り金のセクハラ親父と保護者の男が、世間知らずの女の子を間にはさんで言い合ってるみたい
に聞こえるんだけど」

自分で言っただけダメージを受けた。この場合、『女の子』に相当するのが自分だと気づいて。

するとトリスタンが、「どっちが成り金かね」と尋ねてきた。

「尋ねるのそこ？ おまえ」

「それはひどい。保護者と言うなら私の方が保護者だろう」

「人間の保護者は普通、保護している相手に、一晩一緒に過ごせと
か言わない」

トリスタンは黙った。衝撃を受けたらしく、「成り金」とか「親父」とかぶつぶつぶやいていた。美意識が許さなかったのかもし

れない。だが俺の受けたダメージよりはマシだろう。

唯一ダメージのなかった子どもは、元気が良かった。

「タカシ。どうして相手に遠慮するんですか。嫌なら嫌って、きっぱり断るべきです!」

「うんまあ、それはそうなんだけどね。そう言ってられない時もある。……俺の為に怒ってくれたのか、アーサー?」

地面に膝をついて目線を合わせると、子どもはちょっと困惑した顔になって目を逸らした。

「ぼくの為に、嫌な相手とキスをしなきゃならないなんて、……そんな犠牲、あなたに払わせたくありません」

いや犠牲と言うか……犠牲なのか? 俺が女の子なら許しがたい事態だけど、俺、男だし。

トリスタンが眉を上げた。

「言うじゃないかね。言っておくが、私とタカシは長い付き合いだ。彼は恥ずかしがり屋だから私の求めに応じないが、それでもわたしたちの心は、つながっているのだよ」

つながってはいないと思う。

「それに一度でも私と口づけを交わせば、タカシは私の虜になる。嫌だなどと言うはずがない」

……なんでそんなに自信満々なんだ。

「トリスタン……ちょっと黙ってる。話がややこしくなるから」

俺が言うと不満そうな顔をしつつ黙った。

「アーサー。ここは妖精の世界で、妖精の法則で全てが動いている。あの黒妖犬は、俺と君に向かってきた。人間である俺たちだけじゃ、多分逃げ切れない。……まず、この事を理解してほしい」

静かに言うと、アーサーは黙って俺を見た。

「俺は君と約束した。君を必ず家族の元に帰すと」

「でも、それは」

「約束は守るものだ。そうだろう?」

微笑んで、俺はアーサーの頭をなでた。

「妖精にとって、言葉はとても重要なものなんだ。約束は決して破らない。トリスタンが君に祝福をくれると言ってくれたのは、とても稀で、好運な事なんだよ。代償が俺のキス一つなら、安いぐらいいだ」

「ぼくの事なら、ぼくが代償を支払うべきです」

アーサーは頑固に言った。そこでトリスタンが声をかけた。

「おまえでは支払えないよ、人間の子ども」

「なぜですか」

「私が手助けしたいのはおまえではなく、タカシだからだ。おまえは私がかしてやりたいと思うほどの物を、何も持っていない。今の時点では。おまえは、タカシに守られているだけの存在なのだよ。私と何かを交渉する権利も何もない。」

言っておくが、ここで出会ったのがおまえだけであつたなら、私

はおまえを見殺しにした。

タカシは我々にとって大切な存在だが、おまえは迷い込んだだけの、何も持たない子どもに過ぎない。気を惹かれる事も、興味も何も持てない、ただの人間だ。我らはタカシの意思を尊重するがゆえに、おまえに対して寛容であるうとしている。だが、それだけだ。それだけに過ぎない。

己が立場を自覚するが良い、人間の子ども」

アーサーは目を見開いた。何か言おうとして、でも言えなかったらしい。黙って唇を噛んだ。

「トリスタン。言い過ぎだ」

「事実だろう。タカシ、君、この子をかばって黒妖犬の標的になつたりしていないかい」

モーザ・ドゥーグ

俺が黙っていると、トリスタンはふうと息をついた。

「答えない所を見ると凶星だね。君は本当に、小さなものや弱いものに対して甘いね」

「趣味なんだよ」

「そうか。だが、それで隙を見せるのは感心しないね。『成り金のセクハラ親父』とやらに」

苦笑気味に言うつと、トリスタンは俺に近寄ってきた。俺が立ち上がると、ひょいと腕を伸ばして抱き寄せた。

「おい」

背後から抱きつかれる形になって、俺はちよつともがいた。白い騎士はかまわず抱きしめると、耳元に唇を寄せてささやいた。

「隙を見せてはいけないよ。私たちは人間ではないのだから。どれほど好ましい姿をし、人間に似た所を見せたとしてもね」

「トリスタン……？」

「軽々しく口づけを取引に使うなんて。私に対して。私がどういう存在か、わかっているのかね？ 本気で口づけを交わしたら、一度で君の理性は消えるよ。メロメロの腰くだけになって、私の言うなりだ。人間の尊厳とやらを全てはぎとられて、戻れなくなってしまう。……そうになったらそのまま、連れて行こうと思っただけだねえ」

「メロメロ……どこで覚えてくるんだ、そういうフレーズ……」

そう言いつつ、ぞっとした。トリスタンがそう言うのなら、多分本当にそうなのだろう。

「理性の消えた俺が欲しいのか？」

「君が君であるのなら、私には変わらない」

「大きく変わると思うけどな。そうになったらそれは、俺じゃない」「それでも君を手に入れる事はできる」

トリスタンは腕の力を強くした。

「人間を見ているのは、正直言つてつらい。すぐに死んでしまうから。君が死ぬのは見たくない。それよりは傷をつけても、歪めてもかまわないから、摘み取って自分の手元に置いておきたい。君に対してそう考える者は多いよ、タカシ。私を含めてね。気をつけるんだ。私たちに隙を見せるな」

「……」

妖精が人間をどう思っているのか、……時々考える。

妖精の感性や感情は、人間とはかなり違う。それでも時に、誰かを愛する事はある。ばあちゃんのように。

ばあちゃんは、じいちゃんを好きになって、結婚して、子どもを産んだ。でも妖精のばあちゃんと、人間のじいちゃんでは、寿命が違い過ぎた。じいちゃんは天国に行つて、ばあちゃんは妖精の世界に戻った。

そうして妖精は、人間と同じ天国には行けない。地上で別れてしまえば、二度と会う事はできなくなる。

喪失の先の長い命。

愛した相手が失われ、二度と会えない痛みを抱えて生きるのは。存在を続けてゆくのは。どこかがねじれたり、冷酷さを備えたりするのには、充分な理由だろう。

彼らが時に、人間を誘拐して閉じ込めたり、やたら魂を集めたがるのは。その辺が起因しているのかもしれない。

……かと言って、その行為を肯定できるわけでもないが。

「傷つくのも嫌だし、歪むのも嫌だな」

「なら、気をつけたまえ」

「そうする。ありがとう、トリスタン」

まだがっちり俺を抱きしめている男に、どうしようか考えてから、拘束されてうまく動かせない腕を何とか上げる。俺の肩に首を乗せるようにしている男の頬を、ぺちぺちたたいた。

「なんだい」

「いやちよつと。動かせないんで。腕」

「なら、じつとしていると良いよ」

「それもどうかと……離して欲しいんですが」

「離すと君は逃げるだろう」

「それはもちろん」

「もちろんなのか」

ぎゅうと力を入れられた。ぐえ。

「ぐ、ぐえ、みぞおち、みぞおちっ！ 力弱めろ、食ったもの出る
！」

「だって逃げるじゃないか」

「逃げないから！ 体折れる！ 酸欠になるっ！」

じたばたしながら言うと、ふーと息をつかれた。腕の力が弱められ、俺は、ぜえはあ息をついた。

「おまえ、力強いんだからさ……加減してくれよ」

「君が弱過ぎるんだよ」

「現代人はこれで標準だよ。剣も槍も日常装備じゃなくなってるんだから、筋力衰えて当然だろ」

白い騎士はまだ背後から抱きついている。

拗^すねてるのかなあ、と思った。

片手を持ち上げると、今度は前より高く上がった。俺の肩に完全に顎を乗せてしまっている彼の頭をそれで、よしよしとなでた。

「……その子どもと同じ扱いかね」

「初めて会った時には喜んでたぞ。こうしたら」

「ほとんど自分を失っていた。大維^{おおいっは}把^はな感情ぐらいしかなかったからね」

「こう言ったらなんだけど、小犬に懷かれた気分だったよ。おまえ、俺の後ついてまわってたし」

「私は犬かね」

「可愛かったよ。あの頃のおまえ。ぼーっとした感じで。いつもに

ここにこして歌ってた。守ってやらなくちゃって俺、思ってたんだぞ、子どもながらに。その相手にいきなり拉致^{らうち}られて、監禁されるなんて思わなかったし。……ショックだった、あれは」

あの時は、本気で悲しかった。自分の見ていたものが、綺麗で優しいだけのものではなく、危険をはらむものでもあったと、無理やり気付かされて。

ぼんやりした感じで優しく笑って、歌を歌う彼が俺は、好きだった。

でもそれは……本来の彼ではなかった。俺が見ていたのは、ただの幻想だ。自分にとって都合の良い夢を俺は、消えかけていた彼に重ねた。

悲しかったのも、傷ついたのも。だから、彼のせいではない。俺が間違えていたのだ。最初から。

それでもどこかで覚えてしまう感傷は……俺の弱さだ。本来の自分ではない姿を見せていたトリスタンにしてみれば、失礼も良い所だろう。

「君を愛しているからやった。私に恥じる所はないよ」

俺の思いに気付いているのか、そうでないのか。トリスタンは堂々と言い切った。顔を動かし、ちゅ、と俺の頬に口づける。

「ああっ」という声がアーサーから上がった。挨拶のものより少し長かった気がしたが、やがて唇が離れた。

「今ので契約？」

「不本意だが我慢しよう。挨拶と変わらないじゃないか、これでは」

「あー、まあ……うん」

悪かったかなという気がして、どうしようかと考えた。けれどそ

の前に白い騎士は腕をほどき、俺から離れた。

「君の頼みでなければ、指一本動かしたくないのだよ。人間の為などには」

何だかむつつりした感じで言う。

「しかもこんな生意気な人間」

「すみません。よろしく願います」

謝ってしまう日本人な俺。するとトリスタンは、更にむっとした顔になった。

「その子どもの為に君が低姿勢になる、それが腹立たしい」

「そうですよ！ タカシはもつと毅然^{きぜん}としていて下さい！」

騎士の言葉に、なぜか同意するアーサー。おい。

「いや……アーサーは俺の預かりで弟みたいなものだし、頼んでるのはこっちだし……なんで君が怒るの、アーサー」

「タカシは誰にも頭を下げちゃ駄目です」

子どもはきつぱりと言った。何それ。

「ぼくはあの時、感動しました。一晩付き合えと言ったあの妖精を、言葉と態度で翻弄^{ほんろう}して、最後にはひれ伏させてしまった。すぎる相手を足蹴^{あしげ}にしようと言っばかりの冷酷な対応。王者の余裕に満ちた傲慢^{ごうまん}なまでの笑み。あなたは常にああでなくては」

「そんな事したの、君？」

トリスタンが俺を見る。

「足蹴……はしてない。傲慢な笑みって……アーサー、君、目に何かフィルター入ってる？」

「ぼくは、見たまを言ってますよ！」

「馬妖精を冷酷にひれ伏させ……是非見たかった」

「だからそれは誤解……なに喜んでるんだ、トリスタン」

「ふふふ。あの鬱陶^{うつとう}しい馬をタカシが足蹴に」

「してないから。俺は単に説得、」

「すぐりつく彼を、いたぶってました」

「素晴らしい」

「おまえら、人の話を聞け！」

怒鳴ってしまった。実は気が合っくんじやないのか、二人とも。

幸運をあげよう、とトリスタンは言った。

「わずかなものと大きなものと、どちらが良いかね？」

「どちら……」

アーサーは困った顔になった。

「わずかなものより、大きなものの方が良いように思えるけど……何かありますか」

俺を見る。

「言葉遊びや、言い抜けが好きな連中だからね……。トリスタン。

わずかなものと大きなものとの違いは、どこにある？」

「わずかなものは長く続く。大きなものは一度だけ」

歌うように言う彼に、「ほらな」と俺はアーサーに言った。

「どっちが良いんでしょうね」

「場合によるね。一度で使い切るのが必要なほど、ひどい状況の時もあるから。でも今回はそこまでじゃない。……多分」

俺はトリスタンに尋ねた。

「幸運を使い切ったら、不運が来るとか、そういう代償みたいなのはあるのか？」

「それは、それぞれの人の持つ運命にもよるね」

「運命？」

「本来の状態がひどい人間ならば、不運がやってくるだろうさ。そうでないのなら、それなりだ」

俺はアーサーの方を見た。通訳する。

「もらった幸運に頼りきりにならずに、普段から自分に幸運がやって来るよう、努力しろって事らしい」

「努力したら来るんですか、幸運？」

「そのたぐいの本は山ほど出ているから、興味があるなら読んでみたら良いよ。要は、物事がうまくいった時には、自分以外のものに大いに感謝して喜びましょう。うまくいかなかった時には、自分自身をしっかり見て、何が足りなかったのか検討し、問題点を改善しましょうって事だな。逆にしてる人間多いから」

「逆……うまくいった時には自分の実力で、悪い時には自分以外のもののせいだから何もしない？」

「そういう人多いよ。よくわかったね？」
「ぼくの側にもいますから。そういう人」

妙に大人びた表情をしてからアーサーは、「わずかなものの方を選びます」とトリスタンに告げた。

「大きな幸運を一度にもらっても、今のぼくでは使いこなせない。でもわずかなら、少しずつでも、もらった幸運に対応できると思います。だから、わずかなものの方をもらいます」
「その矢を」

トリスタンは、アーサーが持ったままだった矢を示した。アーサーが差し出すと、受け取ってから指ですつとなでた。形が崩れる。

光の粒子になるとそれは、手のひらほどの大きさの、矢の模様をあしらった、丸い銀のブローチになった。

「ちょっと大きいぞ」

俺がのぞきこみつつ言うと、彼はおや？ という顔になった。

「こんなものではないかね？」

「現代では、あまり大きな装飾品は身につけない。小さなものを、ほんの少しだけつけるんだ」

「美しくないね」

「プライド（マント）やフェーリア（キルト）がすたれたから。俺の着ているもの見たらわかるだろ？ シャツ、ズボン、ジャケット。布地はボタンやファスナーでとめるから、大きなブローチはつける必要がないんだ」

「ふむ」

トリスタンは俺のジャケットを一瞥すると、もう一度指でブローチをなでた。ブローチは小さくなった。銀のボタンになる。

「これなら良いか？」

「ああ、これなら……」

トリスタンは出来ばえを確認するかのように見つめてから、アーサーに目をやった。

「さて。では、名乗れ、人間の子ども。私におまえの名を告げよ」

そう言われてアーサーはまばたいた。

「名前……？」

「君の名前と、両親の名前を告げて」

ささやくと、彼はうなずいた。

「ぼくは、アーサー。父の名はアルフレッド。母の名はメアリー・エレン」

「大層な名前だ」

皮肉げにトリスタンが言い、俺は口を挟んだ。

「現代の言葉では、名に込めた意味はあまり考えない」
「大層な名である事は確かだ。妖精の王とはね。聖母と鹿の組み合わせ
わけせも、どうかとは思うが」

しかし彼は、それ以上は言わず。型通りに自分の力を分け与えて

くれた。

「アルフレッドとメアリー・エレンの息子、アーサー。名に猛き獣イノシシを持つもの。りんごの木祝福を司る者として、我が息吹を与えよう。その身に幸運があるように。印を受け取るが良い」

ボタンに唇を寄せ、ふっと息を吹きかける。その途端、銀のボタンは光を放ち、模様が生きているかのように蠢いた。しかしそれは一瞬の事で、すぐに輝きは薄れた。

「取れ」

トリスタンが差し出すそれを、アーサーは恐る恐るという風に受け取った。小さなボタンを、少し恐れを込めたような目で見下ろす。俺の目にはしかし、トリスタンの息吹がそこに込められているのが見えていた。小さな火花のようなものが宿っている。とても小さな力。でもこれは、彼に幸運を引き寄せるだろう。大きくはないが、ほんの少し。何かあった時には心を支えてくれるような、小さな幸運を。

「良かったな、アーサー。トリスタンはこういうの、うまいんだよ。それはきつと、君を守ってくれるだろう。つけてごらん」

俺が声をかけると子どもは少しもたついたが、銀のボタンを自分の服の襟につけた。針がついていたので、ブローチ状態だったのだ。俺はトリスタンの方を向いた。

「ありがとう、トリスタン。あれは……ここから出た後も有効か？人間の世界に戻っても」

「多少は影響が残るだろうね」

それなら、喘息も少しはよくなるかもな、と俺は思った。

「本当にありがとう」

「君にそこまで礼を言われる事ではないよ。気まぐれだ。永久的なものでもないしね」

「そうなんだ？」

「子どもに与えるような祝福だ。役目を果たし終えたら、自然と彼の元から離れるだろう」

「あ、あの、……これってなくしたら、幸運もなくなるんですか？」

アーサーが尋ねる。トリスタンは答えた。

「そのものに幸運があるわけではない。ただの印だ。私が祝福を与えたという。だがそれは印であるから、なくせば契約もそこで終わりという事になるな。私を与えたのはしかし、小さなものだ。幸運を招き寄せるようにはしておいたが、ごく小さなものに過ぎない。わずかな底上げ。それだけだ」

穏やかにトリスタンは言った。

「だが与えたのは確かだ。うまく使え、人間の子ども」

「あの……ありがとうございます」

アーサーが言う。トリスタンは皮肉げな笑みを浮かべてから、俺の方に向き直った。

「君にも祝福をあげようか」

「俺？」

「祝福というより魔よけかな」

俺の手を取ると、手の甲にキスをする。

「えっ、あっ？」

「悪しきものが君に近づかないように」

そう言った途端、彼の唇から何かが俺の手に流れ込んだ。きらめく何か。

唇が外れると、手の甲に何かの印がついている。それはしばらくきらめいていたが、やがて消えた。

「これ……」

「魔よけ」

トリスタンは悪戯めいた笑みを浮かべた。

「代償はいらない。これは私の心だから」

「ええと……ありがとう」

「礼もいらない。私がしたくてした事だ」

ふふ、と笑う。

「どうしても気になると言っのなら、祝福をもう一つ、受けてくれるかね？」

「もう一つ？」

トリスタンは真面目な顔になると言った。

「いつか君が妖精の男と結ばれる時には、喜びのみがあるように」

……。
なんて不吉な事をくくっ！

「祝福じゃないだろ、それ！ 呪いだろ！」

「なぜ。私は優しいよ？」

「おまえ限定？ おまえ限定の呪いなのか、それ？ 忘れてるみたいだからもう一度言うけど、俺が好きなのは女の子だから！」

「なぜそうも、あるべき自分の未来から目を逸らすのだね？」

「未来は自分で切り開くものだ俺は思うからですっ！」

泣けてきた。

「しかし君は、いつかそうなる運命だよ。私にはそう見える」

「俺には見えません、そんな運命！ トリスタン。言葉で俺に縛りかけろの、やめてくれ」

睨むと彼は、ふふ、と笑った。

「なんだ。気づかれたか」

「気づくだろっ、普通」

この妖精は、言葉に力がある。語る言葉で相手を縛り、魔法をかける事ができるのだ。それほどあくどい事はしないが、たまに気まぐれのように言葉を投げかけてきて、俺を自分の支配下に置こうとする。

「君の意志は、どうしてこう固いのかな。少しはぐらついてくれれば良いものを」

「ぐらつきたくないからです」

「私は美しくはないかね？」

「俺が女の子なら、ぼーっとなるかもしれません。でも俺、男ですから。頼むからあきらめてくれよ、トリスタン」

「……まあ。今回はあきらめようか。それなら、君の方から私に口づけてくれないかね？」

「えっ」

「それで我慢してあげるよ。嫌なら良いがね」

言われてちよっと考える。それぐらいは……しないと駄目かな。さすがに。何だかんだ言って、色々力貸してくれてるし。うっかりミスで危なかった俺を、大目に見てくれたし。代償なしで魔よけまで。

これで、ありがとう、バイバイでは、自分がひどい人のような。うーんと思っただが、頬にぐらいなら良いだろうと、彼の肩を抱き寄せた。挨拶で良くやるしなと思いつつ。

唇を寄せようとした所で、がし、と後ろから襟首をつかまれる。えっ？

「はうつ？」

思い切り引つ張られて、のけぞった。次の瞬間、ばちばちと火花の散る音がして、「痛えっ！」と叫ぶ声がした。

「一体なに……ケルピー！」

振り返ると、黒髪の若者が、顔をしかめて立っていた。手からぶすぶすと煙が出ている。

「ちよっ、何だそれ！ どうし、」
「おわあー！」

慌てた俺が彼に触れようとすると、またもやばちばちと火花が散った。俺の手の甲に、銀の印が浮き上がった。慌てて手を引く。ケルピーの腕の、俺が触れた所は、焦げたようになって煙が上がっていた。

「な、なんで」

「効果があつたようだ。魔よけの」

あつさりと言う声がして、トリスタンがにこやかに俺の横に立った。

「良かったね、タカシ。その馬はもう、君に触れる事ができないよ」「魔よけて……ええ？　そういう事！？」

「この根性悪の糞シーリーコート！　なんて事しやがるっ！」

ケルピーがわめく。トリスタンは涼しい顔だ。

「美しい花にまわりつく害虫を、私がそのままにしておくと思つたのかね？　滅ぼされたくなければ去れ、馬妖精」

「んだと、根性ねじまがりの陰険屋！　おまえみたいなのが側にいたら、タカシの貞操が危機一髪だろう、今何してたっ！」

「うらやましいか」

「ものすつごくうらやましいわっ！」

言い切るケルピー。こうまでストレートに言われると、何やら清々しい。内容はともかく。

「精々悔しがると良いよ」

トリスタンが俺の肩を抱き寄せる。ケルピーがぎゃあつとわめい

た。

「離れる陰険シーリーコート！」

ばちばちばちちっ！

飛びかかって俺を抱き寄せようとして、また火花に弾かれた。ぶすぶすと煙を上げて、ばったり倒れる。学習しようよ、ケルピー…。

3・（後書き）

名前についてですが、アーサー、という名には「イノシシ」という意味があります。猪太郎とか猪介くんですかね、日本語にしたら（笑）。

アルフレッドは、アルフ（妖精）＋レッド（王、指導者）、超自然的な力を持つ指導者、という意味だったみたいです。

メアリーは聖母マリアから。エレンにも妖精の意味があります。ウエルズの方では鹿、の意味があったらしい。

「つまり、急に消えてしまった、と」

俺はケルピーに確認した。黒髪の男はうなずいた。

「ああ。おまえたちが、いなくなつてすぐに。そっちに行つてるとは思わなかつた」

トリスタンが、ちらりと彼を見やつて言う。

「役に立たない馬だ」

ケルピーは、明らかにいらだつた顔になった。

「うるせえよ、糞シーリーコート。犯すぞ」

「ケルピー！ 子どもの前で悪い言葉を使つな！」

「ごめんなさい、もう言いません」

俺の前では今、煙をあげる男がうずくまっている。隣にはアーサーがいて、トリスタンとの間に距離を作つてくれている。色々あつて、これが一番良い位置関係だという事になった。

トリスタンが挑発しまくるので、ケルピーが何度も俺に触れようとして、黒こげ寸前までになったのだ。アーサーが間に入って、何とか会話らしい会話ができるようになった。

「駄目です、トリスタンさん。それ以上タカシに近づかないで」

それまでの経緯も見てきたアーサーは、彼が要注意であると判断

したらしい。やや緊張した顔で、俺のガードをしてくれている。

「私は君に幸運を授けたというのに。恩知らずだね、人間の子ども」
「タカシに対してより多く、恩を返す必要を感じています。話が混乱しますから、離れていて下さい」

何だかしっかりしている。九歳なのに。

「モーザ・ドゥーゲ黒妖犬って、どんな行動が普通なんだ？ 瞬間移動みたいな事もできるのか？」

ケルピーは首を振った。

「良くは知らない。俺たちは基本、他のやつらに興味ないし」
「トリスタンは？ ホースト亡者の群れ…… ガブリエル・ラチエットガブリエルの猟犬とか、詳しくあったよな」

「あれは、必要があってね。黒妖犬については良く知らないな。あまり関わる事もないし」
「うーん……」

俺は困ってしまったて、首をかしげた。

「なんでアーサーに目をつけたのかなあ？ 俺に関しては、騒いだ自覚があるけど。アーサーは理由がわからない」

妖精の血を引いているからだろうか？

「黒妖犬って……そもそも、どういうものなんだ？」

トリスタンは、ふうと息をついた。

「アンシーリーコートについては、あまり口にしたくないのだよ。けれどそっちの馬は、頭が悪そうだしね……」

「なんだと、陰険騎士。頭が悪いのは、おまえもだろう。名前をど忘れしてるくせして」

「タカシが新しく名前をくれたから、問題ない」

涼しい顔でさらりと受け流すと、トリスタンは「あれは独自の判断で、色々やるんだよねえ」と言った。

「普通は、まあ。思ってもいない所に現れて、不用意に近づいたり攻撃しかけてきたりする人間に、恐怖と死をもたらしっているね。基本は何もしないけれど。人間側が何か反応したなら、そっちに向かう。そういう感じだよ。でも時に、自分の判断で人間を追いかける事もある」

「そうなんだ？ どんな人間を追いかけるの」

「猟犬たちにもそういう性質があるが……、罪を犯したり、穢^{けが}れた魂を持つ人間だ。そういう魂を狩り出して、追いかけたくなるみたいだね」

アーサーがびくりとした。俺は眉をしかめた。

「アーサーが何か罪を犯したと？」

「さあ」

「俺も何かしたのか、そうしたら」

「それはない。だから多分、あれは普通ではないのだろう」

あっさりとトリスタンは言った。

「あるいは、この人間の子どもの、家系にまつわる因縁からかもし

れないね。何かの契約があつて、それを守らなかったとか」
「ぼくの……」

アーサーは何か考え込むような顔になった。

ばちっ。

そこで火花が散る。ケルピーが俺に手を伸ばそうとして、弾かれたのだ。煙を上げる手を抱えて、ケルピーはうずくまった。

「ケルピー。俺に触ると火傷するって、わかってるだろう。効果が切れるまで、近づいたらだめだ」

「だって、タカシがすぐ側にいるのに……」

うっう、と唸ってまた手を伸ばしてくる。

ばちばちっ。

「触れないいい。触りたいいいい」

煙を上げながら煩悶はんもんしている。そんなに悩む事ですか。

「そのままどこかへ行ってしまうえ、アンシーリーコート。見苦しい」

トリスタンが冷たく言った。ケルピーが、がーっと怒りだし、そのはずみにまた俺に触ろうとして弾かれた。あちこち焦げつかせて

ばったり倒れた彼を見て、俺は息をついた。

「トリスタン。外してくれないか、これ」

手を差し出す。甲には銀に輝く印。

「なぜ。それがあれば君は安全だよ」

「このままだと、ケルピーがその内、回復しきれないほど大怪我をする」

「どうでも良いだろう、そんな馬」

醒めた口調で言うてから、トリスタンは付け加えた。

「それにあの黒妖犬は君も狙っているのだろうか？」
モーザ・ドゥーグ

俺は眉をひそめた。

「それとこれとは……」

「関係あるよ。君の事だから、出くわしたら自分に注意を向けようとするだろう？ この子に向かわせまいとして」

アーサーの肩がびくりと震えた。トリスタンはかまわず続けた。

「触れられたら、君でも命はないよ。あれは生あるものには、死そのものとなるからね」

「つけとけ、タカシ。おまえに万が一の事があつたら、悔やんでも悔やみきれん」

そこで煙を上げていたケルピーが、顔を上げて言った。

「俺はこう見えても、アンシーリーコート悪しき妖精の中ではそれなりの魔力を持っている。その俺を出し抜いて、あいつはおまえらを追いかけた。甘く見るな」

「自分の不手際を言い訳するのには、良い理由だね？ 馬妖精」

トリスタンが言い、ケルピーは「むきーっ」と言っただんぎしりをした。とことん気が合わないらしい。

「この根性曲がりの、腐れシーリーコート！ あちこち喰いちぎって、ヒイヒイ言わせたるか」

「子どもの前で、汚い言葉を使うなってば！ トリスタンも挑発しないでくれよ。ケルピーは、俺たちに協力してくれている。さっきは体を張って助けてくれた」

「ふん」

トリスタンが顔を背けた。俺は息をつくとき、ケルピーに触らないよう注意しながら、彼の前に膝をついた。

「大丈夫か？」

「ああ、これぐらいは……」

「人間だけじゃなくて、妖精も食べるんだ？」

しまった。という顔をして、ケルピーは視線をそらした。

「俺は雑食なんだよ」

「それは知ってるけど……他のものじゃ駄目なのか？ 食べるもの」

ケルピーは困った顔になっている。

「食い物は、……酒でも肉でも。フォイン本質を食つとけば、存在の維持は

できる。だがアンシーリーコートにとって、生あるもの、形あるものを破壊するのは、本能みたいなものだ。俺にとっては、恐怖も食事の一つなんだよ。おまえとの約束だから、人間は喰わない。だが、それ以上は約束させないでくれ。俺自身の魔力が枯渇する」

「そうでない……駄目なのか？」

「俺はアンシーリーコートなんだよ、タカシ。そんな顔をするな。おまえの前ではやらないよ」

「そういう問題じゃないよ……」

「そういう問題さ。俺は、何かを壊さずにはいられない。生あるものを滅びに引きずり込むのに、快感を覚える。おまえにはしないが。おまえは生きて笑っている方が可愛いし、綺麗だ」

「だからこそそのアンシーリーコートだ。近づかない方が君の為だ、タカシ」

トリスタンが、後ろから声をかけてきた。俺は首を振った。

「俺は人間だから、おまえたちの事良く知らないし、わからない。甘いのもしれないけれど、……ケルピーは変化しようとしてくれた。そういう所が俺は、嫌いじゃないんだ」

「甘いね」

「ああ。本当に甘い」

トリスタンの声になぜか、ケルピーまでが同意した。

「おまえ、気をつけないと、いつか俺に喰われるぞ。俺は、おまえと同じ存在じゃない。俺に人間の心を投影するな。……そんなものは持っていない」

「そうか？」

「そうだ」

水棲馬の化身の青年の目は、深い淵のようだった。見た者を奥底に引きずり込む、餓えたような何か。純粹過ぎて人間には持てないだろうその目は、近づいた者を破滅に誘う何かを持っている。

一瞬、くらりとした。

「そのものの目を長く覗き込む事は、破滅への道を歩み出した事と同じ。人間にはね」

そこでそう言う声がして、はつとなる。トリスタン。

「何かを隠しているように見える。誘惑されているように見える。けれどその実体は、憎悪と破壊。壊してやりたいという欲望だけ。……それがそのものの本質。それがアンシーリーコート」

冷たい指が俺の頬に触れ、シーリーコートの青年がすぐ側にいて跪き、俺の頬に手を伸ばしている事に気づいた。あっさりかわされてしまったアーサーが、「ああっ」と声を上げているのを無視して彼は、俺を至近距離で見つめた後、微笑んだ。

「君が何を、私たちに投影しているかは知らないがね。それは幻想だよ、タカシ。私たちに対する時は、常に君が優位に立たなければ、そうでなければ囚われて、人間としては終わりだ」

トリスタンの瞳の色が、薄桃色から変化している。じわりと滲む琥珀色。

「それが嫌なら、支配するのだね。私たちを」

「……そういうのも、嫌なんだよ」

「なぜ？」

「友だちを……支配したいなんて、思う人間はいない」

「そう。でもそれができないのなら、君に人間としての未来はない」

綺麗な琥珀色。

いや、違う。金色。

彼の瞳。

光。

目眩がした。彼の瞳には力と魔力があり、ケルピーとは正反対の、引きずり込む魅力に溢れていた。目が離せない。一瞬で、その瞳以外何も見えなくなった。息すらできない。動けなくなった俺に微笑みかけて、トリスタンが顔を寄せてきた。その途端、

ばちばちばちちっ！

ぐい、と引つ張られて地面に倒れた。「ぐおおっ！」と悲鳴が上がった。目を上げた先で、黒こげ状態のケルピーが、ぶすぶす煙を上げて倒れ、ぴくぴくしていた。

「ケルピーさん！ 身を張ってタカシを守るなんて……なんて献身的なんだ」

アーサーが言う。いや、献身的って？

「タカシ、こっち！ なに呆然としてるんですか」

「あれ、いや、あの」

ぐい、と子どもに手を引かれ、俺は目を白黒した。今、何が。どうで、どうして、どうなったんですか。

「君、無防備すぎるよ。そこも可愛いけど」

トリスタンが、のんびりとした風に言った。瞳の色が薄桃色に戻っている。

「あつさり魅了にひつかかるような無様を晒して、私を失望させないでくれないか？」

「魅了……かけてたのか、今っ？」

シーリーコート of 魅惑の魔法なんて、まともにくらったら、……あ、危なかった。危なかった、俺！

「ふふ」

笑ってから、トリスタンは立ち上がった。

「かけたよ。かけるに決まっているじゃないか？ 君が隙を見せたんだから。それは私にとって、誘惑して欲しいって誘われたのと同じだよ」

誘ってません！

「良かった、間に合って。ホントに危なかったんですよ、タカシ！」

アーサーが俺の腕にぎゅっとしがみつながら言う。

「ケルピーさんが引つ張らなかったら、確実に唇を奪われていました。ありがとう、ケルピーさん。命をかけてタカシを守った、あなたの犠牲をぼくは忘れませんっ。どうかぼくたちの胸の中で、美しい思い出になって下さいっ」

興奮しているのか錯乱気味なのか、言っている事が変だ。何だかアーサーの性格が、少し壊れてきたような気がする。

「まだ滅びとらんっ！ 勝手に思い出にするなあっ」

叫んで、ケルピーが立ち上がった。まだ煙があがっていたが、すごい回復力だ。

「そのまま滅びてしまえば良かったのに」

残念そうに、トリスタンが言った。

「おまえみたいな、陰険色魔野郎の前にっ！ タカシを残して滅びていられるかっ！」

陰険色魔野郎……。

「エロ妖精と張りますね」

アーサーが言い、トリスタンは眉を上げた。

「何だね、そのエロ妖精と言うのは」

「タカシがケルピーさんに贈った名前です」

アーサーが言い、トリスタンは「ほう」と言った。

「エロ妖精。なるほど」

「うるせえよ。おまえに言われたくない、陰険色魔」

「タカシに言われるような、不埒な真似をしたのではないのかね、ふらち

工口妖精」

トリスタンとケルピーが、睨み合った。

「手足ばらばらにして端から食いちぎってやるつか、色魔騎士」

「剣で八つ裂きにされたいのかね、工口馬」

「腹かつさばかれて、生きながら犯されたいか」

「手で触れるのも忌ま忌ましいな。矢で射抜いて磔はりつけにでもしたら、清々しいか」

「ははは」

「ふふふ」

笑い合う二人は、恐ろしく不穏な空気を漂わせていた。アーサーが俺にしがみついた。

「な、なんか怖いです、タカシ」

「心配するな、アーサー。俺もだ」

俺は少年を抱き返してやりながら、このまま逃げてしまおうかと、半ば真剣に考えていた。

四人全員で、ぞろぞろと歩く。ケルピーが知っている、人間世界と妖精郷との接点に、ともかく向かおうという事になったのだ。

なだらかな緑の丘。穏やかな甘い空気。花々が咲き乱れ、水晶や貴石が光を浴びて虹を作り出し、小川は鈴が鳴るような音を立てて流れている。

美しい場所。美しい風景。

そんな中で俺たちの所だけ、不穏な空気が渦巻いていた。

「とつとどこかに行ったらどうかね、馬妖精。彼の身は私が守る。おまえのように薄汚い馬の手は、必要ない」

「けっ。手出しする気満々の癖しやがって。おまえの指図は受けねえよ、色魔騎士。タカシは俺のだ。俺が守ってやるんだからな」

「はっ。馬には知恵らしきものが宿る頭もないのか。私と共に暮らすのが彼にとつては一番良いと、なぜわからない」

「タカシは嫌がってるじゃねえか。魅了使ってる時点で丸わかりだろ、おまえとは行きたくないってさ。大体、使うって事自体、自信のなさの現れだよなあ」

……ずっと、こういう会話が続けている。俺の背後で。

「貴様のようなものが側にいると、彼の目が穢れる。身の程を知ってどこかへ行け」

「おまえみたいのが側にいたら、タカシが泣く事になるのはわかりきってるだろうがよ。こいつの意志を無視して、支配する気満々のくせして、大きな口たたくな」

「私が彼を、泣かせるわけがないだろう。何よりも大切にして、宝石のように磨き上げ、昼も夜も私の腕の中で、宝物のように扱うさ」
「タカシの魂は、閉じ込められたら窒息しちまわあ。好きなところ駆け回るのが綺麗なんだよ。俺と一緒に野山を走る方が好きに決まってる」

黒妖犬と出くわすのと、どっちが怖くないかなー、と意識が現実逃避しかけた。ひよっとしたら、黒妖犬も逃げるかもしれない。それほど不穏な空気が、俺の背後からびしびし漂ってくる。

アーサーが、つかんでいた俺の腕をそっと引いた。

「もてますね、タカシ」

「もててるのか、この状況。どっちも男だぞ」

「嫌われるよりは、良いのじゃないでしょうか」

「俺は、友情の範囲内の好意が欲しかったよ……」

背後での会話は続いている。

「絹でその身を包み込み、黄金や真珠、水晶で飾る事が、貴様にできるか。貴様にできるのはせいぜい、生肉を差し出すぐらいだろう。それぐらいが関の山だ」

「風を切って走り、大地に眠る楽しさを知らねえのか。俺はタカシを背に乗せてどこへだって行けるし、走れるさ。必要なモンは、その辺の妖精を脅して手に入れるしな」

「盗品で、彼の歡心を買おうと言うのか。下賤な妖精の考えつきげせんような事だ」

「寶石でご機嫌取ろうとしてる奴が、何言いやがる。俺のタカシは、そんなもん迷惑されたりしねえんだよ」

「誰が貴様のものだ！」

「へっ。おまえのじゃないのは確かだな」

聞いていると精神衛生上、良くない。ものすごく良くない。俺は内容をできる限り耳から遮断して、アーサーとの会話に集中する事にした。

「アーサー。君の家族の事だけど。古い家系じゃないの？」

「え？ ああ、そうですね。父の方も母の方も、古いと思います」
「妖精の話とか、伝わってない？」

「うーん……それが。母は割と夢見がちな人で、そういう話も聞きました……でもあくまでも、普通のおとぎ話でした。黒い犬の話、なんてのはなかったな」

俺は、ちょっと考え込んだ。アーサーは知らないが、トリスタンの言う通りなら（そして彼はこういう事では間違わない）、彼は妖精の血を引いている。そういう家系の子どもだ。

あの黒妖犬はそうして普通ではないとも、トリスタンは言った。知らずに契約を破ってしまったのか。それともそんなものは何もなくて、単に偶然で。アーサーの運が悪かっただけなのか。

……けれど、偶然、という事はこの世にはない。

『覚えておいで、隆志。この世では、どんなにつまらなく見える事でも。どんな小さな事でも。全てがつながり、完全を作り出しているのだよ』

じいちゃんは、そう言っていた。

『偶然はない。運命は全て見えぬ糸でつながり、そうしておまえの前に現れる。私はノーラと出会ってから、そう思うようになった。全ては、そこにある。ただ私たちが気づかないだけで』

温かい手で、俺の頭を撫でてくれた。あれは何をしていた時だったか。じいちゃんと並んで西瓜を食べた。夏の終わり。蚊取り線香の煙が漂っていた。その時じいちゃんが、ぼつりと言ったのだ。

『真実を見る目を、江利子もおまえも持っている。望むと望まざるとに関わらず。それは、おまえたちの持つものであり、決して目をそらしてはいけないものだ。だから、隆志。良く見なさい。良く考えなさい。そうして経験を積みなさい。いつかおまえが迷った時。魂が悲しみを、苦しみを抱える時。あるいは愛がおまえの魂を満たす時に。それらはおまえの前に現れる。全て』

『意味わかんないよ』

『わからなくても良い。それが人としての、おまえの在り方になる』

のだよ。……覚えて、考えていてくれ。そうしたらいつか、おまえの大切な誰かを助ける事ができるかもしれない』

『そうなの？』

『そうだよ』

じいちゃんは、妖精よりも世界がわかっていたのではないか、と思う事がある。妖精の見える俺や母さんよりも、はるかに世界を理解し、また妖精たちの事も理解していたのでは、と。

幼い時に両親が離婚して、父親と別居してしまった俺にとって、じいちゃんはずっと父親のようなものだった。

『良く見て。良く考える。良いね？ 心を豊かにして、おまえの中に真実を持ちなさい。揺るがないそれは、おまえの力になるだろう。隆志。世界はおまえの前に開かれている。そうして小さな事や、たわいのない事。意味がないとされる事を、決して見過ごすな。それは全てを現す真実につながる。それこそが人間にとっては』

「……意味がないとされるような、小さな事が。全てを現す真実につながる」

俺の言葉に、アーサーはきょとんとした顔で俺を見上げた。

「タカシ？」

「それこそが人間にとっては。その人生においては、大切な事だから……俺の祖父の言葉だ」

「良くわかりませんが……、大切な言葉のように聞こえます」

「うん。俺もまだ詳しくはわからないのさ。でも大切だと思う」

「おじいさん、何て名前の人だったんですか」

「隆史。^{タカフミ}タカは俺と同じ。高く上げる。フミは……本とか文章だな。意味は、尊敬されるべき書物、かな。そんな人だった。魂にたくさんの、大切な言葉が記されているような人だった。俺の名前の半分

は、じいちゃんからもらったんだ」

「さっきの言葉、ばくにも教えてもらえませんか？ もう一度言つて下さい」

「『心を豊かにして、おまえの中に真実を持て。揺るがないそれは、おまえの力になるだろう。意味がないとされるような小さな事が、全てを現す真実につながる。それこそが、人間にとっては。その人生においては、大切な事だから』」

微笑むと、アーサーは少し頬を赤くしてから繰り返した。

「心を豊かにして、おまえの中に真実を持て。揺るがないそれは、おまえの力になるだろう。意味がないとされるような小さなことが、全てを現す真実に……タカシのお祖父さんって、賢者みたいな人だったんですね」

「そうかな？ ……そうかもな」

くすつと笑って俺は言った。妖精と結婚するぐらいだから、そうかもしれない。

「見かけは普通のじいさんだったよ。変な所が抜けてて、味オンチで」

「あじおんち？」

「ばあちゃんの料理はそりやもう、壊滅的な味付けだったんだ。なのにそれを、うまいと言って食べるんだぜ。いろんな意味ですごい人だったよ。大好きだった」

アーサーは俺を見上げてから、ちよつと笑って、ぎゅつと腕にしがみついた。

「なんだ？」

「ぼくもタカシが好きです」

「そうか？」

「大好きです」

何だか可愛いなあと思ってしまつて、頭をぐりぐりしてやった。
その間も背後の会話は続いている。

「おまえのようなものが近づいたら、それだけで影響が出るだろう。
彼に穢れをつける気か。破壊を旨とする薄汚いものが」

「何かつつと魅了使つて、魂コレクションしてる奴らの仲間が何
抜かす。手当たり次第に手出して、タラしまくるてめえらも言つて
みりゃ、俺らとどっこいどっこいだらう」

不穏な空気が険悪なそれになっている。何かもう、一触即発みた
いな感じが。後ろから。

やばいかなー。そろそろ止めないといけなかなー。でも振り返
りたくないなー。逃げちゃいたいなーもう。

「われらを侮辱するか、馬」

「やる気なら受けて立つぜ、色魔」

剣を鞘ばしらせる音に、さすがに慌てて振り向く。

「やめろ！ トリスタン。剣を戻せ。ケルピーも、挑発するんじゃないー！」

剣を抜いていたトリスタンと、本性に戻りかけていたケルピーは、
俺を見てから、渋々と言うふうに戦意を収めた。本当に渋々だった
が。

「どうして君は、こうも慈悲深い。こんなアンシーリーコートなど、君の心を傾ける価値もないと言っのに。ここで消滅させた方が、どれだけ良いか」

「俺がタカシに、アイサレテルからに決まってるだろー、てめえと違って。俺たち、アイシアッテルから」

トリスタンが無言でまた剣を抜きかけ、俺は慌てて駆け寄ると、彼の手をつかまえた。

「駄目だつて！」

「斬る」

「はっはー。庇われてるよ、俺。なー、タカシ、これって愛の証？」

「ケルピー！挑発はやめろつて言ってるだろっ！」

ケルピーは何か言いかけ、そこでふと、真顔になった。トリスタンが、いきなり俺の腕をつかんだ。

「来た」

「え……っ、あ、アーサー！」

俺は思い切り、トリスタンに庇われていた。離れた所では、一人で立ち尽くすアーサー。そうして、俺たちと彼の間に。

滲み出る、黒い影。

らんらんと光る目と、子牛ほどの大きさの。
モーザ・ドゥーグ
黒妖犬。

モーザ・ドゥーグ
黒妖犬はさつきより、さらに大きくなっていた。

「あ、」

アーサーが息を飲んで、立ちすくむ。青ざめて動けない。

「アーサー……っ」

飛び出そうとした俺は、けれど。トリスタンの腕一本で動けなくされた。どこまで腕力強いんだ、この男！

「ケルピー！ アーサーを」

少し離れた所にいる男に目をやると、面倒くさそうな顔をされた。

「俺、おまえ以外の人間の為に動くの、ヤなんだよ」

「アーサーを助けてくれるおまえは、カッコイイと思う！」

「すぐ助けるから待ってろ」

きりつとした顔になると駆け出す。

「私は格好良くはないのかね？」

ほっとしていたら、トリスタンが言った。ええっと。

「離してくれよ」

「離れたら君は無茶をするだろう」

「無茶をしているつもりはない！ 結果的に無茶になってるかもだけど」

堂々と言うと、呆れた顔をされた。

ケルピーは、すつ、と体を低くすると、一瞬で馬に変化した。地面を蹴ると黒妖犬をあつさり飛び越える。アーサーの前に着地すると、少年を背後に庇って立つ。

「よう。しつこいんだよ、おまえ」

そう言うと、彼は蹄で地面をかつ、かつ、と掻いた。

「やるってんなら相手するぜ？ さっきは結局、勝負つかなかったしなあっ」

黒妖犬は燃える目をぎらつかせ、うなった。体勢を低くして、飛びかかるうとでもいうような姿で、ケルピーとアーサーを睨み据える。

俺はトリスタンの腕から何とか抜け出すと、一步、前に出た。その時、

何かが。

犬の形をしている相手の中の、何かが。

滲み出る黒い陰りが、霧のように見えて、その奥にある何かに、引つかかった。これは。

なんだ……？

ぐをるるるるるるっ

黒妖犬はうなると、ケルピーに向かって走った。水棲馬はぐうつと身を屈めると、飛びかかる準備をした。

俺はもう一歩、前に出て……、

「タカシ！」

アーサーの叫ぶ声。気づいた時には目の前に黒妖犬が迫っていた。えっ、どうして？　と思う間もなく、らんらんと燃える炎の目が、俺をのぞきこんでいた。ぐわつと開いた口の中に、ずらりと並んだ牙が見えた。

ばちいっ！

火花が散った。その後は……、
ブラック・アウト
暗転。

『終わりのない、輪が描かれる』

そんな声がした。柔らかく、明るい。光が差し込むような声。

『螺旋の夢。時の輪は輝いて踊る』

『囚人は、解放される事がない』

きしむような声がした。

『妖精の輪に踏み込んだ者は。永劫の囚われ人となる』

明るい光が揺れた。

『輪が描かれる……終わりになく続く。喜びは輝いて、地に満ちる』

黒い影が揺れた。

『輝きは闇に墜ちる。輝ける者よ。おまえも闇に墜ちる』

『我は命を歌う。安らぎと喜び、熱と光。それが我』

『俺は死を運ぶ。憎しみ、恐れ、冷たさと闇。それが俺だ』

光と影が、ゆらゆらと揺れている。互いに向かい合い、問答をしている。

『そなたは囚われているのか。何をもって囚われたと言うのか』

『俺は死を運ぶ。ただそれだけ。そうしておまえを闇に墜とす』

『はるか彼方の血族よ。そなたはどこにいるのか』

『俺は囚われ人。俺は憎む。俺は恐れる。そして恐れられる』

『そなたをとらえる鎖はどこにある。そなたを閉ざす檻はどこに』

『俺は死を運ぶもの。存在を壊す憎しみ』

向かい合う光と影。揺れる存在の輝き。

『そなたは何者か』

『俺は穢れ』

『そなたは何者か』

『俺は死を運ぶ』

『そなたは何者か』

『俺は破壊そのもの』

そうじゃない。ふと、そう思った。
影の中に見えるものは。

『そなたは何者か』

……あれは。何。

いきなり覚醒した。目を開けると、アーサーが泣きそうな顔でのぞきこんでいた。

「タカシ！ 良かったあ……」

ほっとしたように言われ、まばたく。

「あれ？ おれ……」

「倒れたんですつ。黒妖犬に襲われて。死んじゃったかと思った……」

「力のない守りをつけるわけがないだろう。この私が」

トリスタンの声がした。なぜか近くから。あれ？

手が髪をなで下ろして……ええつと？ すみません。頭の下にやたらと弾力のあるものが。何が。何が起きてるんでしょうか、俺に視線をさまよわせると、少し離れた所にケルピーがいて、おあずけをくらった犬みたいな顔で、うーうーうなっていた。

「うらやましい……俺もやりたい……」

何を。

「タカシ？ まだ意識が？」

「ええと……俺、今、何が」

そこで硬直する。上からのぞき込まれて。

「君は、モーザ・トウグ黒妖犬と接触したのだよ。ただ、私の守りがあったからね。あれは弾かれて、君に触れる事ができなかった」

「……トリスタン」

近々と、彼の顔が。ついでに俺の頬の辺りに感じるのは。布地……なぜ布地。布地の向こうにあるのはひょっとして。

「何だね」

「尋ねてはいけない気もしますが、……俺の頭の下にあるのは何でしょうか」

「私の足に決まっているだろう？」

足。足なんだ。それって。

「ヒザマクラ……」

この弾力は、たぶん筋肉。

頬に触れているのはトリスタンの腹。さすが騎士。鍛えているらしくて、布地の向こうにあるのは固い筋肉の感触。割れてるんだろ。うなあ、こいつの腹。すごいよなー、騎士だもんなー、うん割れてる割れてる。……思わず現実逃避した。

「日本の文化にあったよね。愛する相手の為に足を枕にして、撫でてあげるといのが。君をそのまま地面に横たえるのには、忍びな

かったからね」

にっこり笑顔で言われた。ええと。でも。その。

「初膝枕が男……」

何か色々ダメージを受けた。俺だってそれなりに、夢とか希望とかあったんですよ。そりゃ膝枕をしてほしいなんて、そうそう言えないですけどね？ でも男にされるより、女の子にしてもらいたいじゃないですか？ 筋肉よりは脂肪の方が、ありがたいって言うか！ 脂肪って言ったら女の子に殴られるかもだけど、でも男としては脂肪の方が！ 柔らかい方が！

「うっうっ俺も。俺もやりたい」

ケルピーがうなっている。やってどうするんだ！ 俺のダメージを増やすつもりかっ！？

「どうかしたの、タカシ？」

「なんで止めてくれなかったんだ、アーサー……」

「えっ、ええと？ トリスタンさんが日本の文化だって……足に乗せるには、筋力とか耐久力とか必要みたいだったし？ ぼくだと子どもだから、うまく頭が乗らないかなって」

何だまされてるんですか。

起きようともがくと、トリスタンがぐい、と体を押さえつけた。

「ちよっ、おい」

「駄目だよ。もう少し、ね？」

「何がもう少し……起きる！ 起きるから！」

じたばたすると、残念そうな顔をされた。トリスタンの腕が離れると同時に、転がり落ちるようになして彼から離れる。

「タカシ!？」

慌てた様子でアーサーが手を伸ばすのに、ありがたくつかまって俺は上体を起こした。

青い空。緑の野原。花の香り。岩肌に輝く水晶や貴石。そここにきらめく小さな虹。りんりと響く小川の流れる音。

穏やかなそこには、憂いは一つも見当たらない。

黒妖犬はいない……どこにも。

「眠っている君は、素直で愛らしかったのに……」

残念そうに、トリスタンが言った。二十歳過ぎた男が愛らしいわけないだろうっ。

「意識のない状態で、反抗的な人間がいるか」

いたら怖い。

「その内、君を眠らせて連れて行こう。綺麗に飾って、毎日愛をささやいてあげるよ」

「心の底から辞退します」

ぶんぶん首を振って言うと、ふふふ、と笑われた。

「タカシ。俺も。俺もやりたい! ヒザマクラ! していいかつ」

ケルピーがわめく。

「してどうするんだっ。膝枕は普通、女性が男性にするものだ!」
「そうなんですか?」

アーサーが首をかしげる。

「頭って重いですよ。女性に重いものを乗せて負担をかけるよりも、男性が請け負ってあげた方が良くありませんか? 女性にそんな事を強いるのは、少しひどいと思います」

「え、いや……そう? 頭……って重い?」

考え込んでしまう。

「ええと……いや。そんなに長くはしないって言うか。あれ? どうなんだろう」

そんなに知識があるわけではないので、良くわからない。女性にしてもらった膝枕って、ひどいのか?

「男性は、女性を受け止めるだけの力強さがあります。体格も骨格も、男女では全く違っていい。男性側が、女性の体重を受け止めてあげるべきです」

きっぱり言われた。……そうだな。アングロサクソン系の人種では、男女の体格差、すごいもんな。いや、ちょっと待て。

「それだと、俺がこいつに膝枕されてた理由がなくなるんですけど……?」

トリスタンを示す。白い妖精の騎士はにつこりした。

「愛する者の頭を膝の上に置いて、弛緩するまで愛撫するのが日本の文化だろう？ 警戒心をなくし、安心しきって眠る相手を眺めるのは楽しいと思うね」

「おまえの日本文化の解釈は間違ってるから！ 何かものすごく違うから！」

「間違ってるんですか？」

きょとんとした顔でアーサーに言われ、脱力した。

「いや、えーと、まあ。警戒心……はないだろうね。恋人同士でやるもんだから、……でも普通は、男女でやるもんですよ……」

「そうなの？」

「そうです」

一応、そう言うておく。

「それで。何がどうなったんだ？ モーザ・ドゥーグ 黒妖犬はどこに？」

尋ねると、トリスタンが「消えたよ」と答えた。

「消えた……？」

「印に弾かれて、すぐに。私が矢をつがえたら、溶けるようにして消えてしまった。どうしようかと思ったが、君が倒れてしまったのでね。介抱が先だと思った」

……それで膝枕なんですか……。

「あいつ、いきなり方向転換しやがって。俺に向かってくると見せ

かけて、おまえの方に飛びかかりやがった」

ケルピーが、齒をがちがち噛みならしながら言った。

「おまえが倒れた時には胆が冷えたぞ。どこもおかしな所はないな？」

「ああ……大丈夫」

さっき見ていた夢を思い出して、俺はちよつと額を抑えた。夢……だと思つ。

光と影の問答。

あれは……何だ？

「タカシ？」

心配そうなアーサーの声。

「大丈夫。ちよつと……夢を見て」

「夢？」

「うん……何だろう。大事な事のような気がする……けど」

何だろう。

何だったろう。すごく大事な事のような気がする。でも。

「ああ、駄目だ……わからない」
「どんな夢だったのかね」

トリスタンが声をかけてくる。

「光と影が問答していた。おまえは何者かって、何度も何度も光が影に尋ねてた」

「ほう」

「影は、……あれは……、」

俺は目を閉じて首を振った。

「トリスタン。あの黒妖犬、普通だったか？」

「普通、とは？」

「変じゃなかったか？ 俺、何か変なもの見た気がする。あいつを見た時に」

トリスタンはまばたいた。

「さて。変と言えば変だが……その馬に尋ねた方が早いのではないかね。アンシーリーコート的事は、アンシーリーコートに尋ねた方が良からう」

「ケルピー？」

視線を向けると水棲馬の化身の青年は、恐ろしく不機嫌な顔をしていた。

「タカシはどうしてそんな奴に頼るんだ……」

「は？ 頼るって？」

「俺に！ まず！ 声をかけるべきだろう。アンシーリーコートについてなら。なのにどうして、その陰険色魔騎士に声をかけるんだっ！」

ええっと。

「いや、話の流れって言うか……」

「私の方が貴様より、信賴されているからに決まっているだろう」

なだめようとした俺をさえぎって、トリスタンが言う。嬉々として。

「んだと、この色魔野郎」

「嫉妬は醜いぞ、馬」

「ちよつ、やめてくれよ!」

言い合いに発展しそうな二人の間に割って入り、俺はため息をついた。

「トリスタン、ちよつと黙ってて。ケルピー、順番にあまり意味はないよ。トリスタンの方が近くにいたから、声をかけただけ。……ああ、そうだ。さっきはアーサーをかばってくれて、ありがとう」

ふと思い出して付け加えると、ケルピーが目を丸くした。

「う? ああ。……いや。おまえの頼みだったから」

はにかんで、頬を染める。

「おまえが……喜んでくれたなら……うれしい」

もじもじしている。

「おまえ、……属性が時々、乙女だよな……」

何なんだ、こいつ。そう思っというと、首をかしげられた。

「俺は妖精だぞ」

「どちらかと言うと妖怪だろう」

ぼそりとトリスタンが言う。ケルピーはじろりとそちらを睨んでから、俺に目線をもどした。

「乙女というのは、人間の若い女の事だろう。それに俺の属性は水だ」

「そうだけど。ええっと……ゲーム用語というのがあって。あー、なんて説明すれば良いのかな。純粋な意味での属性とかじゃなくて、性格とかを『属性』と呼ぶ事が」

説明している内に自分でも混乱してきた。

「スラングか」

トリスタンが言う。

「人間は、色々な意味で言葉を使うものだしな。近ごろでは性格を属性と呼び習わすのか」

「うーん……まあ。あまり一般的じゃない……と思うけどね。妹属性とか、俺さま属性とか、そんな風に使う事もある……かな」

「ほう」

「へえ」

妖精二人が興味深そうに俺を見る。こういう事教えて良かったのかな。変な風に広まって、『自分は妹属性』とか、『乙女属性』とか、言い出す妖精が出てきたらどうしよう。

「なるほど。タカシには時折、この馬が、経験の足りない娘のように情けなく見えるのだな」

にこやかに言ったトリスタンに、ケルピーが愕然とした顔になる。

「タカシ。俺が情けなく見えているのか……？」

「え、いや、違うっ！ 違うって！」

慌てて否定する。言葉ってムズカシイ。

「いや、だからさ。おまえ、いつもは乱暴で大ざっぱな感じなんだけど。時々妙に繊細と言うか、初々しいと言うか？ そんな反応見せるからっ」

言っている事が何だか変だ。

「繊細？ この馬が？」

「言いたい事はわかりますけど……」

トリスタンが眉をあげ、聞いていたアーサーが首をかしげた。ケルピーは、ずい、と一歩前に出た。

「繊細と言うなら、おまえの方が繊細だ」

真面目な顔で俺を見下ろして言う。

「いつも怖くなる。触ったら壊れるのじゃないかと思って。おまえは俺にも優しい。それでいて強い。だが、……脆い^{もろ}」

「え……と」

「おまえを見ていると、花を思う」

はい？

「人間はみんな、花のようだ。おまえを見ていそう思う。脆く、はかない。朝に咲いて、夕方には散る。俺の蹄の下で、ちぎれて壊れてしまう。だが俺は……」

ケルピーは静かに言った。

「おまえを壊したくない。本能に逆らったとしても」

俺は絶句した後、ちょっと赤くなった。ケルピーの眼差しは妖精に特有の純粹なもので、言葉も小さな子どものように真つ正直で、思い切り直球だった。純粹さを忘れゆく人間としては誰だって、動揺してしまうだろう。

「ありがとう」

「なぜ礼を言う？」

「壊したくないと思ってくれたから」

「そうか」

ケルピーはさらに、真面目な顔で言った。

「俺にとってはおまえの方が、属性が乙女だ。どんな乙女よりも繊細で美しく見える」

沈黙が落ちた。

ばちいっ！

「誰が乙女があっ！」

「ぐおおああっ！？」

思わず殴ってしまった。ケルピーは煙を上げて、ひっくり返った。

「それで、あの黒妖犬だけど」

話を戻すと、地面にしゃがみ込んで拗ねていたケルピーが、顔をあげた。

「あれがー？」

「まだ拗ねてるのか」

「だってタカシ、ひどい……」

そう言つと、ケルピーは地面を指でつついた。

「拳が炎に包まれていたように見えました……すごく男らしいです、タカシ」

感嘆したようにアーサーが言う。拳が炎つて、なんの漫画。俺その内、銀河を背にして戦ったりするんですか。

「こんな馬は、見捨てた方が良くはないかね」

嫌そうにトリスタンが言う。

「いや、まあ。俺もちょっと悪かったって言うか、過敏に反応しちゃったし。拗ねるなよ、ケルピー」

「だってタカシに触れないし。側にいるのに触れないし」

ぶつぶつ言いながら地面に何か書いている。そっちな？ 拗ねてる原因。

「ケルピー。おまえの意見が聞きたいんだよ」

俺は彼の前に膝をつくと、言った。

「アンシーリーコートについては、おまえが詳しい。協力してくれ頼む」

「うん」

あっさりうなずいた。あれ？ 拗ねてたんじゃ？

「何でも協力する。だから、ヒザマクラをさせてくれ」

……。……。……。

「おまえ、俺に触れないだろ」

「印が外れたらで良い！ 陰険騎士ばかりずるい！」

「なに對抗意識燃やして……ああ、もう。いいよ。これ、外れたら膝枕させてやるから！ でも一回だけだぞ！」

承諾すると、目をきらきらさせて喜んだ。子どもか、こいつは。

「タカシ。良ければその馬を永遠に黙らせるが」

トリスタンが言う。俺はそちらを見た。

「いいよ、膝枕ぐらい。もたれるのと変わらないし」

「いっぱいなでてやるからな、タカシ！」

「……なで……？」

「本当に良いんですか、タカシ？」

アーサーが言う。ちょっと不安になった。

「なでなくて良いから、ケルピー。おまえを枕にしてもたれるだけ。それだけだから」

「そいつは、いっぱいなでてたぞ？」

ケルピーがトリスタンを示す。俺が妖精の騎士に目をやると、彼はにっこりした。

「日本の文化だよ」

「だからそれ違うつて……」

俺が意識なくしている間にこの男、どれだけ触りまくってたんだろ。

「髪をなでてたぐらいです。変な事はしていません。ぼく、注意して見てましたから」

アーサーが言った。ありがとう、アーサー。俺の心の拠り所は今、君だけだ。

「話、戻すぞ。ケルピー。あの黒妖犬、間近で見てどう思った？何か変じゃなかったか？」

無理やり話を戻すと、ケルピーは首をかしげた。

「倒す相手を、あれこれ見たりしないしなあ」

「戦う相手は、観察するものじゃないのか、普通」

「だって俺強いし」

「ああそう」

駄目だ。前からそうじゃないかと思ってたけど、こいつ、脳味噌が筋肉のタイプだ。

「タカシは、……どこか変だと思ったんですね」

アーサーが言った。

「うん。見ていたら、何か……」

俺は眉をしかめた。

「他の黒妖犬をじっくり見たことがないから、わからないんだけど……あいつの中に、何かあるように見えた。何か、違和感が」

「違和感」

トリスタンが繰り返した。

「そうだな。それは私も感じていた」

「トリスタンも？」

「私自身とあまりにも違う存在なので、あまり直視しなくなかったのだがね。確かに妙なものは感じた。ああいうものかと思っていたが……」

考え込む。

「そうだな。あれは、違和感と言うべきだろう」

「何かあるように俺は感じた。あいつの奥って言うのか……底に沈んでいる辺り？」

「そうかもしれないね」

トリスタンは、ふむ。と言ってから、俺を見た。

「どうするね」

「どうと言われても。よく観察する暇なかったし……」

「そうか？ 君の目は、真実を見抜くはずだ。一目で充分なはずだろう」

「そんな事言われても……」

母、江利子と同じく、俺には『真実を見抜く目』とやらがあるらしい。妖精たちにとってそれは、畏怖と執着の対象になるらしくった。妖精たちはまやかしの魔法を使う。しかしそれは、俺や母には効果がない。そこに何かがあるのか、俺たちには『見えて』しまうからだ。それは時に、妖精の本質を見抜く力にもなった。それが妖精たちには恐ろしい。母もそうだが、俺は小さいころ、何度も危険な目に会った。ケルピーのように喰おうとするのならまだわかるが、拉致したり監禁したり、果ては魂だけの方が扱いやすいと、肉体を破滅に導かれそうに（つまりは殺されそうに）なったりした。妖精たちの言う、愛情から。

ただ俺たちの能力は、そこに何かがあるのかわかるだけなので、なんでこれが騒ぎの元になるのか、俺にはさっぱりわからない。

「君も少し、混乱しているようだね。頭を冷やして落ち着いたら、

見えてくるものもあるのではないか？」

トリスタンが言った。

「なんだか、協力的になってるな？」

「あれは、君を狙った」

彼は顔をしかめた。

「その人間の子どもを狙っているだけなら、放っておく事もできた。その子どもが人間の世界に戻って、その後にあの黒妖犬が追いかけていったとしても、私には何の関わりもない事だからね。だが、あれは君を目標に定めた。これでは放っておけない」

アーサーが人間の世界に戻った後に襲われて死んでも、放っておくつもりだったのか……しかも本人の前で言ってるよ……。

「とりあえず、私の膝は空いているよ」

「だからなんで膝……おまえ、何こだわってるの」

がつくりと肩を落すと、ケルピーが、「俺にもヒザマクラさせろ！」とわめいた。

「あー、もう。ちょっと静かにしてくれないか。考えまとめるから」

そう言って立ち上がると、二人は黙った。

近くにあった木の下に行き、幹の下に座り込む。黒妖犬の姿を思い出そうとする。滲む黒い影。あの奥に俺は、何を見た？

「榛か」
はしはみ

トリスタンがつぶやいた。俺はふと、顔を上げた。
緑の濃い、西洋榛^{せいしやうはんのみ}。

「ヘーゼルナッツ……クラッカーナッツとも言ったっけ」

「ケイト・クラッカーナッツの話、ばく聞いた事ありますよ」

アーサーが近寄ってきて、にこりとした。

「悪い魔女や妖精と戦って、王子を解放する女の子です。榛は悪い魔法を打ち破る実、なんですよね」

スコットランドの伝承だ。ふと、『タイニー・ケイティ』を思い出した。そうか。あのイギリス人作家、ケイト・クラッカーナッツの話の念頭において書いたのかもな。

「知恵を与える実だ」

トリスタンが静かに言った。

「コンラの泉には九本の榛^{はしはみ}が生え、知恵の鮭はその実を食べていた。フィネガスの教えを請いに来た、クールの息子デウムナ・フィン（デウムナ・フィン・マックール）は、鮭を焼いて、親指に垂れた汁をなめる事で、物事を見抜く力を得た」

「知恵……」

見上げると、葉の間に実がなっているのが見えた。さすが妖精郷。季節感、無視。りんごの木も、花盛りのものであれば、実がなっているものもある。花もベリーも同時に野原を彩っている。緑の葉と熟しているらしい実を同時につけた榛の木に、あれって皮をむいて

炒ったらうまいんだよな、と思った。一見ドングリだが、中身はチヨコレートやお菓子に良く入っているヘーゼルナッツ。

「食べたら、頭すっきりするかな」

思わずつぶやくと、聞きとがめたアーサーが、「ここで出された食べ物、口にしちゃ駄目なんじゃなかったですか？」と言った。

「そうか。そうだった。でもこれって……うーん。どうなんだろう。ああ、でも、知恵を得るには、この実を食べたマスか鮭を食べないと駄目なんだった」

ころんとした感じの実を見上げ、俺は言った。

「でも……知恵が欲しいよ。俺の中で、まとまらずにぐるぐるしている考えを、すっきりさせたいよ。もどかしい……」

口づけを。

不意に、そんな声を聞いた気がした。

「ん？」

口づけを。人の血を引く幼子よ。

風がささやいたような声。俺は周囲を見回し、首をかしげ。ふと

思いついて、榛の木に目をやった。

「……」

立ち上がる。木の幹に手を触れると、手の下で木肌が動いた気がした。

（……何か、いる）

榛の妖精か？

「キスしてって言ったの、おまえ？」

ささやいてみたが、反応がない。逡巡したが、ま、良いかと思つて、幹を軽く抱きしめて、キスしてみた。
何も起こらない。

馬鹿な事やつちやったかな、と思いつつ、離れようとしたその時。

ざわっ……。

いきなり葉が、風もないのにざわめいた。慌てて上を見上げる。
すると腕が伸びてきた。あれ？

「えうつ??？」

「タカシ！」

「ああっ？」

「きさま木のくせして、何しやがるーっ！」

俺は木に抱きつくような格好で、拘束されていた。榛の木から伸びてきた腕に。すんなりとした、淡く緑に染まる腕。長い髪の毛、人に似た姿の誰かが、幹から上半身を現して……、唇を。

思い切り、吸われた。

口の中に何かが入ってくる。ちよつと待て。

「んんんんっ！」

なんでディープキス。いきなりディープキス。じたばたしている、唇が離れた。何するんだと、きつと睨み付けると、繊細な容顔の樹木の精霊が、微笑んだ。

……胸、ばいーんな美女。

「タカシ！ 無事かつ？」

「タカシ、こつちへ……」

「切り倒してやろうか、この女あ！」

ぎゃーぎゃーわめいている三人そつちのので、俺は呆然と彼女を見つめた。あー。えー。

ぽよーん、な、感触が。密着している胸に。あの。

……ちよつと今日はラッキーな日かも……。

真つ赤になつた俺ににっこりと微笑みかけると、榛の美女は、するすると木の中に入ってしまった。あれ？

口の中に何か残っている気がして、首をひねっていると、ぽとりと何かが落ちてきた。拾い上げると、ドングリに似た実が一つ。

えーと。だから、何なんだ？

「こつちへ！ 油断も隙もない！」

トリスタンが俺の腕をがしっとつかみ、ずるずる引きずって榛の木から引き離す。

「タ、タカシ……気を落とさないで……タカシの意志じゃなかったんだから……」

なぜかおろおろしながら、俺をなぐさめるアーサー。いや、別に気落ちしてたりはしないけど。

「倒す！ この木、倒す！」

歯をがちさせながら、怒り狂っているケルピー。半分本性に戻りかけている。ちよっと怖いよ、その長くなってる顔！

「すぐに消毒しよう」

がし！ と俺の顔を掴むと仰向かせるトリスタン。そのままキスしようとしたのを俺は、慌てて押し退けた。

「待てコラ。どさくさに紛れて何する」

「消毒に決まっているだろう」

「しなくて良いから。むしろ歓迎だから、女性とのキスは」

トリスタンの顎に手をかけてぎりぎり押し上げながら言うと、ケルピーが「あんな女が良いのかあ？」と叫んだ。

「タカシ！ 俺、髪伸ばすから！ そしたらちゅーして良いかつ？」

「髪の長さの問題じゃないからっ！」

なんだか疲れてきた。

「ちよつ、離れるよトリスタン……『丘のあるじ、りんごの木の祝福を司るもの、剣持つ詩人よ』」

いきなり勝手に口が動いて、俺は目を丸くした。トリスタンが、おやという顔をした。

「え、なにこれ……」

「知恵の木から、祝福を受けたな」

トリスタンは俺を見つめてから言った。

「祝福？」

「おそらく、舌に」

あ。ディープキス。

「さほど強いものではない……おそらくは一時的なものだろうが」
「祝福って、ずっと続く方が良いのじゃ？」

アーサーが不思議そうな顔で言う。トリスタンは肩をすくめた。

「人間には合わない事もある。舌を見せろ、タカシ」

何か妙な気がしたが、あー、と口を開けるとトリスタンは俺の頬をつかみ、しげしげとのぞきこんだ。

「『真実の呪文』だな、これは」
「ひやにひよえ」

頬をつかまれているので、明瞭な発音ができない。

「『正直トマス』にかけられた呪文に似たものだ。真実しか口にできないという。人間には大変なのではないかね？」

……わあ。

俺はちよつと考えた。真実しか口にできない俺。

レポートの提出が遅れた言い訳にあつざりと、『遊んでたので間に合いませんでしたー』と言ってしまふ俺。

ムカつくバイト先の上司に思い切り、『俺今、あんたにムカついてるんですよー』と言ってしまふ俺。

仲の良い友人に、『おまえって、こういう所がダメだよなー』といつでもどこでも、べらべらしゃべってしまふ俺。

……日常生活が送れません。単位落とします。バイト首になります。友人をなくします。確実に。

「なな、なんでそんな……人間の中で暮らせないよ。どうしよう」

するとトリスタンが、「こちらで暮らせば良いのでは？」とあっさり言った。

「いや、だって俺、『人間だ……けど四分の一はよう、』」

そこで慌てて口を抑えた。考えてる事ダダ漏れになっちゃうんですか、ひよつとして？ 秘密とか言いたくない事とかも全部？

俺に何の恨みがあつたんだ、榛の妖精！

「タカシ？」

アーサーが俺の袖を引く。俺は彼を見下ろした。

「ああ、だいじょう……『猛き獣の名を持つ王、その名を継いだ、遠く妖精の血を引く幼子。ほとんどは人間だが、揺らぎやすい境界線上に存在するもの』」

……。

止まってくれ、俺の舌。

「それってどういう？」

「『おまえは妖精の血を引くがゆえに、境界線上に存在する妖精の世界に足を踏み入れやすく、揺らぎやすい。人間である自覚を持たねば、たやすく流され、染まってしまっただろう』……俺に質問しないでくれ、アーサー。舌が勝手に動く」

「はいはいはい！ タカシは俺の事どう思ってるんですかっ！」

そこで元気良くケルピーが言う。どうって。

「『水属性の妖精。アンシーリーコート。他者の命を喰らう存在であるのに、人間を食べないと約束した変わり種。言葉や仕種が妙にエロい。言動が時々乙女になる。脳味噌が筋肉』」

ぶふっ、と噴き出す音がした。トリスタンが笑っている。

「の、のーみそがきんにく？」

「『たまに可愛いと思う』」

つるつと口から出た言葉に慌てた。ケルピーが喜色満面になって俺に飛びかかってくる。

「タカシ〜！」

「ばか、まだ印が！」

ばちばちばちばちっ！

ケルピーはまた、黒こげになった。……おまえ、本当に筋肉しかないのか、頭の中……。

5・（後書き）

ケルピーがどんどん、お馬鹿さんになってる気がします。しかしタフだ……。

ケイト・クラッカーナッツは、スコットランドの方の伝承です。この伝承を元にして、キャサリン・M・ブリッグズが「魔女とふたりのケイト」という児童文学を書いています。

フィン・マツクールの話はいろいろあります。知恵の鮭は「食べてはいけない」と言われていたのに、ついうっかり（？）、火傷したはずみに、親指に垂れた油を口にしてしまい。知恵と洞察力がそなわった、らしい。以来考え事する時には、親指を口に入れるようになったとか。その頃には結構な美少年、もしくは美青年（？）だったらしいんですが（フィンはある名で、美しい、という意味がある）。いい年したおっさんになってからもそうだったと考えると、……うーん……。

「悪意はないと思うがね。むしろ、君を助けようとしたのではないか？」

トリスタンが榛はしはみの木を見上げて言った。

「ケルピー。この木に手出しするな」

木の前に立って威嚇いかくしている水棲馬の青年に、俺は声をかけた。さっきまで黒こげ状態だったくせに、もう回復している。どこまでタフなんだ。

「ヘーゼルナッツは知恵の実なんでしょう？」

「洞察力を与えるもの、ともされている」

アーサーの言葉をトリスタンが補足した。俺を見る。

「君、さっき知恵が欲しいと言っていたね。だからじゃないか？」

そうかも。

こう言っでは何だが俺は昔から、妖精やそれに連なるものたちから、やたらと好意を寄せられる。榛の妖精もたぶん、俺に好意を持って贈り物をしようとしてくれたのだらう。

問題は彼らの好意や贈り物が、人間には時折、大層困るものになると言う事だ。

「ずっと嘘つけないままなのか、俺……」

口元を手で抑えて俺は肩を落とした。このままでは本気で人間の世界に帰れない。

「えーと、でも、何かあるのかも……タカシ、さっきの黒い犬、何か変だつて言つてたし。それで、手助けしようとした……のじゃないかな……」

俺を励まそうとしたのか、アーサーが言った。自信なげに語尾が小さくなつてしまったが。

モーザ・ドゥーグ
「黒妖犬……、あいつ、は、『閉ざされたもの』」

いきなりするりと口から出た言葉に俺は、目をぱちくりとした。

「閉ざされたもの？」

アーサーが尋ねるのに、勝手に口が動き出す。

「えっ、ちよつと。ちよつと待つ……、『終わりのない、輪が描かれる。螺旋の夢。時の輪は輝いて踊る。妖精の輪に踏み込んだ者は永劫の囚われ人となる』」

なんだ。これは。

「『輪が描かれる……』終わりになく続く。死を運ぶものには憎しみ、恐れ、冷たさと闇が所属し、それは囚われる』」

あの時見た、夢の中の言葉？

「『捕らえているのは何者か。囚われているのは何者か。何者か。』」

何者か』」

……何者か？

「『あるものは、どこにあるか』」

言葉がこぼれる。

「『見いだし、見いだせ。そのものを』」

べらべら動いていた舌が止まる。えーと。つまり。

「……何のこと？」

「言った本人にそう言われてもね」

トリスタンが苦笑した。

「君が見た真実を、舌が話したのだろう」

「俺の見た？」

「違和感」

肩をすくめると、トリスタンは俺を見つめた。

「祝福は、何もない所に注がれるわけではないよ。そこには素地があり、通路がある。君は真実を見抜く目を持つ。だからこそ、『真実を語る舌』の祝福が与えられた。歌は、歌い手に注がれる。力は、力に魅かれる。知恵は、知恵ある者に与えられる。持っている者は、さらに持つものだ」

トリスタンの言葉は、妖精の法則。同時に力の法則でもあった。

持っている者は、さらに持つ。

「だから俺の見た真実を、俺の舌が語ったって？ それだとたくさん
の真実があるように聞こえるけど」

「真実は一つだが、見た者の数だけ姿を変えるのさ。知っているだ
ろう？」

「メガネかけた小学生探偵の関係者が言いそうなセリフだな」

眉をしかめて俺は、自分の見た夢と、黒妖犬の様子を思い出そう
とした。

「うん。たぶんあいつ、つかまつてる」

「つかまつている？ 誰が？ 何に？」

アーサーが尋ねる。俺は首をひねった。

「そこまでわからない。でもあいつ、つかまつたんだと思う。それ
が違和感だったんだ」

俺は言った。なぜこうも確信が持てるのかわからなかった。同時
に、自分が何を言っているのか理解できなかった。それでもこれが
正しいと、どこかで思っていた。

「あの黒妖犬は、何かをつかまえて。その何かに逆に囚われた。だ
からアーサーを狙った」

「ぼく？」

目を丸くする少年に向けて、俺は手を伸ばした。頭をなでると、
唇から言葉がこぼれた。

「『あのものは、遠くおまえに関わるもの』」

「……ぼくの？」

「たぶんね……トリスタンが言ったように、君のお父さんか、お母さんの家に関係しているんだと思う」

俺の舌が語る、予期せぬ内容をつなぎあわせて、あの黒妖犬はアーサーの父方か母方の血筋に関係している、とどうにか結論づけた。

「そういう事もわかるんですか」

「わからないよ。でも舌がそう言う」

俺は答えて、^{はしほみ}榛を見上げた。

「変な感じだ。方程式を解こうとしたら、先に答がわかってしまったみたい。それが正解だとわかる。でも、途中で説明できない」

「そういうものですか？」

「ああ。良くわかるような、もどかしいような」

ため息をついてから、俺はアーサーを見た。

「あれはたぶん、君に何かを求めている。俺にも」

「何を？」

「『それはあのものにすら、わからぬものとなっている』。自分で自分が何を望んでいるのか、もうわからない状態みたいだね。それでも君の血筋に何か関係があつて、『あれは運ぶ。あれは求める』……うーん。何かを助けて欲しいのじゃないかな……」

「助けるって……でも。触られると死ぬのに」

困った顔のアーサーに、「そうだな」と相槌を打った。

「本当に、何なんだろうなあ。というか、あれは誰なんだ？」

俺はつぶやいた。

「だれ？」

「うん。何、じゃなくて、誰、だと思う」

すらすらと、舌が動く。思考よりも先に。それが不安な思いを内に生む。

正解だとわかる。これが正解だ。でも。

「そうだ。何、じゃない。誰、だ」

「言っている事が良くわかりません……」

「俺にも良く……つまり。『あの黒妖犬は、内側に何かを持っている』」

慣れない。この感じ。自分の内側に、自分の知らない何かがあり、舌がそれに呼応して動く。俺の意志を無視して勝手に。それがひどく……慣れない。不安を覚える。何かが違っていると、違和感を俺の中に溜めてゆく。

そして……怖い。そう。俺は恐怖している。この感覚に。

舌が勝手に動く。それだけで、自分が自分でなくなっただけで、ゆくようにな気がする……。

「……」

言葉を押しとどめようとして、待て、と思う。
止めて良いのか。

「タカシ？」

沈黙した俺を、アーサーが見上げる。小さな体。まだ九歳だ。意外としたたかな所もある。強がりも言う。賢い所も見せる。男の子だなあと感心する所もある。

でもまだ九歳だ。

ふう、と息をつく。俺はどうすれば良い？

「タカシ？」

うつむいた俺を、アーサーは心配そうに見上げた。

「大丈夫ですか？ どこか痛くした？」

子どもの手が俺に伸ばされる。そつと腕に触れてくる。

「ぼく、平気ですよ。男の子だし。がんばれます。タカシ、少し休みますか……？」

何気づかわれてるんだ、俺。二十歳なのに。大人だろう。なのに、こんな子どもに。

「タカシ？」

わけがわからない内に巻き込まれて。死にそうな目に合わされて。怖いだろうに。アーサーは、俺を気づかって声をかけてくる。

「大丈夫だ、アーサー」

俺は膝をつくと、彼を抱き寄せた。

「あつ！」

「おや」

ケルピーとトリスタンが声を上げたのが聞こえた。でも構わなかった。

「え？ あの、タカシ」

「ちょっとこうしてて」

子どもの体をそつと抱きしめる。小さい。少し高い体温を感じた。ああ。生きた人間だ。

生きている、人間の子どもだ。

小さな命。そう言うときアーサーは憤慨するかもしれないが。彼の体は俺の腕にすっぽり収まって、子ども特有の少し高い体温で、大人びた言動を取っていても彼が子どもだという事を俺に伝えていた。なに怯えてるんだ、俺。しっかりしろ。

勝手に動く舌は怖い。俺のものはずなのに、俺のものじゃなくなつたみたいで。俺の意志を無視されたように感じる。自分以外の何かに支配されている気がする。それが嫌だ。それが怖い。だが、それがなんだ。

それが、何だつて言うんだ。

今、必要なのは。アーサーを助ける力。それが最優先だ。それが一番、重要だ。

俺の恐怖心じゃない。

「あれはそれを捕らえた。だが同時にそれに囚われた。囚われたそれが助けを求め、捕らえたあれも助けを求めている」

思考がクリアになる。言葉があふれる。舌がなめらかに動き出す。それを止める事なく、解放してやる。

「『螺旋の夢。時の輪は輝いて踊る。描かれる輪は、終わりなく続く。それは光。それは闇。それは命。それは死。捕らえたものは囚われ、囚われたものは捕らえ、輪は歪み、歌は歪んだ』」

次々とこぼれ落ちる。

「『解放を求め、囚われ続ける事を求め』」

祝福とは、何なのか。俺は、何を与えられたのか。

「『生を求め、死を求め、光を求め、闇を求める。それは何か。何者か』」

けれど。

この何かは、俺が本来持っていたものだ。

「『何者か』」

祝福はそれを、わかりやすい形で表面に出しただけ。

必要だったのは、正確に状況を把握する力。洞察力と、筋道を立てられる思考能力。そして。

俺が持っている、持っているとされている、『真実を見抜く目』とやらを、恐怖を抱かずに使いこなせるだけの気力と胆力。

「『何者か』」

それが知恵となる。

舌が止まり、俺は目を閉じた。アーサーの体を抱きしめる。

「……相反する願いを抱き、生と死を併せ持つもの。矛盾をはらんで存在するもの。……『人間』だ」

これが、正解。

「あの黒妖犬は、……人間の魂を内に抱えている」

「魂を狩りだすものは多くあるがね。狩った魂に囚われた妖精とは情けない」

トリスタンは言った。俺の言葉を疑いもしない。

「俺の……言った事が、正しいと思うのか、トリスタン？」
「君の目が見た事だ。間違えるわけがないさ」

ケルピーが首をかしげる。

「歪んでるのは歪んでたが、あれって魂、内側にあつたせいかな？」
「歪んでいるのはわかってたんだ……」

思わず言つと、「まあな」と返事が返ってきた。

「なーんかキモチワリイ感じがした。こっ、あるはずのどこにあるものがなくて、余分なものがある感じ」

彼の説明は良くわからないが、手をわきわきさせながら言つその感覚は、何となくわかる気がする。

「違和感は存在した。あれが抱える魂の重みと歪みなのだとしたら、納得できる」

トリスタンはそう言うつと、まだアーサーを抱きしめている俺の側につかつかと近寄ってきて、ぐいと引っ張って引き起こした。

「おい」

「君の魂ならば、私も内に抱え込みたくはなるしね」

そのまま自分の腕の中に抱き込んで、トリスタンはふふ、と笑った。

「永遠に虜にする。私の中で逃げられないように。そうしたくはなるよ」

言われた内容に、ちよつとぞつとした。

「そんな事したらおまえ、存在が歪むぞ」

「かまわないよ。君に名をもらわなければ、消滅していた私だ」
「離れる！ 離れる！ は、な、れ、ろー！」

ケルピーがぎゃーぎゃー騒いでいる。俺は、トリスタンの言った言葉に少しひっかつた。

「トリスタン。それって……」

「何だね」

「妖精が、人間の魂を内側に取り込むような事って……良くあるのか？」

「例がないわけじゃない」

「前にもそんなことが？」

「あつたかもしれないね」

トリスタンは俺の頬をなでた。

「理由は？」

「人の子に魅了される事も、我等にはある」

「魅了……」

「離れろっ！ 離れろつてばあああつ！」

ケルピーが叫んでいる。うーん。

「あれもそういう一例かな」

「そうだろうね」

「でもケルピーは、俺の魂を取り込んだりはしないよ」
「どうかな」

トリスタンの意味ありげな言葉に、俺は眉を上げた。

「ケルピー。おまえ俺の魂、欲しいか？」

尋ねてみると、水棲馬の青年は真っ赤になった。

「えっ。くれるの？」

「やらないよ」

「ええー」

残念そうな顔をされた。

「そんなに欲しいものなのか、人間の魂って。トリスタン。そろそろ離してくれよ」

「君の魂は、いつでも我等を魅了するよ」

首筋にちゅ、とキスを落とされた。うひい。

「だからどうして、そういう事を無理強いするんですかーっ！」

アーサーが突進してきた。割り込んで俺とトリスタンを引き離す。ありがとう、アーサー。

「おまえ殺すっ！ 殺すっ！」

ケルピーが歯をがちがち噛み鳴らしてトリスタンを威嚇している。

「ケルピー。俺は大丈夫だから、落ち着いて。まあ、……人間の魂を欲しがる妖精がいるって事はわかったよ」

俺は首筋をさすりながら言った。

「あの黒妖犬も、それで人間の魂を取り込んだのかな」
「多分ね」

トリスタンが微笑む。

「そんなに欲しい魂だったんだ。それで存在が歪んだ……のかな」

「可能性はあるね」

「誰の魂だったのかな……魅了、ね」

俺はつぶやいてから、首をかしげた。

「わからないなあ……」

「君は、恋情についてうとい」

くすりと笑ってトリスタンが言い、俺は眉をしかめた。

「悪かったな。なあ。それって、黒妖犬が人間に恋をしたって事なのか？ それで魂を自分のものにして取り込んだ？」

「そう考えるのがわかりやすいし、自然だろう」

「魂を取り込むなんてどうやって」

「肉体を破滅させて、魂を喰ったのだろう」

トリスタンの言葉に絶句する。

「相手を死なせて、魂を自分のものにした？」

「それが確実だし、手つとり早い」

何でもない事のようにさらりと言われて、悲しみのようなものを感じる。ああ。こいつは妖精だ。人間じゃない。

「そう言えば、おまえに似たような事されたな、昔」

「私は魂を食べたりしないよ」

「俺から魂を引き剥がそうとしたじゃないか」

「君の魂は美しいからね」

何年前の事だったか。この男は、俺の体から魂だけを引き剥がそうとした。寸前まで、本当にぎりぎりになるまで俺は、気がつかなかった。こいつがそんな事を企んでいたなんて。トリスタンは、全く害意を持っていなかった。あくまで善意でやろうとしたからだ。

この男なりの愛情だったのだろう。

けれど人間がそんな真似をされたら。確実に破滅する。

「俺は自分の肉体に愛着があるんだ。人間として生きていたいんだよ」

ため息をついて言うと、「残念だ」という言葉が返ってきた。

「言ってる。人間には人間の都合があるんだ。妖精の都合を優先しないであれ」

「だから無理は言っていないだろう。あの黒妖犬がどうだったかは知らないがね。アンシーリーコートは、欲望に忠実だ。相手の言い分を聞いたかどうか」

ケルピーが顔をしかめた。だが何も言わない。

「ケルピー。アンシーリーコートが人間の魂に魅了される事ってるのか？」

「あるだろうさ」

低く言われる。

「それで、……喰ったりするのか？」

「すげえ惚れたなら、するだろう」

「相手は嫌がるんじゃないか」

「関係ねえさ。惚れたんなら喰うだろう」

「それって……恋なのかなあ……」

「ある種の恋ではある」

トリスタンは言った。ケルピーを見やる。

「そのアンシーリーコートが君を喰ったとしても。それもまた恋だと、このものは言うだろうね」

「俺はタカシは喰わない！」

ケルピーが、きつとした顔になって叫んだ。トリスタンは冷やかな表情でケルピーを見やった。

「どうかな。おまえたちの愛は、肉を裂き、骨を砕き、血をすすりあう事だろう。相手を破壊し尽くして、やっと満足する。違つかね」

「俺はタカシと約束したんだ。その約束を破る事はない」

「本能が勝ったなら、いつかは彼を破滅させる」

白い騎士は言った。

「おまえの約束を信じたりできるものか。欲望に忠実なアンシーリコート。たとえ己が破滅したとしても、いつかは約定を破り、本能で行動するのだろう」

「破壊は俺たちの本能。それが俺たちだ。だが俺は約定を違えたりはしない。……タカシ。俺は、今でもおまえを喰いたいと思っている。だが約束したから喰わない」

「……うん」

「おまえの肉はうまいだろう。血も、骨も、喰らったら夢心地になるだろう。そう思う。だが喰わない。……けれど、もし、俺の本能が勝ってしまったら。おまえを喰おうとしたなら。その時は俺は消滅する事を選ぶ。そう約束する。……信じてくれるか」

妖精と付き合う事は、色々と怖い事もある。

困った事も。

でも、こういう時には。少し感動する。

こんな風にまっすぐに相手を見て、約束をする存在が。今の人間の世界に、どれだけいるだろう。

真摯な言葉。本能に逆らう事を言っているのに。約束だからと、

まっすぐに俺を見る水棲馬。何も飾らない、裏のない言葉だからこそ、人間である俺は心を動かされる。

危険な存在だ。それは知っている。言われている内容を考えれば、どれほど危険かわかる。こいつは本来、人を喰う存在なのだ。

でも俺は、……こいつを嫌えない。

「おまえは約束を守る存在だ、ケルピー。その点については信用している」

そう言うと、ケルピーは笑った。

「そうか」

トリスタンは逆に、むっつりした顔になった。

「君は甘過ぎるよ、タカシ」

「仕方ないだろ。これが俺だ」

俺はケルピーを見やり、続いてトリスタンに目をやった。

「ケルピーも、トリスタンも。俺は好きだし、信頼もしている」

そう言うと、二人は真面目な顔になって俺を見た。

「俺は人間だ。人間である事を選んだ。おまえたちは妖精だ。だからどうしても違ってしまふ。わからない所もある。それは仕方ないでも俺は。おまえたちが約束を守ってくれる事を知っているから、信頼している。そうしておまえたちが妖精であって、人間の事を理解しきれない事も知っているから。その点で信じ過ぎないようにもしている。……俺とおまえたちは、違う存在だから」

言葉を切ると、俺は二人を見つめた。

「その上で俺は、おまえたちが好きだよ。人間としての部分で、おまえたちや、他の妖精たちの事が好きだ」

そう言っただけで微笑む。心からの言葉だった。俺に言える、俺がこいつらに渡せる、ぎりぎりの所の言葉でもあった。

するとなぜかケルピーが赤くなり、トリスタンも頬に血の色を上らせた。

「タ、タカシ……」

「君、どうしてそういう……」

二人して挙動不審になっている。あれ？
つんつん、とアーサーが俺の服の裾を引っ張った。見下ろすと少年は真面目な顔でこちらを見上げてきた。

「ぼく、人が誰かをタラす所、初めて見ました」

……。

タラしたつもりはない。断じてない。

「まあ、あれだ。とにかく、あいつの中から人間の魂を分離させないと駄目って事だな？」

笑顔って最強の暴力にもなるんですね、とか意味不明の事を言っている子どもは置いておいて、俺は言った。

「それができるならね」

「どうやるんだ？」

トリスタンが応じ、ケルピーが尋ねる。俺は眉をしかめた。

「うーん……名前を呼ぶ、とか？　アーサーの親戚で亡くなった人がいたら……」

「現代の人間の魂とは限らないよ？」

「あ、そっか」

トリスタンの言葉に俺は考え込んだ。トリスタンはそんな俺を見て言った。

「まあ君の目と、今は舌があるからね。本質を見分ける事ができれば、名を言い当てる事もできるかもしれないが」

「本質？」

眉を上げた俺に、トリスタンはふふ、と笑った。

「たとえばその子ども。君にはどう見える？」

「アーサー？」

俺は少年に目をやった。子どもはちょっと緊張した顔になって俺を見上げた。

「九歳のイングランド人の子ども……、『古き血を継ぐ幼子。猛き獣の名の王は、世に平和をもたらした。その名を継ぐ者。揺らぎやすい境界線上にあるものの一人』」

すらすらと舌が動く。

「これがどうしたんだ？」

「名は、本質に影響を与える。君の見た彼の本質は、猛き獣の名、そして王の名を持つ者でもあった。……そこから彼の名を導き出す事ができるだろう？」

「獣、ただだとわからないけど……王の名、から何となくわかるか」

猪という意味の名前、アーサー。かつてこの名前の王さまがいた事は、イングランド人なら誰でも知っている。

トリスタンの言葉に俺はうなずいた。

「俺が黒妖犬の中の魂を見れば、名前につながる何かが見えるはず

……か？」

「手がかかりぐらいにはなるだろう」

「そうだな」

俺はうなずいて、思い出そうとした。あの歪み。あの違和感。

「『……螺旋……』」

舌が動く。何だろう。意味不明だ。

「螺旋？」

アーサーが首をかしげる。俺も首をかしげた。

「何だろう。それしか思い浮かばない。螺旋に関係した名前ってある？」

「ええ？ 何だろう」

アーサーはぶつぶつと色々な名前を言い始めた。

「螺旋^{スパイラル}……バーバー（理髪店）？ ヘリックス（数学の螺旋）……ヘリオス……エリック……全然違う。巻きつく植物とか……えーと、^{モニング・グローリー}朝顔……グローリア……男性の名前じゃないな。タカシ、その人、女の
人なんですか？」

言われて気がついた。俺は『男』だと勝手に思い込んでいた。

「どう……なんだろう。あれは、『男性だ』」

何をどう判断しているのか知らないが、俺の舌はするりと断言する。

「……男、らしいよ」

「そうですか。じゃあ、花の名前とかは除外できますね」

アーサーが言う。

「名前からイメージされるものを、魂が抱えている事もあるよ。螺旋そのものを名に持っているわけではなく」

トリスタンが言う。

「イメージ？ 螺旋の？ うーん……ネジとか、DNAとか……でもそれって名前とどうつながる……？」

「頭文字がその三文字、とかじゃないですか？」

「（D）ドナルド・（N）ネイサン・（A）アレンとか？ ……何か違うよそれ」

「らせんって、あれだろ？　ぐるぐる回るやつ」

ケルピーが言った。

「ぐるぐる回る。うん。回るものって、他に何があったっけ」

アーサーが自信なさそうに言った。

「カルーセル、とか」

メリーゴーランド（カルーセル）。

「それも何か違うよなあ……」

ぐるぐる回ってはいるが。

「螺旋、螺旋、……回るもの。何だろう」

「我等にとって螺旋とは、太陽や月の刻む時や季節も意味するがね。時は巡るものだから」

トリスタンの言葉に頭を抱える。

「駄目だ。何にも思いつかない」

「本人のこだわりの場合もあるしね。案外、なんでもない事に結びついていたりするよ。他の者にはわからなくとも、本人が己の名を呼ばれるたびに連想して、結びつけられていた、とかね」

トリスタンが言った。俺はうなずいた。

「あー、そっか。本人には意味があるけど、他の人間には良く分か

らない連想……あるよね、そういう事。うわー、でもそれだと部外者はまずわからない……でも連想するくらいだから、『螺旋』に何か関係している名前、と思いたい！……螺旋……上に昇る力……時の流れ……コイル……電磁誘導……」

ぶつぶつぶやいてみると、いきなり『三拍子』と舌が動いた。

「……なんだ？」

「三つの拍子だね」

「いやそれはわかってるけど。なんで三拍子」

「音楽に関係した名前の人じゃないですか？」

音楽関係。全然わからない。

「三拍子の音楽って、どれだけあるんだよ……俺、作曲家とか全然知らないぞ」

「螺旋、で三拍子？」

アーサーも首をかしげている。

「宗教関係ではないかね」

トリスタンがためらいがちな感じで言った。

「宗教？」

「三という数字は魔法に良く使われた。様々な宗教がその感性や思想を踏襲した」

「ああ、……素数は、何か神秘的な力があると思われていたんだっけ。キリスト教でも重要な数字だった」

つぶやいて俺は、ふと胸をよぎった思い出に目を閉じた。エレン。彼女がここにいれば、何かわかっただろうか……。

『そんなの、私にわかるわけないでしょ』

不意に彼女の明るい声が聞こえた気がした。そうだった。歌を愛して、愛を輝かせ、感性のままに歌っていた彼女に、理屈なんて意味がなかった。それでも彼女は正解を見つけた。その感性で。全ての理屈をすっ飛ばして、たどりついた。

泣いても、わめいても、最後には。笑って行くべき道に向かった。あの潔いまでの胆力と勇氣。俺を抱きしめた腕の優しさ。少しの狡さと愚かなまでの善良さ。……明るく輝くあの魂。

エレン。

君に会いたい。

「タカシ？」

「ごめん。ちよっとぼうつとしてた」

トリスタンの声に我に返り、俺は言った。

「良くわからないよ。俺が見た時、黒妖犬の中に沈んだ何かは見えたけれど。詳しく観察している時間なんてなかった。もう一度、じっくり見たらわかるのかもしれないけれど」

でもそれをするには、黒妖犬とまた出会わなくてはならない。

「あいつを滅ぼした方が早い」

ケルピーが不機嫌そうに言う。俺は首を振った。

「それは駄目。中に人間の魂が入ってるんだぞ」

「別にかまわないだろ」

「駄目だつて。どんな影響が出るかわからないんだから。ただでさえ、おかしい歪みになってるんだぞ」

「おびき寄せて間近で見るのかね？」

トリスタンが言い、俺は「そうだな」と言った。

「他に手がないなら、そうするしかないな」

「危険だぞ。あれは一度、君に触れようとして果たせなかった。今度こそ、触れてくる」

「他に手があるか？」

アーサーがそこで、強張った顔で俺の服の裾をつかんだ。

「タカシ。でもそれ、危ないです」

「そうだろうけど。ちよつと観察してみたいんだよね。うまく行けば魂を分離できるかもしれないし。……なあ、ケルピー。俺って餌としてどうよ？」

「どうしてタカシが餌になるんですか」

「どうしてって……なるだろう、俺。ならないかな？」

そう言つと、「タカシなら立派な餌になるな」とケルピーが太鼓判を押してくれた。

「そうじゃなくて。タカシ。あなたは本当なら、……何も関係ない安全でいたはずなんです。なのに。ばくに関わったから、危険な目に」

「何言ってるんだ、アーサー」

と言っか、今さら？

「俺はまあ、性分だよ。こういうのに首突っ込むのは。君を家族の元に帰すって約束したしさ」

「それで、あなたが危険な目にあうのは嫌です」

アーサーは真面目な顔で言った。俺はまばたいた。

「危険なのは君の方だろう。俺は大した事ない。トリスタンの魔よけもあるし」

「タカシは、自分がどんな状態だったか見ていないから」

アーサーは唇を噛んだ。

「死んだかと思いました。倒れたきり、動かなくなつて。体温も低くなつて。それも、……ぼくのせいです。ぼくをかばったから。嫌なんです。自分のせいで、……タカシが危険な目に合つて。ぼくは何にもできなくて。だから。……嫌なんです」

うつむいた子どもは、思い詰めた顔をしていた。俺が倒れたのがよほど衝撃だったらしい。

それにこの子は、責任感が強いようだ。頭も良い。自分を助ける為に俺が尽力しているのが、良くわかるのだろう。だからこそ、つらく感じているのだ。……自分が無力であると思い知らされて。

「死んでいないだろう？」

俺はそう言って子どもの頭に手を置いた。

「なあ。俺は大人で、君より妖精の事を良く知っている。こいつらが危険な事も知っているし、ここの事も君よりは詳しい。だからできる事をしている。それだけだ。俺だって、子どものころには誰にかばってもらったし、手助けもしてもらったよ」

ぽんぽん、と軽くたたくと、アーサーは泣きそうな顔になった。でも我慢して、唇を噛んだ。

「タカシが危険な目にあうの、嫌なんです」

「生きてゆくのに危険はつきものだよ。どこにいたってさ。危険を危険だと認識しているから、その分、俺は大丈夫」

妙な理屈を言いながら、俺は子どもに笑いかけた。

「俺の側には妖精が二人もついてるし。さっきも大丈夫だった。平気だよ。どうしても気になるって言うんなら、いつか君が大きくなった時に、助けを必要としている子どもを助けてやってくれ。そうしてくれたら、俺はうれしい」

アーサーは俺を見上げ、頬を染めた。しばらく動かない。それからいきなり抱きついてきた。

「え？」

「約束します。ぼく、……大きくなったら。誰か困っている人を助けます」

「うん」

「大きくなって。強くなって。絶対、誰かを助けられるような大人になります」

「うん。がんばれ」

笑って俺はアーサーを抱き返した。

「タカシみたいに優しくて、強い人になります」

「俺が強いかどうかは知らないけど。願いを持つなら道も開ける。君が望むような大人になれるように」

きゅっ、と一度抱きしめて。それから腕を離した。アーサーは俺を見上げてちよっと笑った。

「やっぱりタカシは妖精みたいだ。……それとも、天使かな」

「いや、俺みたいな天使がいたら、天国は困った事になると思う」

思わずそう言う。そこでふと、背後が静かな事に気がついた。どうしたんだと思って振り返ると、ケルピーとトリスタンが複雑そうな顔をしていた。

「君はまあ、どうしてそう、次から次へと相手を魅了してゆくのかね。子どもにまで手を出す事はないだろう」

トリスタンが言い、ケルピーは、うらやましいだの、抱きつきたいだのぶつぶつ言っていた。

「はあ？ 魅了？ そんな事した覚えはないぞ」

「無意識かね。頼むから、無防備に笑顔を振りまかないでくれ。人間の世界でどれだけの男が惑わされているのか、心配になってきた」

何だそれは。

「とりあえず、どれだけ危険なのか説明するよ。君はわかっていないようだから」

アーサーを引き剥がしてからトリスタンが言った。子どもはぽいっと放り出され、ケルピーに抱き留められた。

「その子どもは、馬妖精が面倒を見ると良い」

咄嗟に抱き留めてしまったらしいケルピーは、面倒くさそうな顔をして子どもを地面に下ろした。

「なんで俺なんだよ」

トリスタンが彼を怒らせるような事を何か言う前に、俺は慌てて声をかけた。

「ケルピー。アーサーを守ってやってくれるか」

「任せる！俺がついてたら何があっても大丈夫だ！」

「うん。おまえ強いから。信頼してるよ、ありがとう」

そう言って微笑むと、ケルピーは満面に笑みを浮かべて、「おう」と言った。物凄くうれしそうだ。何だか子どもを騙しているような気がして、良心の呵責を感じる。

「だからタカシ、ヒザマクラな！」

「……忘れてないんだ、それ……」

そんなにしたいのか、膝枕。

「ずっと消えない印にしておもうか」

何やら不穏な笑みを浮かべて、トリスタンが俺の手を取る。

「いやあの。それより。危険がどうのって？」

守護の印はありがたいのだが、ケルピーとは長い付き合いだ。彼をこうまで苦しめる印は、少し困る。そう思って自分の手を取り戻し、話題を逸らすと、トリスタンは答えた。

「あの馬は、君に触れただろう？」

「え？」

「黒こげになりながらも、触れていただろう」

そうだった？　と思って今までの事を思い返す。襟首をつかまれた。抱きつかれかけた。抱きつかれかけた。抱き……ええと。

「服に触るぐらいでも、火花散ってたけど……」

「それぐらいなら火花で済むよ。私が君を魅了しようとした時、あれは君の腕をつかんだ」

俺は目を丸くした。どさくさに紛れて気がついていなかった。

「そうなんだ……？」

「おかげで黒こげになったがね。それでも、あれは『腕をつかんだ』。つまりはそういう事だ。焼かれる事を恐れさえしなければ、『触れる』事はできるのだよ。その印をつけていても」

トリスタンの言葉に息を飲む。それはつまり。

「死ぬ可能性もあるわけか。あれに触れられて」

「あれが、己が滅びる事を厭わなければ。君に触れて焼かれた後は、身動きができなくなるだろうからね。報復として我等に八つ裂きにされる事ぐらいは見当がつくだろう。それでも君に触れる理由があり、触れようと思うのなら、可能だ」

そこで彼は、す、と俺に近づいて。耳元に唇を寄せてささやいた。

「君は完全には人間ではない。黒妖犬に触れたとしても、おそらく即座に死ぬという事はないだろう。君の中の妖精の血が、君の命を守る。だが君は、妖精という訳でもない。覚えておきたまえ。黒妖犬に触れられれば、人間には死は免れ得ない。命は助かるとしても、触れられれば、君の中の人間の部分が死ぬ」

俺は彼を見上げた。その白く美しい顔を。

「ここから戻れなくなるということか」

「戻る気もなくすだろう」

「その方がおまえには、都合が良いのじゃないのか、トリスタン」

「君が、私以外のものの手で変化を遂げる事は許せない」

彼の顔は真剣だった。俺を案じてくれているのも本当だった。

「優しいのだからそうでないのか、わからない男だな」

俺はそんな彼を見て小さく笑った。

「忠告をありがとう。気をつける」

「そうしたまえ」

彼は離れた。

その間、ケルピーはぎりぎりと歯をきしらせていた。だが何も言わなかった。離れた所にいる人間には聞きとれないだろうささやき声だったが、彼にはトリスタンの言っている事が聞こえたらしい。俺にとって大事な事を言っていると、そう判断して我慢したのだから。

「なあ、ケルピー。あいつ、どうやったらおびき出せるかな？」

そう言つと、彼はむ、とうなった。

「タカシ。おまえと、この人間の子どもをあれは狙ってる。姿が見えないけど、今も狙っているはずだ。一人でふらふらしてみろ。一発だ」

「そうか。そう言えばさつきは、アーサーが一人で立っていたな。俺たちから離れて」

そう言つてから、俺は微笑んだ。

「アーサー。ケルピーから離れるんじゃないよ。ケルピーはその子を守る事を第一にしてくれ。黒妖犬が出て来ても突っかったりしないで、とにかくこの子を守ってくれ」

「おまえは？」

「俺は餌になるから。一人でふらふらしてみる」

そこでトリスタンに目をやる。

「少し離れていてくれるか」

「構わないが……」

「危険を感じたら呼ぶ」

「そうしてくれ」

「俺もタカシの方が良い」

ケルピーがぶちぶち言っているのに、目をやる。

「おまえにしか頼めないんだよ、ケルピー。その子の事は。おまえは強いから、俺は安心だよ」

「だけどさあ」

「頼むよ」

真面目な顔でそう言つと、彼は黙つた。

「仕方ないなあ……恩に着ろよ」

「着る。ありがとう」

微笑むと、顔を赤くしてそっぽを向いた。

「タカシ」

不安そうな目でアーサーが俺を見た。俺は少年に微笑みかけた。

「大丈夫。魂を見るだけだから。何だかさ。俺にはそういう才能があるらしいし」

「でも」

「危険でも、こうしないと先に進めそうにない。俺にはその能力がある。だからやる」

肩をすくめる。

「シンプルだろ？」

「ぼくは自分が情けないです。何にもできなくて」

「俺にもあつたよ。そう感じる事。でも今は守られてくれよ、アーサー。頼む。嫌だとは思うけど」

アーサーに近づいて、髪をくしゃつとしてやる。

「それで自分に力がないって、力不足だって、そういう思いも忘れる事なく持っていてくれ。忘れなきゃ、努力をするからさ。そうしたら君はいつか、誰かを守れる力を身につける」

アーサーは俺を見上げた。目に、少し傷ついたような陰りがあつた。

「でも『今』には間に合いません」

「『いつか』の『誰か』には間に合う」

その陰りに気付かない振りをして、俺は言った。

「それが大事なんだよ。そういうものなんだ、人生って。今は理不尽に思えるかもしれないけれど。……大丈夫。トリスタンは俺を見捨てたりはしないから」

「私をあまり信用しすぎるのも、君にとっては破滅だと思うがね」

白い騎士が言った。俺は笑った。

「他の妖精に手出しされるような真似はしないでろ、おまえ。独占欲強いから。だから『今』に関しては、間違いなく信用できる」

「その通り。腹の立つ人間だ」

ふー、とトリスタンは息をついた。

「だが愛しい。いつか必ず、君の魂を手に入れる」

「その時にはがんばって逃げます。えーと。じゃ、俺一人でふらします。ケルピーはアーサーを頼むね。トリスタンは、少し離れた所にいてくれ。で、もし黒妖犬が出たら。悪いけど、相手をしてくれるか。俺が観察できるように、時間稼ぎを頼むね」

「あのようなものを相手にするのは不本意だが。まあ良からう」

トリスタンが言った。ケルピーが陽気な感じに言った。

「タカシ！ 終わったら絶対ヒザマクラな！ 前のと合わせて二回！ さつき一回だけって言ったけど、二回！ 良いか？」

「それなら私も、もう一度したい」

トリスタンが言う。俺は顔を強張らせた。

「何でそこだわるんだよ、おまえら」

「だって好きな相手とするもんなんだろう、ヒザマクラは。俺はタカシが大好きだから、やりたい」

全く裏のない、ケルピーの笑み。直球だ。こちらが恥ずかしい。

「日本文化だしね……」

ふふ、と笑ったトリスタンの言葉には、言外に別の意味がてんこ盛りにされているような気がした。なぜそんな気がするのか。

「愛しい相手が心からの信頼を寄せて無防備になり、なすがままの状態に……」

背筋が寒くなった。違う。こいつの膝枕の解釈は絶対違う。

「タカシを背中に乗つけるのは、前にやったけど。膝に乗せるのはやった事がない。それでなでてやるのは楽しそうだ。なでてるだけって不思議な感じするけどなあ。噛みつくのとか、なしって言うのは。でも俺、上手にやるから。おまえが気持ち良いようにがんばるから」

ケルピーの発言。にこにこしながら、純真な子どものような響きの言葉を言う、んだが。内容にひっかかるものを感じるのは、俺の気のせいだろうか。

「私の手の下で無防備になる君。私の手の動きに体を委ね、心を開いてゆく君。蕾が花開くように恥じらいながら、私に全てを任せる君。ふ。ふふふふふ」

こいつも直球だ。ある意味直球だ。セクハラ親父か、おまえは！

「タカシは可愛いからな！ いっぱい、なでてやるな！」

「ふふ。とても愛らしいだろうね……」

「おまえら……俺にダメージ与えて楽しいか……？」

男の子だから逃げません。でも泣いて良いですか。

結局、膝枕はケルピーには約束通り一回だけ、トリスタンは何もなし、という事になった。

7・(前書き)

夏至までに終わらせなかったのですが、間に合いませんでした。残念。あと少しで終わりです。もうしばらくお付き合い下さい。残

大気の中にある光。それがきらめきを増した気がした。

「来ないなあ」

とりあえず、俺は一人でうろついた。離れた所にケルピーとアーサーがいる。トリスタンも、ちよつと離れた所から俺を見つめている。

「警戒されたのかもしれないね」

「もうちよつと離れた方が良いか？」

甘く香る大気。顔を上げると、きらきらとした輝きが、俺の周囲を踊る。

どれぐらい、ここにいますか？

あまり長くなると、人間の世界の時間との調整が難しくなる。こちらとあちらでは、時間の流れ方が違うのだ。下手をするとアーサーは行方不明扱いになる。何日も消えていたと、戻った時には騒ぎが起きるだろう。かつて、俺がそうだったように。

……。

ちよつと暗い気分になった。最長は何ヶ月だったっけ。こつちでの時間の流れ方って、本当に良くわからないと言うか。まさかそんなに時が過ぎてるなんて思わなかったから、帰った途端、辻褄合わせに冷や汗をかいた。帰るのに苦労して、帰ってから苦労して。母親が経験者だったので、フォローはしてくれたけれど。

受験の日に何かあったら、浪人してたよな……。

中間試験や期末試験の時は呼び出さなくてくれと、知り合いの妖精全員に頼み込んだ。それでも何かの拍子に引つ張られる事があったので、普段の授業中、必死で集中した。試験勉強がまるまるできない事もあったからだ。記憶できるものはその場で記憶！が俺の勉強法になった。おかげで集中力や記憶力は鍛えられた。怪我の巧妙というやつだろう。しかし勉強する時間は、他の同級生たちより格段に少なかったはずだ。高校にも大学にも、良く受かれたなと思う。

病弱で、健気系の美少年。

自分がそういう評価を受けていたと後から知って、複雑な気分になった。どの辺りを突っ込めば良いのやら。

最近、一日で帰る！を目標にしている為、学業やバイトに支障が出る事はさほどない。妖精の友人たちからは不評だが、そうでもしておかないとこの先、就職に影響する。たぶん。

（でもある程度、時間に余裕のある職種じゃないと、問題起きるだらうな……）

予測できてしまう、自分が悲しい。

（それにしても、病弱……）

……。

……。

……。

「タカシ？ 顔色悪くなってますよ。気分でも？」

「ナンデモナイデス」

アーサーの言葉に力なく答えた。瑠璃子の友人が書いている、ト

ンデモ本の内容を思い出して、力が抜けそうになったのだ。恐ろしい事に俺が主人公だという（絶対嘘だ！）。ファンタジーなんだかSFなんだかオカルトなんだか、よくわからない内容の（現代物じゃない時点で主役が俺ってありえないだろう！）。思い出すな、俺。名前が同じでも、あれは別人。どこか別のところに住んでる知らない人！

俺はフツの男の子です。うなじからフェロモン出したりしてないです。びらびらした服も着てないです。なぜかいつも満月の庭で薔薇喰ったり、霧の中でにやにや笑ってる趣味はないです。王子になった覚えも、姫になった覚えもないです。もちろん不治の病だったり、血を吐いたりもしてません。大体、どうして相手役が男なんですかーっ！

『人気あるからシリーズになってるよ！』

笑顔で言った妹の言葉まで思い出した。シリーズ。あれが何冊も。

『一番人気は、家族を全て殺されて、孤独に生きているお兄ちゃんが、真実の愛に巡り合うまでを描いた『月光の中に咲く薔薇』シリーズなの！』

家族を全て殺された俺。書いてるのはおまえの友人じゃないのか、瑠璃子……。

りん。

りん。り、りん。

り、り、りん……。

小川のせせらぎが、銀色の音色を響かせる。鈴のように。ふと、
そちらに意識が向いた。

り、
り、り、りん。
りん、……。

三拍子。螺旋。
あれは、何の意味。それに、あの夢。

……りん……。

俺に見えているものは……何。
ふっ、と大気が重くなった。輝きが消えて、陰りが生じる。

「来る」

トリスタンが少し離れた所でつぶやいた。音楽を産み出す妖精は、
そうした声ですら、どこか心をとらえる。

「タカシ」
「アーサーの側にいてくれ」

俺を呼んだケルピーにそう返して、俺は腹に力を入れて立った。
生臭い風が吹いた。そして。
じわり、と。

滲み出る、闇。

それは最初、大気にできた染みに見えた。

黒い汚れ。

ぼつりと落ちたような染みが、次第に広がる。じわじわと周囲を浸食し、黒く全てを塗りつぶして大きくなってゆく。ぐをる。ぐをる。ぐをる。

世界を食むようにして、広がり。質感を持って『存在』を始める。

ぐをる。

らんらんと輝く赤い目。生臭い息を吐く口。ずらりと並んだ牙がちがちと噛み鳴らされた。

真つ黒な炎の中にある、欲望。破壊と怒り。そして。
焦燥……？

ひたり、と。視線が俺に固定される。

まばたきを一つか二つしただけの間に、俺の前には牛ほどに膨れ上がった黒妖犬モザ・ドゥーグがいた。

ぐをる、る、る……。

唸り声。黒妖犬は、体を低くして俺に飛びかかる体勢になった。その中にあるもの。

三拍子。

(え?)

彼の中にある何かが、きらめいて俺の目を打った。あれは。

「……バツハ？」

光っているその形が、音楽になって見えた。有名なアレ。なんだっけ。ナントカいう曲。思い出せない。

黒妖犬の動きが止まった。

「バツハ？」

おうむ返しにアーサーが言う。

「曲ですか？ 何かの」

「ああ……これ」

俺は見える通りに、きらめきの歌う音をなぞった。声で。

「ララ……ラララ、ラララ、ララララララ、ラララ……」

「あつ、知ってる！ ええと……聖歌隊が前に教会で」

アーサーが慌てたように言った。けれどタイトルが思い出せないようだ。

「歌詞があつて……ええつと」

黒妖犬は俺を見ている。赤く燃える目で。

「歌詞……」

つぶやいて、俺はきらめきに目を向けた。集中する。
これは。何。

J e s u s b l e i b e t m e i n e F r e u d e ,
M e i n e s H e r z e n s T r o s t u n d S a f t ,

「ドイツ語……!?」

いきなり現れた言葉に、思わずたじろぐ。すると黒妖犬が、ぐる、
とうなった。黒い毛に包まれた筋肉が収縮するのが見えた、と思っ
た次の瞬間、飛びかかってきた。

どん！

どつという動きをしたのか、トリスタンが俺の横に現れた。片手で
軽く俺を押しやり、自分自身もひょいと身かわす。俺とトリスタ
ンの間を黒妖犬は走り抜け、立ち止まった。うなりながら、振り返
る。

「……ありがとう」

「どついたしまして」

軽く押されただけなのに、結構な距離を吹っ飛ばされて、俺は肩
を抑えながら言った。本当に力強いな、この男！

「無事か、タカシ!」

「平気だ。アーサーの側を離れないでくれ!」

声をかけてきたケルピーに返し、俺はもう一度黒妖犬を見た。その中にある、人の魂を。

「イングランド人だと思ったから、英語を予想してたんだけど。ドイツ語……」

バッハの曲つて、ドイツ語なんだっけ?

「賛美歌……だよな?」

三拍子は三拍子だ。螺旋……と言うのも、このメロディを考えれば連想可能だ。

ゆるやかに上り下りを繰り返す、曲……。

「でもなんでバッハ?」

歌詞に何かあるのだろうか。

J e s u s w e h r e t a l l e m L e i d e ,
E r i s t m e i n e s L e b e n s K r a f t ,

「イエス……は? 悲しみを? ええつと? 彼は……えー? 私の、強さ……レーベンス……あ、命。命の強さ?」

ドイツ語、第二外国語で取りました。でも、翻訳がすぐできるほどの実力はないです。

Meiner Augen Lust und Sonne,
Meiner Seele Schatz und Wonne:

「私の……ええっと？　ゾナって太陽……ウントはわかるけど、ウントなら！　ゼーレ？　なんだっけ、魂……？」

駄目だ。覚えている単語が絶対的に不足している。誰か俺の代わりに翻訳してくれ！

Darum lass ich Jesum nicht,
Aus dem Herzen und Gesicht.

「私はイエスを決して……しない？　ヘルツェン、ウント、ゲズイヒト……ああ、わからん！」

きらきらと光る音。それが魂を響かせている。黒妖犬の中で。音楽は、言葉が綺麗に並んでいる。整えられたリズムが何かを刻んでいる。

でも意味が！　意味が全然！

「いついつ時にどうして動かないんだ、俺の舌！」

これでドイツ語がぺらぺらになれば嬉しいのに。意味をしゃべ

ってくれたら、すごくありがたいのに！

ぐをるおおおおっ！

吠えて、黒妖犬が突進してきた。俺は慌てて逃げた。
息がかかった。ひえ。

Wohl mir, dass ich Jesum habe,
O wie feste halt ich ihn,
Dass er mir mein Herz erlabe,
Wenn ich krank und traurig bin.

「うわ!？」

突然、俺の見ていたきらめきが強くなった。俺の耳に、大きくなった歌声が響く。俺は慌てて耳を抑えた。けれど歌声は、叫んでいるかのように轟いた。

Jesum hab ich, der mich liebet
Und sich mir zu eigen gibt;
Ach drum lass ich Jesum nicht,
Wenn mir gleich mein Herz er
icht.

声と共に、絡みつく何かが見える。三拍子のリズム。きらめく音。
轟く言葉。

「え……わ、ちょ、これ！」

絡みついてくる。音が。言葉が！

O	O	O	O
w	w	w	w
i	i	i	i
e	e	e	e
f	f	f	f
e	e	e	e
s	s	s	s
t	t	t	t
e	e	e	e
h	h	h	h
a	a	a	a
l	l	l	l
t	t	t	t
i	i	i	i
c	c	c	c
h	h	h	h
i	i	i	i
h	h	h	h
n	n	n	n
,	,	,	,

「……あああ！」

鼓膜が破れそうほどの叫び。轟く声が俺を捕まえる。目に見えない鎖が動きを封じる。身動きができない。腕。腕が。

O	O	O	O
w	w	w	w
i	i	i	i
e	e	e	e
f	f	f	f
e	e	e	e
s	s	s	s
t	t	t	t
e	e	e	e
h	h	h	h
a	a	a	a
l	l	l	l
t	t	t	t
i	i	i	i
c	c	c	c
h	h	h	h
i	i	i	i
h	h	h	h
n	n	n	n
,	,	,	,
……			

伸びてくる、誰かの腕が、俺を。

ひゅっ！

不意に。声が途切れた。はっ、としてまばたくと、目の前にトリスタンがいた。白い妖精の騎士は弓を持ち、矢をつがえて黒妖犬を狙っていた。

「良い度胸だ。この私の前で」

唇の端が歪み、冷たい笑みが彼の顔に上った。

「彼に。歌で呪縛をかけようとは」

呪縛？

黒く膨れ上がった黒妖犬が、ゲツ、ゲツ、と妙な音を立てた。それが彼の笑い声だと気づくまでに、少しかかった。

『ソノ、ニンゲン』

黒妖犬は真つ赤な舌をだらりと垂らすと、鋭い歯を見せた。

『欲シイ』

「誰がやるか」

トリスタンが次の矢をつがえる。

「待つて」

俺はトリスタンの腕に手をかけると、彼の後ろから前に出た。

モーザ・ドゥーグ
「黒妖犬。おまえの中にいるのは誰だ」

俺が声をかけると、黒い獣は炎の色の目をすがめた。

「どうしてバツハの旋律が聞こえるんだ。おまえの中から。その人は……、」

『輝キハ、闇ニ墜チル』

きしむような声で黒妖犬が言った。ゲツ、ゲツ、と笑い出す。

『オマエ。オマエモ。闇ニ。闇に墜チル。オマエ、モ!』

「俺は墜ちないし、おまえの中の人も墜ちてはいない」

きつぱりと言うと、黒妖犬は笑いを止めた。

『俺ハ、死ヲ運ブモノ』

黒妖犬が言った。

『憎、憎シミ、恐れ、オ、俺、ハ』

ぶるぶると体が震えている。内側から膨れ上がる、何かに耐えようとしても言うように。

『俺ハ。俺、……お、おれ、は』

きしむ声。

『おれは。お、おれ、にく、憎しみ、つ、つめたさ、闇……』

声が。

「人の声……？」

アーサーがあえぐようにつぶやいた。黒妖犬は苦しげに身悶え、空に向かって吠えた。

ぐるあああああああつ！

同時に跳躍する。俺に向かって飛びかかってくる。トリスタンが俺の腕をつかんで引いた。突き飛ばされる。俺は地面に転がった。

光る。

黒妖犬の中にある、歌が。

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,

「私は……、彼を。抱きしめる」

俺はつぶやいた。その言葉がぱつと弾けて、何かが見えた。痩せた、黒髪の青年。灰色の目の。ピアノの音。

『この音は、孤独だね。でもとても美しい』

彼を見つめる。彼自身もまた、ひどく孤独に見えた。

『君はなぜ、ぼくの前に現れたのかな。でも、音楽が好きなんだね。……この曲には歌もついているんだよ』

彼の声。優しい光が満ちている。熱を持つ、人の子の歌。

『ぼくの名は、彼と同じなんだよ』

E r i s t m e i n e s L e b e n s K r a f t ,

「彼は、私の。生きる力」

響いた言葉をつぶやいて、俺は彼を見た。今では黒妖犬に重なって、誰かの姿がはつきりと見えた。

穏やかな顔をした、黒髪の青年。灰色の目が、俺を見つめる。

『……』

幻の中で、誰かが彼の名を呼んだ。その、名前。舌が動く。

「『ジョン・セバスチャン』」

俺がその名を口にすると、幻影の青年は微笑んだ。

* * *

ピアノが好きだった。

鍵盤を叩くと生まれる音は、のびる緑の命を、海の底の魚のつばやきを、空高く飛ぶ鳥のはばたきを、心の奥底にしまった秘密を。ある時はささやき、ある時は叫ぶように歌った。

父は、彼に跡を継いで欲しがっていた。軟弱な趣味だと笑われた事もあった。けれど。

ピアノが好きだった。

音楽を奏でる事は、彼にとって。世界を産み出す事に等しかった。

そのものが、いつから側にいたのかわからない。
気がつくと、彼のピアノを聞いていた。

決して近づいては来ない。彼以外の者の目には映らない。けれど、彼にはわかった。『それ』が彼のピアノを愛し、その音になくさめられている事が。

『音楽が好きなんだな』

初めて話しかけた時には、ちらりとこちらを見て、すぐに消えてしまった。けれど根気よく、一言、二言と話しかけると、やがて静かにくつろいでいるようになった。

『知っているか？ ぼくの名前は彼と同じなんだ』

ある時、そう言ってピアノを弾いた。

『この曲には歌もついている。賛美歌だよ。歌ってみようか？』

『それ』は、彼を見た。歌って欲しがっている。そう思った。

英語ではなく、原語のドイツ語で、彼は歌った。考え抜かれて作られただろうその曲は、ドイツ語の響きですら音楽の一部として、美しい模様を大気に刻み、螺旋を描いて変化する。

ここに世界がある。

そう思った。

ここに。今、ここに……。

数年が過ぎた。彼は父親を説得し、ピアニストとして歩み始めた。彼の音楽は派手な所がない分、繊細だとされた。叩かれる事もあったが、人の心を癒すような優しさを持つとして、少しずつ人気が出始めていた。

『君はずっと、聞きにきてくれるね』

『それ』に彼は話しかけた。夜、一人でピアノを弾きながら。

『君には感謝しているんだ。ピアノを断念しようかと思った事もあった。でも君が、聞きにきてくれるから。君に恥ずかしくないような音楽を産み出そうと、そう思えるようになった。諦めずに、もう少しがんばってみようって』

『それ』は何も言わない。彼も返事を期待していない。ただ、言葉を。ぽつり、ぽつりと口にした。

『ありがとう。ぼくの音楽を好きでいていくれて』

それは、黙って彼を見ている。

『何か、弾こうか。何が良い？』

『それは、ふらりと動いて。ゆるゆると回ってみせた。螺旋。』

『螺旋……あれかい？ バッハのカンタータ147番の、コラール』

彼は微笑んだ。

『心と口と行いと生きざまもて。……主よ、人の望みの喜びよ。』

最初の音をピアノで弾くと、『それは嬉しそうに笑ったように見えた。』

彼は弾いた。心を込めて。

何年かが過ぎて、彼は病いに倒れた。

細くなつてゆく腕。力をなくしてゆく指。

それでも、ピアノを弾きたかった。

薬に頼り、痛みを押さえ、彼はピアノを弾き続けた。

ピアノ。

音楽は、彼に世界を見せてくれる。

ピアノを弾いている間、目の前に開けて見える美しい世界に、彼は最後まで浸っていたかった。けれど。

『……』

息が。

腕が。

指が。

……意識、が。

『弾きたい』

祈るように、彼は思った。

『弾きたい……んだ』

ピアノ。

ぼくに、ピアノを。音楽を、奏でさせてくれ……。倒れて運び込まれた寝台の上でそう思った時。『それ』は、彼の元を訪れた。

* * *

俺は、目の前の青年を見つめた。どこか貴族的な顔たちをした、優しげで繊細な容貌の彼を。

ジョン（ヨハン）・セバスチャン（セバステイアン）。

バッハの名前だ。ヨハン・セバステイアン・バッハ。彼は自分の名前、ジョン・セバスチャンを聞きたびに、この作曲家の事を連想していたのだろう。そうして、ピアノ。ピアニストだった彼にとって、音楽は言葉以上の言葉だった。

「ジョン・セバスチャン」

もう一度、俺は言った。

「あなたは最後に。何を願った？」
『弾きたい、と』

彼は答えた。

『ピアノを。弾かせてくれと』

「それであれば、あなたに触れたのか」

『触れたのはぼくも同じだ。彼に、触れた』

彼は自分の胸に手を当てた。

『魂をやろうと言ったんだ。最後に、どうしても。ピアノが弾きたかった。だから力を貸してくれと願った』

「言うべきではなかったな」

トリスタンが俺に近寄ってくると、片手を差し出した。地面に座り込んだままだった事に気づいて、俺はその手を取った。立ち上がる。

「知らなかったのか。妖精も人間に囚われる事がある」
『知らなかった』

彼は目を伏せた。

『ただ……ぼくは。弾きたかった。それだけで良かったんだ……』
「黒妖犬には良い迷惑だったな」

トリスタンが冷たく言った。
黒髪の青年の姿が揺らぐ。

うつうつ。

揺らいた分、黒妖犬の形も歪んだ。膨れ上がり、縮み、また膨れ上がる。

『……お、まえ、オマエ、オマエ』

唸りながら、黒妖犬が俺に視線を向ける。燃える瞳で。

『オマエ、オマエ、オマエ、ノ、魂、魂、寄コセ!』

があ! と吠えて突進してくる。トリスタンは俺を抱えると、ひよい、と避けた。

「ああつ!」

ケルピーの悲鳴が上がる。

「なにくつついてんだ、てめえ〜っ!」

「……うん。俺もちょっと、これがどういう状況なのか尋ねたい」

思い切りお姫さま抱っこをされながら、俺は言った。

「この方が安全だろう」

「いやそういう話じゃなくて」

しれっとした風に言うトリスタン。俺と言えば、がちがちに体を強張らせている。

「こつも軽々と抱き上げられると、男としての色んなものが、傷つ

いたり傷ついたり傷ついたりするんですけど」

「大丈夫だよ。傷ついた場合は私が癒してあげるから」

「だからそういう話じゃなくて！ 降ろして……あわあつ？」

黒妖犬がまた突進してきて、トリスタンは俺を抱えたまま、跳躍して逃げた。飛びましたよ、この人。人じゃないですが。Gがかかりました、今。風になるって、こういう事なんですね。フライじゃなくて、ジャンプの方ですが。それでも飛びました。結構な距離でした。二十歳の男を一人抱えたまま、軽々と。

こいつの筋肉は、ものすごくものすごくものすごいんだ。足は筋肉だらけだ。それでもって太さは女の子のウエストぐらいはあるんだ。きつとそうだ。そうでもなきや、何か色々、色々なものが負けてしまいます、俺。

「何を考えているのかね。私の足を見つめて」

「いや筋肉が……ええと」

口に出す所だった。

『魂。ソノニンゲンノ、魂、ヲ！』

「タカシ！ 俺もそっち行ったら駄目なのか！？」

ケルピーが焦った感じに叫んでいる。

「駄目！ アーサーを守ってくれ！ 後で膝枕させてやるから、離れるな！」

アーサーは顔を強張らせ、ケルピーの後ろにいる。

「このまま、私とどこかに行かないかね？」

そんな状況で、トリスタンがのんびりした風に言う。おい。

「あれ放っておいて、どこかに行けるわけないだろう。何だってあいつ、俺の魂欲しがるんだ。もう、一つ抱え込んでいるのに！」

「さてね。低俗な妖精の考える事はわからないな」

さらりと言うトリスタン。そういう奴だとわかってはいたが、殴りたくなった。

ぐるるるををををををつ！

黒妖犬が空に向かって吠えた。ぼこり、と体が歪む。ぼこり、ぼこり、と、瘤のようなものが体に現れ、引っ込み、また現れた。

ぐをををををををつ！

苦しんでいるのか。悲しんでいるのか。吠える声には悲痛な嘆きが潜んでいるようにも聞こえた。

「タマ、シイ……魂、ヲ！」

ぼこり。

[illegible]

ぼこり。

体が歪む。黒妖犬は大地に爪を引っかけるようにして、体を丸めた。内側から弾けるように、瘤が生じては引っ込む。体の輪郭が崩れて、黒い塊になりつつある。その姿にまた、あの青年の影が重なった。

「……！」

何か叫んでいる。けれど、聞こえない。

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,

不意に、黒妖犬が吠えた。歌の一節を。

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,
O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,
O w i e f e s t e h a l t i c h i h n …… !

「見苦しい」

見下すように言うと、トリスタンは俺を降ろした。その手に光が集まる。美しい弓矢が現れ、彼は矢をつがえた。黒妖犬を狙う。

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n ,
O w i e . . . !

「ごっつ、と音がして、歌の言葉の間から、真っ黒なトゲだらけの
鳶が伸びた。俺めがけて。

ひゅっ！

トリスタンが矢を放つ。鳶は一瞬で燃えて消えた。けれど。

O w i e f e s t e h a l t i c h i h n . . . !

「まだ諦めないか」

「ちよつと待つて！ トリスタン、待つてつて！」

俺は彼の腕に手をかけると、輪郭を崩しながら歌を吠えている黒
妖犬に目を向けた。何か。

何か、見える。

「ダ、ダス……ダス、エア、ミア、マイン、ヘルツェ、ラーベ！」

きらめくそれを俺が叫ぶと、黒妖犬の動きが止まった。

D a s s e r m i r m e i n H e r z e l a b e ,

黒妖犬が叫んでいた言葉の続き。
しん、と静かになった。

(ど、……どうしようこの先)

同じ言葉を繰り返しているから、続きを言えば良いかな〜と思う
ただけだったんですが。どうすれば良いのでしょうか。

ぼこり。

また体がぼこぼこし始めた。これじゃ駄目か？ 駄目なのか？

「タカシ。完全ではないよ」

トリスタンが言った。はい？

「歌には歌で返さないと」

……。

「歌えって？ 俺に？ あれを？」

ドイツ語なんですよ！？

「したくないのなら、構わないがね。この見苦しいものを、消滅させれば良いだけの話だ」

「いやだから、物騒な話しはやめようよ！ 俺、ヤなんだよ、そういうの！ 歌うから！」

「では伴奏をつけてあげよう」

はい？

トリスタンは手の中の弓矢を消した。代わりに光が集まって、豎琴になる。うーわー。

「お…… おまえ、音楽に関しては鬼じゃなかったか？ なんか昔、無茶苦茶しごかれた覚えあるぞ？」

するとトリスタンは、不穏な笑顔になった。ふふふ、と含み笑いをされる。

「言葉がわからないなどと言って手を抜いたら、その場で君を私のものにするよ？ 君をこの世界に閉じ込めて、きっちり指導をしてあげよう」

きゃー。

「し、死に物狂いで歌わせていただきます……」

俺は後ずさりしながら言った。本気だ。こいつ本気だ。

味方の方が怖いって、どいう事なんですかーっ。

俺の焦りはそっちのけで、トリスタンが豎琴を奏で始めた。豪勢なカラオケだ。演奏してるのが妖精。音楽の専門家。字幕は黒妖犬。注意して見ていないと文字がどこかに吹っ飛びますが。ケルピーとアーサーがこちらを凝視している。うわ、気恥ずかしい。あんまり見ないでくれ。

……何のかの言って、さすがだ、トリスタン。聞こえてくる黒妖

犬の中のメロディが、彼の豎琴で実在させられてゆく。この世界に、
実体を持ったものとして。

音楽。

旋律。

空間に、きらめき、刻まれる音。

俺は焦りを鎮めた。歌を。

輝くこの力を。歌わなくては……。

「Wohl mir, dass ich Jesum habe,
(イエスを得た私は幸いだ)

O wie feste halt ich ihn, (ああ、
私はどれほど固く彼を抱きしめることか)」

声は楽に出た。トリスタンの豎琴と共に、俺の声が何かの力を形
作る。

ああ。

これも魔法だ……。

「Dass er mir mein Herz labe,
彼は私の心を慰めてくれる)

Wenn ich krank und traurig bin
(病める時も、悲しみの内にある時も)」

ぐるん、と黒妖犬の首が。回ってこちらを見る。何て事だ。18
0度回転したぞ。

アーサーが目を丸くして俺を見ている。ケルピーは目を細め、こ

ちらをうかがっている感じだ。

「Jesum hab ich, der mich liebet
(私はイエスのもの、彼に愛される)
Und sich mir zu eigen gibet;
(イエスは私に自分自身をも与えてくれた)」

声が伸びる。黒妖犬の中に見えているきらめきが。次に何を言うべきかを俺に教えてくれる。意味が頭に閃く。けれど歌った端からこぼれ落ちて、忘れてゆく。

「Ach drum lass ich Jesum nicht,
(ああ、だから私はイエスを離さない)
Wenn mir gleich mein Herz
bricht.
(私の心が壊れ果ててしまおうとも、決して)」

何か引つかかった。この歌の意味。

『私に自分を与えてくれた』
『だから、離さない』
『私の心が壊れ果ててしまっても』

これって……。

すう、と黒妖犬の姿が薄れる。黒髪の青年の姿がはっきりした。

「あ、」

アーサーが驚きの声を上げている。彼にも見えているらしい。
黒髪に灰色の目のピアニストは、俺を見つめて悲しげに微笑んだ。

「離せないのは彼ではない。ぼくの方なんだ」

7・（後書き）

作中の歌は、バッハのカンタータ147、「心と口と行いと生きざまもて」のコーラル。「主よ、人の望みの喜びよ」というタイトルで知られています。訳が大変でした……。

ちなみに隆志が言っている「ウント」は、英語で言うなら「and」です。

…… エスツェットが表示されない……。ssで代用しました。

8・(前書き)

m やつと更新できました。間があいてしまい、すみません m (――)

何かが響いてくる。目の前の青年から。

俺の中の何か。彼の中の何か。

それが響き合っている。

ああ、と思った。彼は。

「これほど世代を経ながら、強く現れたものだ」

トリスタンがつぶやいた。俺が目線を彼に向けると、妖精の騎士の瞳が一瞬だけ淡く金色に染まって見えた。けれど見直すと、元通りの薄桃色だった。

「ほとんどが人になりながら、そこにある一しずくが我らに響く。

おまえ、元々、魂の半分以上が我らの側にあったな。人間であった頃から」

「元々……？」

俺はつぶやいた。トリスタンは俺に視線を流した。

「わかるだろう？」

わからない。

いや、わかる。彼は。

「ぼくは人です。人でした」

青年が言う。トリスタンは皮肉げな笑みを浮かべた。

「それに異を唱えるつもりはない。その姿は死んだ時のものか？
よくその歳まで生き延びたものだ。こつも強く我らの特徴を備えた
人間が、人の世で成人できたとは珍しい」

彼は。

俺と同じだ。

「音楽に魅せられたか？」

「そうかもしれません」

「それで妖精を魅了したか。人の子の魂の輝きで」

「ぼくにはそれは、わかりません。ただ、ピアノを。ぼくはただ、
ピアノが弾きたかった……」

トリスタンは小さく笑った。

「単純な願いほど、力を持つものだ。黒妖犬を手放せないのも、そ
れでだろう」

「なぜぼくは、彼を手放せないのでしょうか」

「私が答える問いではないな。答を知っているのはおまえ自身。他
に答えられる者はいない……いや」

トリスタンは俺を見た。

「君ならばわかるか」

「俺？」

俺はまばたいた。何を言っている？　するとトリスタンは言葉を
継いだ。

「君は彼と同じ立場にある。われらの血を継ぎ、人の心を持つ。そ

うして真実を見抜く目と、今は舌をも持つ。君の目に彼は、どう見える？」

俺の目にどう見えるかって……？

視線の先にいる青年は、一見、人に見えた。けれど不自然な揺らぎがあった。明らかに。

「二重になっている」

俺の目には、彼の内側にある炎が見えた。白と黒。絡み合う二つの炎が、いびつな球体となっている。一つはおそらく、彼の魂。白くありながら、濁った色を時に見せる。一つはおそらく、黒妖犬自身。黒く燃え上がり、純粋な輝きを見せる。

ぶつかり合っているように見える。

食い合っているように見える。

それでいて、すぐり合い、支え合っているようにも見えた。

終わりのない輪。螺旋の夢。永劫の囚われ人。そんな言葉が脳裏に浮かんた。囚われているのは、どちらなのだろう。人か。それとも妖精か。

「あなたは何を願っているのですか。願った事は、ピアノを弾く事だけだった？」

もう一度、俺は問いかけた。彼は目を閉じた。

「そのはずだった」

白い炎がきしむように歪む。

「けれど。弾けなかった」

「黒妖犬に触れられて、そのまま？」

彼は目を開けると、ゆるゆると首を振った。黒い炎がぱつと弾けて、白い炎は持ち直した。

「いいや。ぼくはもう一度弾く事ができた……ピアノを。彼はぼくに、自分自身を与えてくれた。死ぬはずだったのに、もう一度だけ、ピアノの前に座り……腕を。指を。動かす事ができたんだ」

「ではなぜ」

「わからない。覚えていないんだ。ただ、」

彼は自分自身の手を見下ろした。

「ぼくは、最後の一曲を弾き終えていない。それだけは覚えている。だから、……離せない。彼を」

「最後の一曲……」

「バッハのカンタータ147。ヘスの譜」

彼は夢見るような表情になった。

「美しい螺旋。彼の為に最後の曲を弾いた。そのはずだった。あの旋律がきらめいていた事を覚えている。ぼくの心は喜びにあふれた。彼の為に最後の曲を、奏でる事ができてうれしかった。けれど……」

「けれど？」

「気がついたらここにいた。そしてあの曲は、終わっていないんだ」

白い炎が歪む。きしんで。その色彩が墮ちる。くすんで。

黒い炎が揺れる。輝いてゆらめく。どこか必死な様子で。

黒い炎は抱きしめるかのように、白を支える。白い炎はすぎるよ

うに、黒に食い込む。いびつに輝く白と黒。どちらも歪み、どちらも苦しげで、それでいてどちらも離れる事ができない。限界だ。

わけもなくそう思った。

「どれぐらい前から、ここに？」

「さあ。ぼくはほとんど眠っていたようだ。時折ふと、何かを見るけれど夢の中の出来事のようなだった……さっき、君に呼びかけられて。ようやく意識がはつきりとしたよ」

旋律。

螺旋を描くきらめき。

「あの黒妖犬は、俺の魂がほしいと言った」

そう言うと、彼は俺を見つめた。俺は言葉を継いだ。

「なぜです」

「わからない」

「あなたの魂をもつ持っているのに」

「君にはどう見える。天に愛されし妖精の愛し子」

彼は静かに俺に尋ねた。俺は眉を上げた。

「天に愛されし……？」

「君はまるで、夜明けに一筋現れる光のようだ。一瞬の鮮烈な、それでいて夢のような。儚く、それでいて何よりも強い、人の子そのものでありながら、希有なもの」

青年は微笑んだ。

「それこそ楽の音のようだ。鮮烈にそこにあり、過ぎ去ると消えて残らない。それでいて、……永遠に近いものを人の心に残す」
「そう思ふのは、……あなたが人間であるから」

俺は言った。

「妖精は違う感想を述べる。俺は永遠ではないし、……どこにもいる、ありきたりな存在だ」
「それこそが人間だろう。永遠を内にはらむ、矛盾に満ちたもの。ありきたりでありながら、特別。特別でありながら、どこにでもあるもの」

「あなたもそれは同じだ」

「そうかもしれない。かつては」

「今もそうだ」

俺たちの問答は、穏やかなものだった。けれど言葉の裏には抜き身の刀で打ち合うような、緊張したものが漂っていた。

トリスタンは沈黙して、成り行きを俺に委ねている。アーサーは不安げに俺たちのやりとりを見つめている。ケルピーですら口を挟まない。俺は続けた。

「黒妖犬に触れられかけた時、意識を失った俺は夢を見た。そこでは光と影が問答をしていた」

「そうか」

「光は命を歌うと言った。影は死を運ぶと言った。影は光を闇に墜とすと言い、光は影に何に囚われているのかと尋ねた」

「そうか」

「『はるか彼方の血族よ。そなたはどこにいるのか。そなたをとらえる鎖はどこにある。そなたを閉ざす檻はどこに』」

すらりと舌が動く。俺の言葉に黒髪の青年は眉を上げた。

「『知れ。そなたをとらえる鎖は、そなた自らが作り上げたもの。囚われ人にしてとらえる者よ』」

「君は何者だ？」

彼の問いかけに俺は答えた。

「人間だ。ただの」

「永遠をはらむ矛盾」

ささやくように言うと、彼は腕を広げた。

「君から音楽が泉のように生まれ、あふれて来るのが見えるよ。祝福された魂の持ち主」

「人は誰であれ、そうした存在です」

「そうか。そうだね。誰も皆、忘れてしまっけれど」

微笑む。その微笑みにどこかで戦慄を覚える。何だろう。見えな
い刃があるような。

「先ほども言いましたが。あなたもそうだ。そういう存在です」

「そうだろうか」

「そうです」

「そうだろうか」

繰り返すと彼は、自分の胸に手を置いた。

「君にはわからないか。このきしみが。……歪みが」

その目が、視線が、俺を射抜く。

「ぼくは彼を歪めてしまった」

彼には微笑みがある。そのはずだった。その表情は確かに、笑みの形になっていたから。

けれどその目の奥にあるものは。

「純粋に音楽を愛してくれた存在を。歪めて。引きずり落した」

怒り。

どうしようもないほどの。

白い輝きが歪む。きしんで。

「夜明けに輝く光にも似た者よ。オマエは。オマエ、」

ぐにやり、と。その姿が歪む。

「オマエ、……の、たま、シイ、タマ、シ、イ」

ぼこり。

ぼこ。

ぼこり。

歪む。きしむ。いびつになる。目が。赤く光る。炎のように。体がかしいで、前かがみになった。その腕が獣の足に代わり、全身がくすんで黒く変化した。顔が歪んで犬の形になり、口が裂けてずらりと牙が並んだ。

「ヨコセ、ヨコセエエエ！」

叫んで黒妖犬となった彼は、俺に向かって突進してきた。
その中でもかく魂の光。

後悔と。切望と。怒りと。悲しみにくすんで歪む、人間の魂。
ぐい、と体が引つ張られた。視界が回る。腹にかかる圧力。何だ、
と思った次の瞬間、体が宙に浮いた。ぐん、と動く景色。衝撃とめ
まい。

「くつつくな〜っ！」

叫ぶケルピーの声。あー。

「平気かね」

「ちよつとくらくらするけど平気」

片腕一本で抱えられ、移動させられていた。ジェットコースター
のようだ。

「で、どうかね。もうこれを消滅させてもかまわないかね？」

言われた言葉に慌てた。

「まだ！ まだだから！」

「どうしてかね。もう良いだろう」

「良くない！ 全然解決してないだろう！」

穏やかそうに見えてこいつは、どうしてこう戦闘意欲が満々なん
だ。もがいて何とか地面に立つ。こちらに向かってぐるぐるとうな
る黒妖犬に目をやる。らんらんと燃える赤い目。その奥にある渴望
と怒り。
怒り。

なんでこいつも怒ってるのかなー、と思った。ジョン・セバスチヤンが怒っているのはわかる。最後の一曲を弾き終えていない、と言っていた。それに、黒妖犬を歪めてしまった、とも。

何となくだが、彼は自分に似ている気がした。全然違う部分もあるが。もし俺が、トリスタンやケルピーを歪めてしまったら。永遠に近いこの存在を、俺の都合で歪めて、本来の彼らとは違う存在にしてしまったら。俺はたぶん、自分で自分が許せない。

彼もおそらく、そうだろう。大切な相手である黒妖犬を、自分の存在ゆえに歪めてしまったと、自分自身に怒りを覚えている。後悔と自責と、……それでいて、喜びも覚えているだろう。それが人間だ。大切な相手を手に入れる、その行為に喜びを覚えられないわけではない。たとえそれが相手を歪める事であっても。

それで自分に嫌悪を抱く事になっても。

小さなとげ。小さな毒。それは相手が純粋な存在ゆえに消える事はなく。癒える事もないまま、人の魂を弱らせてゆく。

妖精にはたぶん、わからない。純粹すぎる彼らには、人間の持つ複雑で、相反する感情は理解できない。そうした複雑な感情を抱くがゆえに、自分自身をも傷つけ、苦しむ人間の魂の在り方は……彼らにはわからないだろう。

わからないまま、彼らも苦しむ。大切な相手が傷つく姿を見て。

「黒妖犬」

俺は呼びかけた。ぐる、とうなる黒妖犬の声。俺の言葉が理解できているのか。もうわからないほど歪みきってしまったているのか。

「なあ。おまえ。彼が好きか？」

尋ねた言葉に返されたのは唸り声。かまわず俺は続けた。

「ジョンを。ジョン・セバスチャンをおまえ、好きか？」

うるるるるるををつ。

叫んで突進してくる。トリスタンが素早く俺を引っつかんだ。ぐい、と引っ張られてたたらを踏むが、何とか踏みとどまると、黒妖犬が通り過ぎ、振り向いてうなっていた。

「消滅させた方が早いのに」

「駄目だつてば！」

トリスタンは息をついた。

「これは歪みきつてゐる。こうまで絡まりあつていたら、ちよつとやそつとでは引き剥がせないよ。せめて一緒に消滅させてやるのが、慈悲だと思ふけれどね」

「何だよ、それ」

言われた言葉に愕然として、俺はトリスタンを睨んだ。

「何なんだよ、それ！ 消滅が慈悲だと？」

「この場合はね。あまりにも見苦しい」

トリスタンはいつも通り、涼やかな表情でそう言った。

「妖精は消滅したら終わりだろう！」

「人間の魂は助かる。君には、その方がよいのではないのかね」

「それだって、ただでは済まないだろう！ 絡まりあってるって、

おまえ」

「これらにとつては存在を続ける方が苦痛だろう。こうなつては」

淡々と答えるトリスタンに、俺は掴みかかりそうになった。

「同じ妖精だろう、トリスタン！」

「同じ妖精だからこそ。この見苦しい様が許せない」

トリスタンは静かに言った。一瞬、彼の気配が鋭い刃のようになった。歌を歌い、音楽を奏で、詩を口にする彼はしかし、妖精の戦士でもあった。それを思い出させる気配だった。

美しく、優雅にして冷酷。シーリーコートはそういう存在だ。人間の感傷や、情とは違う所に彼らはいる。

人間のそれらの感情を、彼らは愛する。珍しい花を愛でるかのように。けれど。

彼ら自身はそれらを解さない。決して。

「俺が歪んで何かに囚われたら……おまえは俺を消滅させるのか」

鋭い気配に一瞬怯え、次に自分と彼らとの違いを思い知らされた気がした。後には苛立ちのような、悲しみのような、気まずい思いが残る。そうしたもやもやを抱いたまま、俺は彼から目を逸らした。それらを押し殺して尋ねる。すると、トリスタンは妙な笑みを浮かべたようだった。す、と腕を俺の体に回してくる。

「君となら歪んでも良い。一緒に消えよう」

……。

ここでそうくる？

ぎゃあっ！ とケルピーが叫んだ。俺は後ろから抱き寄せられる

ような形になり、肩の上に顔を乗せられた。耳に息がかかってくすぐったい。

「いやそついう話じゃなく」

離れる、くつつくなと叫ぶ声が聞こえる。俺もそう言いたかったのだが、先に誰かに言われると、何となく言いづらい。

「他の誰かに囚われたなら、無理やりにも引き剥がして私のものにするから、問題ないよ。その場合、君の魂が粉々になるかもしれないけれど」

「すごい問題あるから、それ。俺の魂を粉碎しないでくれる？」
「愛するがゆえだよ」

さらりと言ってからトリスタンは、遠い眼差しになった。

「ああ。でももしそうになったら……、私も歪んでしまっかな。悲しみのあまり。それでも君のかけらを手放す事などできないだろう。内に取り込んで、抱きしめ続ける。力尽きる時まで。そうしたら……タカシ。一緒に消滅できるね……」

うつとりとした風に言われた。

変態だ。

変態がここにいる。

「不健康な事を言うな。俺は粉碎されるのも、消滅するのも嫌だ。おまえと心中するなんてのも真っ平だ」

「つれないね」

「普通だから俺の反応は！」

「くつつくな陰険色魔騎士ーっ！ おまえ殺す、絶対殺すーっ！」

叫ぶケルピー。今にもこっちに駆けて来そうだ。

「来るな、ケルピー！　アーサーを見捨てたらボコる！　真剣にボコってやるからな、おまえ！」

苛立ちを込めて俺が怒鳴ると、ぴたつと止まる。

「見捨てません。見捨てないからボコらないで下さい、タカシくん」
俺の表情が怖かったらしい。そんな怖がらせるような顔してたのか？

「ぼこ……って何の意味ですか」
アーサーが尋ねてくる。この状況下で質問する？　好奇心旺盛なのは良い事だけども。

「拳で黙らせるって事だ」

そう言いつつ俺は振り返る事なく、背後の男に肘打ちと裏拳をくれました。もういい加減、鬱陶しかったのだ。ぐっ、とか、ごっ、とかいう声が出て、トリスタンが離れる。おおっ、という声がケルピーから上がった。アーサーがぼかんとして口を開ける。

ちよつと暴力的な場面を見せてしまったか。子どもにはまずかったかもしれない。

一瞬、反省しかけたが、ふふふ、と笑う声が出たのでそれは霧散した。俺の腰から下の辺りから。笑い声が。

「素敵だ、タカシ……」

する、と腕が巻きついてきたので、一步横に動いた。腕が外れ、ああ、と残念そうな声がした。

「前から思ってたんだが、微妙にマゾ風味だよな、おまえ」

「愛は全てを耐え忍び、愛は全てを征服する。君からのつれない仕打ちに私はひれ伏してしまいそうだよ」

「ひれ伏すのはおまえの勝手だが、俺を巻き込むな」

「もう遅い。私の心は君に、完全に征服されてしまっ……！」

どい。

「カッコイイ……」

「すごいです、タカシ」

ケルピーが手を胸前で組み合わせて夢見る乙女のポーズになり、アーサーが目をきらきらさせた。肘打ちを受けてうずくまっていた白い妖精の騎士は、俺に抱きつこうとした挙げ句、蹴りをまともに受けて、地を這っていた。……いや、反射だから。そんな、すごく蹴ろうとか思ってたから。おまえが勢い良くこっちに來たから、つい反射で蹴っちゃって、勢いがあつた分、きつい蹴りになっちゃっただけだから！

「君の愛は痛い……」

「ないから。そのたぐいの愛はないから」

痛そうだよな、これ痛いよな、とか思いつつ、それでもぐぐぐふ笑っている妖精が不気味で、俺はひきぎみに言った。すると、トリスタンが。

がすどつどつ。

「わ」

「すげえ」

アーサーとケルピーがそれぞれ言っ、目を丸くした。

地面から跳ね起きて俺に飛びつこうとしたトリスタンを、俺は片足一本で地面に縫い止めていた。いや、反射だから！ これも！

「ふふふふ。この私を足蹴にするなど、君ぐらいなものだよ」

「足蹴と言つか反射で。待てができないのかおまえは！」

解説すると、こういう順番だ。いち。トリスタンが跳ね起きて、俺に突進しようとした。俺はそれに気づいて、蹴りを入れた。これが最初の『がす』だ。に。前のめりになりつつ、それでもあきらめないトリスタンは、腕を伸ばしてきた。俺は咄嗟にそれを避け、かかと落としをした。これが次の『ごす』。さん。そのまま勢いで地面に激突したトリスタンを、これ以上飛びつかれては困ると俺は、足で踏みつけた。これが最後の『どつ』である。

ちよつとひどいかもしいないが、俺としては全て反射的にやってしまった事だ。悪意はない。害意もなかった。

起き上がり、抱きつこうという意志満々、まだ諦めていないトリスタンの背中をぐいぐい踏んづけ、抑えながらでは説得力がないかもしれないが。

そこでふと、黒妖犬が静かなのに気づく。視線を流すとちよつと離れた所に、牛サイズの黒い犬が突っ立っていた。ふうっ、と息を吐いてから、俺は黒妖犬を見据えた。

「ちょっとそこの黒妖犬」

なぜか黒妖犬がびくりとした。おい？

「なぜ怯える」

「あのう……その姿がちょっと怖いんじゃない……」

おずおずとアーサーが言った。

「仕方ないだろう。踏んづけておかないとこいつ、何するかわからないし」

「素晴らしいぞ、タカシ！ そのまま踏みつけていてくれ！」

嬉々と言うケルピー。仲悪いもんな、トリスタンとは。

「あの腐れ馬が。足を退けてくれないか、タカシ」

俺の足の下からトリスタンが言う。

「おまえ、こいつらを攻撃しそうだからこのまま」

「本当に、君の愛は痛い……」

「そういうわけだから、話をしよう。モーザ・ドゥーグ黒妖犬。ちょっと格好が変かもしれないけど、気にするな」

真顔で言うと、黒妖犬はじーっとこちらを見つめた。片足で妖精の騎士を踏みつけている俺と、地に這った状態で俺に踏んづけられているトリスタンを。

そして、言った。

「イイナ」

何が。

「楽シソウデ」

……。

この辺りの妖精はみんな、Mの気質があるのか！？

8・（後書き）

変だな。この回はシリアスでまとめるはずだったのに。

9・（前書き）

長いこと更新できませんでした。もう少し進めてから、とも思ったのですが、ここまで上げておきます。

現在、第一話から、WEB上で読みやすいよう、空白を入れたり、字の訂正をしたりして修正中。

妖精という存在は、星の輝きに似ている。永遠に近い時の中を、ただ輝き続ける。静かに、冷たく、変わらない姿で。

人間という存在は、一瞬の火花に似ている。熱く、激しく、指を焼いて。後には何も残らない。ただ、そこにあったと。記憶だけが残り、それもやがて消えてゆく。

交わるはずのない二つの存在。それが稀に混じり合う事がある。それを偶然と呼ぶのか。必然と呼ぶのか。

幸運と呼ぶのか。不運と呼ぶのか。

俺にはわからない。その結果が悲劇にしかならなかったとしてもわかるのは、……出会って共に時を過ごした、当人たちだけであるから。

「今、なんとおっしゃいました？」

思わず尋ねた。トリスタンの背を踏みつけながら。

モーザ・ドゥーグ

黒妖犬はじーっとこっちを見つめつつ、うなるように言った。

「踏マレルノ、楽シソウダ」

いや楽しいと言うか、これはやむを得ずの処置なんだが。

「ふふふ。君の愛をあれも感じ取っているようだ」
「ないから。そんなの」

確かにトリスタンは楽しそうだけれど。いや、そうじゃなく。

「えーと、黒妖犬。あなた、ジョン・セバスチャンに踏まれているんですか？ 日常的に」

黒妖犬は、ばかり、と目の奥の炎をゆらめかせた。

「デキナイ」

できない？

「タカシ。黒妖犬に人間が触れたら、死んでしまっただよ」

足の下からトリスタンが言った。

「え、ああ、そうか。でも、だったらどうして踏まれるのが楽しそうなんて」

俺が言うと、妖精の騎士はくくつ、と笑ってからのも、と起き上がった。おわ。

「踏むのも踏まれるのも、独立した個人でないとできない事だからねえ」

バランスを崩しかけた俺の足をひい、とつかむと、彼はそつと地面に下ろした。軽く髪をかき上げて、色気のある眼差しで俺を見て微笑む。

「それにあれは、犬だしね」

「犬……」

思わず納得した。妖精ではあるが、犬は犬だ。きっと彼は、ジョ

ン・セバスチャンと『取ってこい』をしたり、追いかけてきたりしたかったに違いない。ボールを追いかけて走る黒妖犬を想像して、思わず和みそうになった。

「君が何か考えているのはわかるけれど、それはちょっと違うからね、タカシ」

「え、違うの？」

「形を取るものは性質が似る。あれが犬の姿を選んだ時に、その性質は似たものとなっている。われわれシーリーコートが人間に似た性質を持つように。けれどわれわれは、人間とは違っているだろう？」

「そうだけど……」

「あれは走り、狩り立てるもの。追いかけて、追いつめ、牙にかけて屠^{ほろ}るもの。だから犬の形を取った。そういう種類のものだよ。そうしたものが人間の魂なんぞを後生大事に抱えるから、妙な事になる。本質に逆らっているわけだからね」

トリスタンは、ちらりとケルピーを見やると、意味ありげな笑みを浮かべた。ケルピーは嫌そうな顔をした。

「本能に逆らい続ければ、歪みが出る。元々、そうした存在ではないからね。ああ。本当に見るに耐えない」

「おまえの場合は、厭味が言いたいだけみたいに見えるけど」

それでもトリスタンの言葉が、ある意味正しい事を俺は知っていた。俺の中の真実を見抜く資質が、彼の言葉を正しいと捉えている。歪み。

ジョン・セバスチャンも歪んでいた。

「なあ、黒妖犬。おまえ、彼が好きなんだろう。このままじゃ、彼

は歪んでしまっよ」

俺がそう言つと、火のように燃える目の真っ黒な獣は、俺を睨んだ。

「オマエノ、タマシイ、ヨコセ」

「嫌だよ。一つしかないんだもの。おまえにあげたら俺の分がなくなっちゃうだろ」

「ヨコセ。ヨコセ」

「なんで俺の魂なんだ？ 二つも魂を抱えたら、おまえ、パンクしちゃうよ」

「シナイ。オマエノ。オマエノガ、アレバ」

ぐるぐる、と唸ると黒妖犬は体に力を溜めた。

「オマエノ、オマエノ、喰ッテ、喰ッテ、キレイ、キレイニ、キレイニスル。喜ブ、喜ブ、ソウシタラ！」

があつ、と吠えて飛びかかってくる。トリスタンが俺の肩をつかんで、ひょいと腕の中に抱き込んだ。そのまままたお姫さまだっこをして軽々と飛ぶ。

うん。

何度されても慣れない。と言っか、泣きたい。

「君を喰らいたいらしいね」

トリスタンがつぶやくように言った。その声音が冷やかで、俺は思わず顔を上げた。

「トリスタン？」

「分を弁^{わきま}えないにも程がある。このわたしが守護する若者を、喰ら
いたいただと？」

気配が。

「トリスタン……？」

瞳の色が金色を帯びている。白い妖精の騎士の姿が、確かに俺の
知っている彼のものであるのに、どこかが違っているように見えた。
より深く、より強く、……得体の知れない何かを秘めたものに。
違う。

こちらが本当の彼だ。

「『りんごの花咲く丘のあるじ。歌を歌い、愛を語るもの』」

俺の舌が動く。トリスタンの姿を目にしたまま。

「『そなたの名は』」

「それ以上は言っな、タカシ」

そう言う声と共に、何かが俺の口を塞いだ。柔らかい何か。

……。

え？

「あああああゝっ！」

叫ぶケルピーの声。

「タ、タカシッ！」

慌てふためくアーサーの声。

え？

え？

えええ〜と？

視界一杯に広がった、綺麗な妖精の騎士の顔。あれ？

おれ、いま、なにされた……？

「そんな目で見ないでくれ、愛しい人」

至近距離で金色に染まった瞳のトリスタンが言って微笑む。

「君をこのまま奪ってしまいそうになる」

「おま、」

えーと、つまり？

「この糞シーリーコートがあああああ〜〜〜ツツツ！！！！」

叫びと共に、どかんっ！ という音がした。続いて体にGがかかった。ぶん、と振り回される感覚がして、目が回った。

ずがっ！ どごっ！ がしいっ！

何だか危険な音がする。周囲から。土煙やら何やらが舞い上がり、つぶてのようになっぴびしびし当たる。地味に痛い。目を開けてられない。

「避けるな、陰険色魔野郎おおおっ！」

「避けなきゃ、タカシに当たるじゃないか」

ケルピーの叫びに涼しい声が答えた。うおおおっ！ という叫びが上がって、さらに、どかん、どかん物凄い音がした。

「えっ、ちょ、け、ケル、おま」

何か言おうにも、トリスタンが俺を抱えてひょいひょい移動するので、振り回される格好になって何も言えない。あたっ。舌かんだ。

「ひひゃい」

「おや。大丈夫かね、タカシ」

涙目になった俺に気づいたトリスタンが、ひょいつ、と飛んだ。ケルピーからかなり離れた所に移動して、俺を地面に下ろす。ぐらぐらしていた俺は、その場にへたり込んだ。

「うわはあ……」

そうして何とか痛みをやり過ぎ、ケルピーの方を見た俺は、意味不明な声を上げてしまった。がくりと顎が落ちる。

なだらかな緑の大地だったはずのそこは、一変していた。

穴。穴。穴。

あっちにもこっちにも、穴。

土肌を剥き出しにし、深く抉れた穴が、ぼこぼこ。

ここは戦場跡ですか、と言いたくなるような光景だった。そうしてその荒廃した大地に。黒々とした体にたてがみをなびかせる、怒れる水棲馬が仁王立ち（四本足なのでこの表現は変だが、頭を振り上げてぬうつと立っている姿は、そうとしか言えない。背後にござ

「ごごご、という効果音の書き文字が見えそうだ」している。

「何がどう……うわ、まだ来るっ!?!」

身を低くして突進してくるケルピーに、俺は慌てて立ち上がった。土煙が舞い上がって、どんどん迫ってくる。逃げられない。えーとえーと、どうしよう。

「ケルピー！ ちょっと落ち着い……だからっ、す、ステイ、ステイ、ケルピーっ！」

咄嗟に出たのが犬に『待て』をさせる掛け声。こんなのが出てくる俺って、どうなんだ。

「……」
「……」
「……」

そうしてまた、それで止まるおまえって何なの、ケルピー！

「躑しつけは大切だな」

「トリスタン、そのセリフは微妙。落ち着け、ケルピー。おまえ、俺に触れないだろう」

「だって、その陰険騎士が！ タカシの！ タカシの唇を！」

あ。やっぱりさっきの、キスだったか。

「俺だっけしたかったのにいい！」

「黙れ殴るぞ」

思わずそう言ってから、無言でトリスタンの腹を殴った。ぐえ、という声が上がって、白い妖精の騎士は前かがみになった。

「タカシ。いきなりひどいじゃないか」

「自業自得だ。おまえこそ、いきなり俺に何した」

榛^{はしはみ}の妖精はともかく。男にキスされた俺の心の傷は深い。

「そうだーっ！ おまえ、ナニしたーっ！」

「うるさいケルピー」。黙れ」

「はいすみません」

トリスタンに目をやって睨むと、妖精の騎士は体を起こしてわざとらしく髪を撫でつけ、甘い微笑みを浮かべてみせた。

「たぎる情熱を抑えがたく。君の唇は罪なまでに私を魅了した」

けっ。

「寝言は寝てから言え痴漢野郎」

俺の言葉にトリスタンが引きつった。

「痴漢……」

「痴漢だろう」

「タカシ。恋の炎は、情熱は、時に無謀な行いや、理不尽を人に強いるものだよ」

「それで貴様の仕出かした事が帳消しになるとでも思っているのか、性犯罪者」

「そう言われても。あの程度では挨拶と変わらない……」

「貴様の常識が全てのスタンダードだと思うな。俺の国ではれっきとした犯罪だ、歩く猥褻物男」

「歩くわいせつぶつ……」

言葉のイメージが強烈だったらしい。トリスタンがよろめいている。

「やーいやーいタカシに怒られた」

「だから黙れと言ってるだろう、ケルピー。大体、アーサーを放り出して何してるんだ、貴様」

あ。という顔になって、ケルピーは慌てて周囲を見回した。離れた所にいる少年に気づく。

「あゝ、悪い。すっかり忘れてた」

「忘れるな！」

脳みそ筋肉なのは知ってるが、マジで鳥頭かおまえは！

「ごめん、タカシ。タカシに悪さしたこいつを踏みつけてやるって、それしか頭になかったからさあ」

「俺の仇は俺自身が取る。邪魔をするな」

じろり、と睨み付けると、慌てた様子でケルピーはアーサーの所にすっ飛んで行った。

「えーと、タカシ？」

トリスタンが困ったような顔で俺を見る。

「なんだ、痴漢騎士」

「その呼び名って……」

「呼び名がどうした、性犯罪者。痴漢騎士じゃ不満か、歩く猥褻物男。なに勝手に手出ししてくれてるんだ、下半身無節操男」

無表情に言い募ると、さらに引きつつてくる。

「どんどんひどくなって……いや、何でもないです」

睨み付けると、トリスタンは慌てた様子で言った。

「ほう。なら、認めるんだな下半身無節操男」

「ハイ。ワタシは痴漢騎士で、下半身無節操男デス」

棒読み状態でトリスタンが言った。俺はふん、と鼻を鳴らした。

「じゃあまず一発」

「さっき殴っただろう!？」

「あれはあれ、これはこれだ。貴様に拒否する権利があると思うのか」

拳を握って口の端を上げると、なぜかトリスタンは頬を染めた。

「なぜ赤くなる」

「いや、君、……素敵すぎる」

「やっぱりマゾだろうおまえ」

「そうではないが！ そんな凶悪な顔で微笑まれたりしたらもう、私の理性が消し飛びそうだ。この場で押し倒してなめまわして共に悦楽の宴を……ぐふっっ！」

とりあえず殴っておいた。

「アーサーは良く無事だったな」

一発殴って気が済んだので、周囲を見回して俺は言った。ケルピ
ーはアーサーの側にいる。黒妖犬の姿は見えない。

「ああ、あの馬が離れたからかい？」

結構本気で殴ったと言うのに、トリスタンはけろりとしている。
鍛え方が違うのだろう。腹が立つ。

「黒妖犬が騒ぎに乗じて、アーサーを狙う可能性はあっただろ」
「そうだが。だがまあ、あの状態では、何かする気にもなれないだ
ろっ」

「あの状態？」

「あそこだよ」

トリスタンが示した先には、巨大な穴。底に見えているのは……
まさか。

「不運だったね。あの馬妖精が暴れ出した時、進路の先に彼がいた。
真っ先に吹き飛ばされてたよ」

黒い何かが伸びている。

「え、でも、起き上がってこっちに来ようとか……」

「していたな。だがそこにまた、あの馬が突進してきて蹄で蹴飛ば

した。馬妖精にはそのつもりはなかったようだが、結果として踏みつける事になっていたな。結構痛そうな音がした」

うわあ。

「それも、二度や三度じゃなかった。健気にも、何度も起き上がってね。君を襲おうとしていたんだが、そのたびに馬妖精にはじき飛ばされたり踏みつけられていた。それで今、力尽きているようだ」

不運すぎる。

俺は穴の底に横たわる、牛ほどもある黒い体を見つめた。慰めの言葉はあるだろうか。

9・（後書き）

どうしてこう、シリアスにならないんだろう。

10・(前書き)

一年ぶりです。長らく放置ですみませんでしたm――m

静かだ、と思った。
見下ろしたその時。
同時に、何かを聞いた。
音。

旋律。

ピアノの、曲……。

繰り返す旋律。

終わらない曲。

歪む。

その音が、歪む。

「なぜ、」

繰り返す旋律。響く音。

何もかもが歪む。

ピアノが。音が。旋律が。三拍子の音楽は、うめきに似た響きに
変わって繰り返す。繰り返す。

繰り返す……。

そうして、俺は見た。

黒い犬の姿をした妖精。そのかたちに重なって、
歪み、苦しむ青年の姿。

ぼこり。

ぼこ。

ぼこり。

不自然に、黒妖犬の姿が歪んだ。あちこちがねじれ、膨れ上がり、またへこむ。

ぼこり。

ぼこ。ぼこり。

ぼこっ……。

響く旋律。

歪む意味。音。

これは、何だ。

なぜこつも、歪む……。

『……』

『……、……』

歪みに合わせて、『彼』も何か言っている。背を丸め、腕を地に立て、立ち上がろうとでもするかのように、もがきながら。

黒妖犬の歪みに合わせて。

響く、狂気に歪む音楽に合わせて。

どちらも、苦しみなながらもがき。

何かを手に入れようとでもするかのように、互いの存在を重ね合わせて。

苦鳴を響かせあい、共有している。

ぼこ。
ぼこっ……。
『……、……！』

見ていると、胸が痛んだ。
なぜだろう。
なぜ、俺はこうも、悲しいのだろう。

「これも、一つの結末だ。妖精と人間との」
背後に、歩み寄ってくるトリスタンの気配。静かに言う、彼の声が聞こえた。

「終わりにしてやるのが、慈悲ではないか？」
「だめだ」

俺は首を振った。

「だめだ。何か。まだ……何か、」
「何かできると言うのか。これに」

トリスタンが、俺の横に立つ気配がした。

「選んだのは、これらだ。おまえが嘆く事ではない」
「嘆く……？」
「泣いているではないか」

そう言われて、目元を指で触れると、濡れていた。そこで初めて気がついた。自分が泣いていた事に。

「あ……？ 俺？」

ぼこり。ぼこつ。

ぼこつ……、

その時。

顔を上げた、黒妖犬の燃える目が。
俺を見た。

ごぼっ……、ごぼごぼごぼごぼっ。

「タカシ。離れろ」

トリスタンが、俺の腕をつかんだ。

「何か起きる」

引きずるようにして、俺を穴から遠ざけようとする。その瞬間。

ぎいんっ。

つんざくような音が響いた。

いいいいいいいいいいんつ。

音は大気を裂き、世界を裂き、そこにあつた全てを引き裂かんばかりの悪意を持って、広がった。穴の底から。

黒妖犬の元から。

トリスタンが、有無を言わず俺を抱き上げた。跳躍し、一気に距離を取る。半ば無理やりな形で俺は、穴から離れた位置に移動させられた。

文句を言う暇はなかった。

次の瞬間、

歪みの音楽が、膨れ上がったのだ。

『グオウルルルアアアアアアアーツ！』

黒妖犬が叫んだ。叫びは地の底から、波のように大気を揺らした力。

ただ、純粹な力が。その叫びには込められていた。そうして、歪みが大地を染める。

穴の底から。じわりと滲み出し、周辺の土地を黒く染め上げてゆく。

狂った音楽が怒濤のように、そこからあふれ出した。

「なんと醜い歪みだ」

トリスタンが言う。俺は、耳をふさいだ。

「なんだ、これ……なんなんだ、この、叫び」

音が俺を呪縛する。歪みが俺を狂わせようとする。叫びは音楽であり、呪いであり、悲鳴であり、怒りであり、全てを破壊し、無に帰そうとする力でもあった。

めまいがした。

意識がぶれて、吐きそうだった。

泣き叫んで、助けを求めたい。同時に、怒りに身を任せて、全てを壊したいという衝動にかられた。だめだ。

こんなものに、流されてはだめだ。

『ガ、ガ、ガアアアアアア！』

黒く染まった大地が、またたく間に枯れてゆく。緑も、何もかもが枯れて、どろりとした黒に変わる。

黒は、歪みに合わせて脈動する。狂気を帯びた三拍子の曲に合わせで。

「人の身に、この歪みはきつい。もう少し離れよう」

「いや、待つて。アーサー！」

俺は慌てて、周囲を見回した。アーサーはどこだ？

俺でさえ、こんな状態だ。あの子はどうなる。

「ケルピーー！ アーサーを安全な場所へ！」

水棲馬の姿を見つけると、彼は平気な様子で、黒く染まる大地を

見ていた。けれど、アーサーはそうはいかなかった。真っ青になつて膝を崩し、耳をふさいで、がくがくと震えている。

彼にも聞こえている。影響を受けているのだ。この歪んだ音楽。怒りと破壊の狂気に。

「あー？　ちつ。弱つちいな、人間は。この程度の『歌』でもう、ひっくり返ってんのかよ」

ケルピーは、アーサーの様子に気づくと、馬の姿に変わり、ひよい、と子どもをくわえ上げた。そのまま走り出す。かなり離れた場所に連れて行ってから、ぱい、と放り出すのが見えた。

「大丈夫かな」

「多少はきつかるうが、あれだけ離れば、何とかなるだろう。あの子どもには一応、わたしの守りもある」

吐き気と頭痛をこらえつつつぶやいた俺に、トリスタンが答えた。

「それより、君も。もう少し離れるよ」

「待って」

俺は、トリスタンの腕をつかんで止めた。

歪みが。

黒くにじみ、大地を染めるそれが。

ゆるりと、広がって……、その先には。

「榛はしはみの木が……！」

俺に知恵を与え、祝福をくれた榛の妖精が住む木。

生を刈り取り、汚染する黒の行く手に、逃げようもなく立ってい

る。

このままでは、あの木は飲み込まれてしまう…！

「止めないと……！」

「どうやって？」

冷静に、トリスタンが言う。

「君に、何ができると言うんだ、タカシ」

何が。

俺に、……何が。

「君にあるのはただ、真実を見抜く目だけ。わたしに守られなければ、己が命を保つ事もできない。そんな君に、ここで何ができると言うのだね」

トリスタンの言葉が、突き刺さる。

そうだ。俺に何ができる。

やったのはただ、そこにあるものを見ただけ。

それで、何かが変わったか。

何かできた事があったか。

何もない。

事態を悪くしただけじゃないか……！

「逃げて良いんだ、タカシ」

トリスタンがささやいた。

「わたしに守られている。そうすれば、何も見ずに済む。悲しみも、

苦しみも」

逃げる。

逃げてただ、守られる。

そうだ。

その方が、どれだけ楽か。

俺は、震える手で、トリスタンの胸元にすがりついた。狂った音楽が、まだ続いている。つらい。苦しい。

目が回る。吐き気がする。

頭が。割れるように痛い。

体から力が抜ける。

逃げたい。

逃げ出してしまいたい……！

「……つとに、」

「タカシ？」

「んな時に誘惑しやがってこの、……鬼畜破廉恥妖精が……」
「っ！」

「ごんっつ！」

目から火花が出た。ぐっ、とか何とか言う声が聞こえ、ゆるんだ腕を俺は振り払い、地面に転がり落ちた。

「ったっ……」

痛む頭を抱え、涙目で振り仰ぐと、トリスタンは顎を抑え、なぜか笑っていた。

「頭突きかね」

「なに笑ってるんだ」

「痛くてね」

「やっぱりMか、おまえ」

「この状況でも、なお抗う……素敵すぎるよ、君。今なら手に入る
と思ったのに……」

くつくつ、と笑いながら、顎をさすっている。畜生。頭痛い。腰
も打った。こぶになってるぞ、絶対、これ。

「俺に何もできないのは、わかってる。でも、できる事だつてある。
馬鹿みたいな事でも、意味がないように見えても。それが、俺のな
すべき事」

余裕な相手に腹が立ち、揺れてしまった自覚のある自分にも腹が
立った。あの時、逃げたいと思った。楽な方へ流れてしまいたい
俺は思ってしまった。

今やるべきは、そういう事じゃない。やらなきゃならない事が、
あるだろう！

だから叫んだ。トリスタンを睨み付けて。

「俺は、それをする。邪魔をするな！」

「やると良いよ」

トリスタンは、微笑むとそう言った。

「君の言う、君のなすべき何かを。それに何か、意味があると言う
のならね。わたしは誘惑をし続けるけどね」
「するなよ！」

「それは無理な相談だ。君は、誘惑されるべくして生まれた存在だからね」

「そりゃ、おまえの考えだろ！ 俺は普通の人間だ！」

「君のどこを見れば、『普通』の『人間』なのだろうね……」

「どこも何も、全部普通だろうが、俺は！」

呆れたような顔をされた。

その間も、歪みは大気を、大地を汚染し続けていた。ぐうつ、と全身が押さえ込まれるような圧迫感が生じたかと思うと、どぶ、と何かが穴からあふれた。

『フルルルオオオアガガアアア！』

ざしゅ、と音を立てて鋭い爪が大地に突き刺さり。

黒妖犬の前足が片方、穴の底から現れる。続いてもう一方の前足も。

すぐに頭が現れた。

黒々とした毛並みを、ぼこり、ぼこりと歪ませながら、牛ほどの大きさの犬の姿の妖精が、

燃える炎を目から噴き出しながら、這い上がってくる。

ぼこり。

ぼこ、ぼこり。

『……！』

その姿に二重になって、青年の姿が見える。顔を歪め、苦しげに

叫ぶピアノリスト。

悲しい、と思った。

黒妖犬も、ジョン・セバスチャンも。

怒りと叫びに満ちているのに。

世界を汚染し、変質させ、狂気に巻き込んでいるのに。

それでもなお、彼らは苦しげで……悲しい存在だった。

何を間違えた？

歪む。歪む彼の魂。歪む妖精の存在。

二つのものが絡み合い、逃げられない形で歪み続けている。その姿。

悲しい。ただ、悲しい。

どうして、と思う。

始まりは、こんな風ではなかったはずだ。

俺が見た、彼らの記憶。最初は、ただ。優しい心の触れ合いだったはず。

それがなぜ。

彼らは、何を間違えた。一体、何が悪かったと言っただろう。

ぼこっ、……ぼこり。ぼこっ……。

『……、……！』

『ヲ、ア、ア、ルルルウオオオアアッ』

黒妖犬が穴から、完全に姿を現した。全身をひっきりなしに歪ませ、陽炎のように力を放出しながら、穴から飛び出す。大地に爪を立てるようにして四本の足で立ち、ふるりと全身を震わせる。

破壊の衝動を秘めた炎を、目から噴き出しながら。

その目が。
ひたり、と俺に向けられる。

『ヨコセ』

歪み、へこみ、膨れ上がり、どろどろと輪郭を崩しては、また戻りながら、黒妖犬はうなった。

『オマエノ、タマシイ、ヨコセ!』

お互いを思い合う、優しさから始まったもののはずなのに。

光が走る。トリスタンが、いつのまにか構えた弓で矢を放ったのだ。輝く矢は、黒妖犬の前足二本を、正確に大地に縫い止めた。

『ゴガ、ガア、ガガガアアアッ!』

叫びがあがる。その間にトリスタンは俺の腕をつかみ、素早く後ろへ下がった。

自分が相手に気を吞まれ、立ち尽くしていたことに、その時ようやく気づいた。

黒妖犬は刺さった矢を、くわえて引き抜くと、かみ砕いた。光が散って、矢が消滅する。

ぼこり、ぼこりとその間も、体は歪み続けていた。彼に重なる青

年の、悲鳴に似た叫びと共に。

『グガアアアアア！ゴア、ガアアアア！』

しゃがれ、つぶれた喉から、大地を震わせるような叫びを上げる。その姿に合わせて、文字がぶれるように浮かび、光った。ドイツ語。

バッハのカンタータ。コラールの一節。

それと同時に、俺の脳裏に何かが閃いた。口が動く。舌が動く。言葉が、勝手にあふれ出てくる。

「それを捕らえ、同時に囚われ」

榛の妖精^{はしはみ}がくれた力。さっき、俺が口にした言葉。

「囚われたものが助けを求め、捕らえたものも助けを求めた」

『ヨコセ』

「螺旋の夢」

「時の輪。描かれる輪は、終わりなく続く」

『オマエノ、タマ、シイ』

ああ、この歪み。この澱み。

この狂った音楽は、輪を描き続けている。
繰り返し。繰り返し。

閉じることなく。終わらない歪みを、世界に撒き散らし続けている。

終わることが、できないのだ。

「それは光。それは闇」

「それは命。それは死」

『ヨコセ』

「捕らえたものは囚われ、囚われたものは捕らえ」

『ヨコセ』

「輪は歪み、歌は歪み、」

『ヨコセ』

「解放を求め、囚われ続ける事を求め」

『ヨコセ』

「生を求め、死を求め続けている」

『ヨコセ。ヨコセヨコセヨコセ、タマシイ、ヨコセエエエッッ
！』

なあ、モーザ・ドゥーゲ黒妖犬。

なぜ俺の魂なんだ……？

巡らせた視線が、遠くで青ざめているアーサーの姿をとらえた。

「同じ」

光のように、言葉が閃く。

「同じ。同じ立場だ。われらは」

「妖精の血を引き」

「妖精に愛された」

「人でありながら、妖精に近い存在」

「だから、」

チェンジリング
取り替え。

良く似た、けれど全くちがう二つのものを、取り替える。妖精が
良くやること。

生を求め、死を求め。

解放を求め、囚われ続ける事を求めた。

矛盾。

妖精に矛盾は、致命的な毒だ。

だから歪んだ。

その歪みを安定させるためには。矛盾を解決するためには。もう一人分の死が、必要だった。

「俺の魂と彼の魂を入れ換えて、勘定を合わせようとしたのか」

ジョン・セバスチャンは死んだ。しかし魂は地上に残った。

黒妖犬が自分の中に取り込んで、留めてしまったのだ。

これが妖精王クラスなら、まあある事だ。手順も、後の対応も、どうにかするし、どうにかなる。ほめられた事ではないが。

しかし今回、それをやったのは黒妖犬だった。魂の狩人ではあるが、魂を留めることなど、本来はできない存在。

無理を押しての行動は、歪みを生じさせた。

死の数と、魂の数の釣り合いが、取れなくなった。小さなものではあるが、それは世界の秩序を、確実に乱した。……これが、一つの歪み。

人間は、相反する願いを持つ存在だ。

妖精が、一つの意味、一つの契約で出来上がる力の塊であるのと違い。人間は常に矛盾を抱き、矛盾することで世に存在を続ける生き物だ。

そんな矛盾しない存在の内に、矛盾する魂が取り込まれた。

狂わない方がおかしい。……これが、二つ目の歪み。

この二つの歪みから、黒妖犬は、自分自身の存在自身をも歪めてしまった。

理から外れ、際限なく歪みを撒き散らす、『全てを無に墜とすもの』になってしまったのだ。

こうなった妖精は、世界そのものから、存在を許されなくなる。何らかの形で、消滅させられる。この場合も黒妖犬が消滅すれば、世界はバランスを取り戻し、起きた歪みも正されただろう。

しかし、彼は抗った。

自分のためではない。おそらく、自身の内に抱えた青年の魂のため。

元々、妖精の血を引いていた青年だ。生きていた時から、そのあり方は、妖精に近くもあつた。取り込まれた事で、ジョンの魂は、より妖精に近づいたのだろう。

もし黒妖犬が消滅すれば。巻き込まれてもろともに、消滅しかないほどに。

『もう良い……、もう良いんだ。友よ。お願いだ、もう、苦しまないでくれ！』

ジョンの叫びが聞こえた。青年は、歪み、叫び声を上げる黒妖犬にすがりつくようにして、その体を抱きしめていた。

『君を失いたくはない、手を取ってしまったのはぼくだ！ 頼む。もう、やめてくれ！』

『ガガガアアアアアッ！』

おそらく黒妖犬は、必死で考えたのだろう。

どうにかして、ジョン・セバスチャンの魂を守りたい。

だからもう一人、誰かの魂を刈り取らねばならなかった。死の数と、刈り取られた魂の数を、合わせねばならなかった。

ジョンの魂にきわめて近い人間。

妖精の血を引き、妖精に愛される。そんな人間を探し、死と魂の取り換えを行おうとしたのだ。

「そうまでして、彼を離したくはなかったのか、黒妖犬」
モーザ・ドゥーゲ

歪み、狂い、自身の存在そのものを危うくしながら。
彼の魂を、手放すことができなかったのか……？

びきびきと、大地にひびが走る。黒妖犬は体を膨れ上がらせた。

『オマエ、オマ、エ、オマエノ、魂、』

ぼこつ、と体の一部が崩れ、また元に戻る。

『喰ッテ、喰ッテ、……タス、助ケル、俺ノ、俺ノ、ダイジ、ダイ
ジ、宝、宝物、オ、オ、オオオオオオオ！』
『もう、やめてくれ、友よ！』

歪み、崩れる黒妖犬の体を抱きしめるようにして、ピアニストの
青年が叫ぶ。

「トリスタン、伴奏！」

叫ぶと俺は、黒妖犬の体から消えようとする文字に音を乗せた。
歌を。

彼が最後に、弾きたかった音楽を。

「Wohl mir, dass ich Jesum habe,

(なんと幸せなだろう。イエスはわたしのもの、)

o wie feste halt ich ihn, (わたしは彼を、固く抱きしめる。)

das er mir mein Herz elabe, (彼は、わたしの心を生き返らせてくれる。)

wenn ich krank und traurig bin. (わたしが病める時にも、悲しみの底にある時にも。)

Jesus hab ich, der mich liebet (わたしはイエスのもの、彼はわたしに愛を与えてくれ、)

und sich mir zu eigen gibet; (自分自身をも、わたしに与えてくれた。)

ach drum lass ich Jesus nicht, (ああ、だから、わたしはイエスを離さない。)

wenn mir gleich mein Herz nicht. (わたしの心が、壊れ果ててしまおうとも、決して)

呪縛。

この歌もまた、呪縛のひとつ。そして、

ジョン・セバスチャンが最後の一曲を、弾き終えることができなかった理由……。

『ガ、ガ、ガガガガ……ッ!』

『ああああ!』

黒妖犬の体の歪みがひどくなり、青年の幻にもひずみが生じた。苦しみにどちらも悲鳴を上げる。

大気に文字がきらめいた。響く狂った音楽。途切れないそれ。狂いも歪みも終わらない。止まらない。

広がり続ける歪みの輪。広がり続ける狂気の渦。

これではないのか？

「違う」

俺の舌が動いた。

「これじゃない……」

大気が光った。大地から、螺旋を描く光が立ちのぼった。
小さなものだったが、確かに光があった。
それが俺に、何かをささやく。

「そう、これじゃない……、トリスタン！ もう一度だ。弾いてくれ」

「もう一度？」

俺の注文に答えて豎琴で伴奏してくれていた妖精騎士が、首をかしげる。

「この歌じゃない。これじゃなかったんだ。俺が歌うべきものは……」

バッハのカンタータ147、『心と口と行いと生きざまもて』。
歌でつづられる、聖母マリアの物語。

その中のコラル、合唱曲。

『主よ、人の望みよ喜びよ』というタイトルで、良く知られている。ピアノやその他の楽器用に編曲され、様々な場所で演奏されている。

そのコラールは、カンタータ147の中で実は、二つある。同じ旋律で、歌詞だけ違うものが。

カンタータの一番最後に歌われる、それ。その曲を持って、全てが閉じられる。

「ジョン・セバスチャン。あなたのピアノはどこにある？」

大気のよどみがひどい。頭ががんと痛む。悲鳴のような狂った音楽は、いまだ響き続けていた。それに負けないよう、足をふんばって立ち、俺は声をかけた。青年の幻が、苦しみながらこちらを見るのがわかった。

「輪を閉じるんだ。あなたの最後の曲を、終わりにしよう」

『ゴ、ゴ、ガ、ガア、アアアア！』

叫んで、黒妖犬が跳躍した。俺に向かって。

どん！

身を固くした瞬間、横から飛び出してきた黒い影が、俺をかばった。体全体を使って、黒妖犬を押し返す。

「ケルピーー！」

『俺ってカツコイイ？』

馬の姿で四肢を踏ん張り、押し退けようとする黒妖犬を力で押し返しながら、ケルピーはこちらを流し見、にやりとして言った。

『ふんぐぐぐ！ この程度で俺に勝とうとは、千年早あいつ！ 力ッコイイって言うてくれよ、タカシ』

「あ、ああ、カッコいい、カッコいい。アーサーはどうしたんだ」

『そのガキに言われたんだよ、おまえを助けてくれって』

『ガ、ガアアアアア！』

黒妖犬とケルピーは、力比べのような状態になっていた。両者とも全身の力を使って押し合い、相手の隙をつこうとしている。

『俺のタカシに触ろうだなんて、許さんからなあっ！』

「いや、おまえのじゃないから」

思わず突っ込んでしまった。

「そうとも。タカシはわたしのものだ」

「おまえのでもないから」

トリスタンの言葉にも、脱力しそうになりながら突っ込んだ。何だってこう自分の所有権を、出会う妖精、出会う妖精、みんなから主張されなきゃならないんだ。

『ふんぬ~~~~っ、んぐぐぐぐぐっ！』

『ゴア、ゴアアアアア！』

とりあえず、ケルピーは聞いていないようだ。黒妖犬も。

「トリスタン、豎琴」

俺が言うと、彼は応じて弾き始めた。

カンタータの最後のコーラル。

ジョン・セバスチャンが弾き終える事ができなかった、彼の生涯での最後の曲。

この曲が、ねじれた呪縛の鍵になっていた。

教えてくれ。

大気よ。大地よ。

流れる水よ。燃え上がる炎よ。

輝く日の光よ。静かなる夜の闇よ。

世界よ。俺に教えてくれ。

ねじれにねじれた、結び目をほどこう。

真実の目よ。榛の妖精の、知恵の実よ。

俺の舌に、力を与えてくれ。

「Jesus bleibet meine Freude, (イエスはずっと、わたしの喜びのままであるでしょう。)

meines Herzens Trost und Saft,
(わたしの心をなぐさめ、うるおし、生きる力を与え続けてくれるでしょう。)

俺が歌い出すと、黒妖犬がびくりとした。重なる青年が、何かを見つけたかのような顔になった。

「Jesus wehret allem Leide, (イエスはわたしのために、すべての悲しみに立ち向かってくれる。)

er ist meines Lebens Kraft, (そのゆえにわたしは、彼から生きる力を与えられる。)

『ヤメ、ヤメ、口』

『続けて……ああ、続けてくれ!』

トリスタンの豎琴の音が響く。豎琴でピアノの三連符を表現するのは難しいのじゃないかと、今さらながらに思ったが、彼は苦ともしていない。

いきなり、狂った音楽が強くなった。トリスタンの豎琴の音を消し去ろうとも言うかのように、陰々と響きわたる。

音は、俺を痛めつけた。その響きで。その狂気で。

ああ、畜生。頭が痛い。目が回る。足に力が入らない。ふらふらだ。

でも体の奥から。熱が。

光が、溢れ出て。俺の喉を、舌を動かしている。

「meiner Augen Lust und Sonne,」
わたしの目には、彼は太陽。そのように輝かしい。

meiner Seele Schatz und Wonne;
(わたしの魂には、彼は宝。そのように喜ばしい)「

『アアア、ガアアア……ッッ、』

黒妖犬が苦しみもだえ、大地を前足で引っかく。地割れが起き、土煙が上がる。

『ヤメロ、ソレヲ、ヤメ、ロ!』
『続けてくれ! 続けてくれ、たのむ!』

幻の青年が、苦しむ黒妖犬を抱きしめる。暴れるそれに、必死でしがみつきながら叫ぶ。

大気が重くなった。俺の体に鎖のように巻きついて、動きを止めようとする。喉を締めつけようとする。狂った音楽が、さらに力を増してこの世界を染め上げようとする。

ああ、でも。

ごうごうと嵐のように響く、その音よりも。

俺の中からあふれ出る、歌。

「darum lass ich Jesum nicht、(だからわたしは、イエスを離さない)」

『イヤ、イヤダ、イヤダ、イヤ、ダアアア!』

叫んで、黒妖犬が膨れ上がった。

目から噴き出す炎は周囲全てを焦がし、咆哮は大地を揺るがした。そのまま黒妖犬はケルピーに体当たりをすると、彼をはじき飛ばした。

向かってくる。

俺に。

その爪で。その牙で。命を刈り取ろうと。

……歌を、止めようと。

ケルピーが何か叫んだ。アーサーが悲鳴を上げた。

熱気が迫る。凄まじい冷気と共に。炎を噴き出しながら全てを歪める、黒い妖精が間近に迫る。

そうして、俺に手を伸ばし……、

触れる、その前に。最後の一節が完成した。

「…… aus dem Herzen und Gesicht .
(面を彼に、心を彼に向け続けるのです)」

ぱきん。

何かが、碎ける音がした。

全てが止まった。黒妖犬も。狂った音楽も。大地を染め、大気すら支配下に置いていた歪みも。

止まり、……、そして。

光が差した。

10・(後書き)

一年前、十年以上一緒に暮らした犬が、突然の病に倒れ、亡くなりました。その後、大学に入る事となり、ばたばたとしておりました。今になって、コメディを書く余裕が、ようやくできました。……コメディだよね、この話。

このまま、完結まで持っていけます。

雲間から、一筋。光が差ししていた

はらはらと。光が散る。

これは、桜……？

いや、アーモンドの花か。舞い落ちる白い花びら。

淡い薄紅に染まる白を、ゆるやかに舞い踊らせながら。

光が。

一つの場所を、指し示している。

ピアノ。

なめらかに磨き込まれた、黒い肌。ゆるやかな曲線と、しっかりとした直線。開いた蓋の形は、今にも飛び立とうとするかのような鳥の翼を思わせる。

温かく、穏やかで、どこか懐かしい印象を与える、一台のグランドピアノ。

それが、彼方にある。

そうして黒妖犬の側には、幻のような黒髪青年が佇んでいた。ピアノを見つめながら。

その顔には憧れるような、夢見るような表情が浮かんでいる。

『……メダ』

うめくように、黒妖犬が言うのが聞こえた。

『ダメダ……見ルナ。ソレヲ、見ルナ』

振り返った青年が、ためらうような顔をした。けれど静かに、首を振った。

『最後の曲を、弾き終えないと』
『ダメダ!』

いつの間にか黒妖犬は、体を縮めていた。牛ほどの大きさがあったはずなのに、普通の犬ほどの大きさに戻っていた。毛並みは黒く、目からは炎が噴き出している。けれど。
なぜか、とても。弱々しく見えた。

『弾イタラ。オマエモ終ワル。終ワッテシマウ……!』

悲痛な叫び。

「小賢しいことを」

小さくトリスタンが言うのが聞こえた。気づくと俺は、トリスタンの腕の中にいた。どうも黒妖犬が飛びかかろうとした瞬間に、俺の腕を引っ張って、自分の方に引き寄せたらしい。

ちよつとでも掠っていたら、俺の命もなかった。だから、ありがたい。ありがたいのだが。

「トリスタン。かばってくれたことには感謝する。でも、いつまでやってるんだ」

「もう少し堪能させてくれ」
「離せ!」

ぼそぼそ言い合ってから、肘鉄をくらわせると、しびしびという

感じで離してくれた。

「で、小賢しいってなんだ」

「あの犬妖精。最後の望みをかなえると見せかけて、成就する寸前に中断させた。」

だから、あの人間の願いはかなわないまま。

体は人の世の理に従い、限界がきて滅びたが。魂はどこへも行けず、この世に留まり続ける羽目になったのさ。そうしておいて、自分の中に取り込んだ」

「契約違反じゃないのか」

「契約した相手が共にあり続けるのなら、続行中ということで誤魔化せる。条件である『願い』が成就していないのは、確かなのだからな」

小さく笑うと、白い妖精騎士は言った。

「決して望みを果たさせず、契約が終わらないよう画策し、魂を取り込んだ。」

実に小賢しい。

猟犬程度の位階の妖精が、そのようなことを考えると」

「妖精王なら良いのか」

白い妖精の騎士は、含みをもたせた流し目をこちらにけると答えた。

「王なら、相手が自ら、そう望むよう仕向けるさ。それでも逃げられることはあるがね」

「そいつらにとって、誘惑はお手の物だからな。気をつけるよ、タカシ。自分の意志を曲げられた挙げ句、都合の良いよう操られるぞ」

青年の姿に戻ったケルピーが、苛立たしげに言った。トリスタンはこの言葉に、唇の端を歪めた。

「言葉を交わすよりも先に、相手の腸を食い散らかすおまえに言われたくはないね、アンシーリーコート」

「意志を曲げた挙げ句魂刈り取るおまえらより、俺の方がよっぽど真っ直ぐだ、糞シーリーコート」

「どっちも問題だから。どっちも困るから」

魂刈り取られるのも、ばりばり喰われるのも、当事者にとっては大問題だ。どっちが真っ直ぐだとか、そういう問題じゃない。

「なぜだ、タカシ。わたしの方が優しいだろう？」

「俺の方が、おまえをちゃんと見てやれるぞ。根性ねじくれてないからな？」

「俺にとっちゃ、どっちもどっちだよ。て言うか、今そういう事、話している時じゃないだろう」

黒妖犬とジョン・セバスチャンの間の緊迫感がわからないんですか、二人とも。

『友よ。ぼくは、弾かなければ』

黒髪のピアニストの姿が、陽炎のように頼りなく揺れて薄れ、またすっかりとしたものに戻る。それでもどこか、現実味のない幻のような姿だ。

『最後の曲が、終わっていない』

『行クナ』

『弾かなければ。それが約束だ』

『行クナ。行クナ。行クナアア！』

叫ぶと、黒妖犬は幻の青年に向かって飛びかかろうとした。

けれど触れる寸前に、何かに阻まれたかのように、弾かれた光が。

雲間から差した光が。青年を包んでいる。黒妖犬との間を阻むように。

それが壁となり、彼らを隔てた。

うをるるるるるああああつ！

吠えると、黒妖犬は光に向かって体当たりをした。何度も。何度も。

アンシーリーコートである彼には、清浄な光は毒だ。そのはずだった。

漆黒の毛並みは、光に焼かれて煙を上げた。

爪も、牙も、体当たりを繰り返すたびに、ぼろぼろになっていった。

それでも彼は、やめようとしなかった。

爪をたて、牙をむき、声を上げ、体当たりを続けた……何とかして青年に触れようと。

『やめろ。君が損なわれてしまう！』

見かねた青年が叫ぶ。しかし黒妖犬はやめない。

『やめるんだ、友よ!』

『嫌ダ。オマエハ、オマエ、ハ!』

傷つき、ぼろぼろになった黒妖犬が叫んだ。

『オマエ、俺ノ、キレイ、キレイ、ダイジナモノ。ズット、ズット、一緒。一緒ニイル。一緒ニイル!』

吠えた声は歪んで割れて荒々しく、お世辞にも美しいとは言えなかった。

それでも彼の叫びには。輝く何かがどこかにあった。

『もうやめる』

『一緒二、』

『やめろ、体が燃えている!』

『一緒、二、イル』

二人を隔てる光の、ぎりぎりのところまで来て、ピアニストの青年は身を屈めた。

今やぼろくずのようになってしまった、彼の友の側に。

『友よ。ぼくたちは長らく、共にいた』

『オマエ、』

『君に支えられ、世界を弾いた。ぼくたちは、共にそれを成した』

『オマエ、オマエ、』

『ぼくはピアノで世界を語り、形作った。それは。君の支えがあったからこそ……君がいなければ。全ては始まらなかった。君がいたから。ぼくは、弾き続けることができたんだ』

『一緒、……一緒、二』

『一緒にいたい』

青年は、肩を落とした。

『君と一緒にいたい。けれど、それでも、音楽がぼくを呼んでいる。呼んでいるんだ』

『イヤダ!』

黒妖犬は叫んだ。

『俺ヲ、置イテ行クナ……!』

悲痛な叫びだった。

置いていかないで。

それはあらゆる妖精たちが、愛した人間の死を前にして、叫んだであろう言葉。

人の魂は、天に行く。

妖精は、地上に残される。

ばあちゃんが。

じいちゃんに向かって叫んだ言葉。

俺が。

俺もまた。

じいちゃんに向かって叫び。

そうしていつかは。トリスタンから。ケルピーから。知り合った妖精たち全てから。叫ばれるであろう、言葉……。

『これも、一つの結末だ。』

トリスタンの言葉を思い出す。

『せめて一緒に消滅させてやるのが、慈悲だと思うけれどね』

ああ、これも。確かに、一つの結末だ。妖精の観点からするなら、共に滅ぼしてやるのも、確かに慈悲だろう。

人間の魂に焦がれた妖精と、その妖精に心惹かれた人間。

互いの思いによって結びつき、絡まりあった二つのもの。引き離せば、

二度ともう、出会えない。

それが……お互いにも、良くわかっている。それでも。

「ジョン・セバスチャン」

俺は小さく息をつくとき、背筋を伸ばした。意識して、腹の底から声を出す。

「人と妖精の血を受け継ぎ、境界に立ち続けた者。同じ立場の者として、告げよう」

一歩、前に進み出ると、ピアニストの青年と黒妖犬、双方が俺を見た。

黒妖犬。俺を恨め。

おまえの叫びを知っている。

おまえの嘆きも知っている。

それでも俺は。この言葉を口にする。

「契約は、成就されねばならない」

が、ががあああつ！

吠え声を上げた黒妖犬が、俺を威嚇する。ケルピーがす、と俺の側に立ち、トリスタンもまた、俺の横に立った。

『君の心には、涙がある』

幻の青年が俺を見て、言った。

「知っているから」

『そうか』

「俺も、いずれは選択せねばならない」

『そうだな。迷いはないのか』

「迷っているよ。いつだって。人間だから」

俺の声音にこめられた、何かに気づいたのか。幻の青年は、小さく笑った。

『そうか』

「それでも、ジョン・セバスチャン。あなたは」

俺は、ぼろぼろの体で地に伏せて、なおも青年を守ろうと威嚇を続ける黒妖犬を見た。

その側で、触れたくとも触れられない、彼を案じながら光に包まれている青年を見た。

しんと静まって、彼方にあるピアノを見た。

横に立っていてくれる、アンシーリーコートとシーリーコート、二人の妖精の青年の気配を感じながら。

「あなたは、弾いて。終わっていない曲を、終わりにしなければ。そうして、彼を解放しなければならぬ」

その瞬間。全ての音が消えた。

俺の言葉は、静まり返った世界に響いた。

何かが。

何かが、……小さく。

ぱきり、という音をたてて壊れ、

解放され。

自由にされた。

「ああ。そうだ」

ピアニストの青年の姿が、鮮明になった。幻ではなく、肉を持つて世界に存在するものとなる。

「ぼくは、弾かなければ」

『行クナ！』

黒妖犬が叫んだ。けれど。

ピアノが。

彼方にあつたはずのピアノが。

立ち上がった青年の、すぐ側にあつた。

振り向いた、彼の。目の前に。

『行クナ。行クナ……』

音もなく、ピアノの蓋が開く。

立ち上がった青年が、その前にある椅子に腰かける。

それは、まるで。

『俺ヲ。置イテ、行力ナイデ……ッ!』

一つの、完成された魔法のような光景。

その中心にいる鍵となるべき青年が、ふと、こちらを見る。黒妖犬に向かって微笑んだ。

「友よ。君のためにこの最後の曲を贈る。ぼくは、君を解放しよう」

絶望にも似た叫びを黒妖犬が上げ。

そして、

最初の音が響いた。

なんと表現すれば良いのだろう。それを。その現象を。

雲間から差す光のように。

舞い落ちるアーモンドの花びらのように。

水面に広がる輪のように。

透明で、優しい音が連なって、

彼の指先から生まれ出る。

三連符。

祈りの音。

その音で彼は、世界を作る。世界に作られながら。

その音で彼は、全てを生み出す。全てから生み出されながら。

全てが動きを止めて、その音に聞き入る。

全てが頭を垂れて、その音楽に聞き入る。

彼は音楽を生み出す者であり、

音楽そのものであり、

祈る者であり、

祈りそのものでもあった。

静謐で、透明な音は続く。

豊かに、豊かに。全てを愛し、全てに愛され。祝福し、祝福されながら。

これが、人。（これが、妖精）。

これが、境界にあるもの。（これが、どちらの世界にも立つもの）。

人でありながら、妖精と心を同じくし、

妖精に近しくありながら、人の世で育てられ、花開いた。

人と妖精の狭間に立って、そのどちらをも拒絶することなく、

愛し、愛され、育み、育まれた、

一つの存在の、生きた証。

願いにして、祈り。

苦しげに、黒妖犬が身じろぐ。

光は彼の体を焼き、音楽は彼を打ちのめしていた。それでも、彼は顔を上げていた。

彼の愛した青年の姿を、その目に焼き付けようとしてもするかのよう。

遠く離れた所では、アーサーがこの全てを見ていた。

少年には、何が何だかわからなかった。

黒妖犬は恐怖そのもの。それに囚われていた青年は、解放されるべき存在。そのように見えていた。だが。

なぜだろう、と少年は思った。

黒妖犬の姿が、泣いているように見えるのは。

音が広がる。

世界が広がる。

祈りが広がる。

広がった音は、世界は、祈りは、

やがて、収束に向かう。

終わりに向かって。

始まったもので、終わらないものはない。

奇跡のようなこのひとときも、終わろうとしていた。

青年の手が動く。ピアノの鍵盤を指が叩く。その動きが。

最後の和音を弾いて……、

止まった。

静かだった。

ひらり、ひらりと花びらが舞う。

光に染まる、薄紅色のアーモンドの花。

翼を広げた鳥のように存在する、黒いピアノ。

その前に座る青年。

「長かった」

鍵盤から手を下ろし。

彼は目を閉じると、ささやくように言った。

「いや、短かったのか。君との日々は」

振り向いて、そこにいる黒妖犬に目をやる。穏やかな微笑みを浮かべて。

「君がいてくれたから、ピアノをあきらめずにすんだ。

君がいてくれたから、弾き続けることができた。

そうして……君がいてくれたから。ぼくは、この曲を弾き終えることができた」

『イヤダ』

ぼろぼろになった黒妖犬が、大地に横たわりながら言う。

「ピアノを弾くことは、ぼくにとって、世界に触れることだった。この指で世界を作り出し、その中で生きることでもあった」

青年は、自分の指を見つめた。

「その中で生きて、……そうしてこの世にまた戻る。ピアノを弾くとはぼくにとつて、そういうことだった。美しい世界に浸り、ひとときそこで過ごし……戻ってくる」

青年は、息をついた。

「いつしか、戻らないでいられたらと願うようになった。この美しい世界の中に、ずっと。浸ったままでいることができたなら、と」
『イヤダ。イヤダ』

黒妖犬は、うずくまり、ただそう言い続けている。

「願うことは自由だが、……それをかなえようとしては、ならなかった。人間なら」

青年は、俺を見た。人と妖精の境目にいる存在である、俺という人間を。

「人間なら。そうだろう、その君？」

小さな足音が聞こえた。そちらを見ると、しびれを切らしたのだろうか。アーサーが駆けてくるところだった。ケルピーが、「ああ、忘れてた」とか何とか言つて、俺の様子をちらりとうかがってから、子どもの方に駆け寄り、片手でひょいと抱え上げると、こちらに戻ってきた。

「どんな物語りにも、終わりはある」

視線を彼に戻して、俺は答えた。青年は微笑んだ。

「そうだね。どんな音楽にも、終わりがあるように」

「エンドマークのない物語りは、……物語りではない。それは、ただの。言葉の羅列になってしまう」

「最後の一音の響きが消える、その瞬間に。音楽は、演奏する者の手を離れて完成する。それがなければただの、まとまりのない、騒がしい音になってしまう」

「終わりがあるからこそ、それは生きる」

「終わること。より美しく存在する命を得る」

ジョン・セバスチャンは、俺を見て微笑んだ。

「ぼくが願うべきは、ぼくの作り出した音楽を、完成させることだった。

それなのに、それを忘れ。ぼくは、ただ、美しい世界に浸り続けたいと思ってしまった……終わりの部分^{コード}に向かわずに、何度も何度も、繰り返しをしてしまったんだ。まるで、輪舞曲^{ロンド}のように。繰り返し、繰り返し……」

ため息をつくと、青年は黒妖犬を見つめた。

「ねえ、君。君はそんなぼくの願いまで、かなえようとしてくれたんだね」

『アアアアア！』

黒妖犬が叫んだ。どこか絶望に満ちた声だった。

「ピアニストであるぼくは、自分の音楽を終わらせなければならな

かったのに」

『オマエ、悪クナイ！ ゼンプ！ ゼンプ、俺ガヤッタ！』

「君が悪いわけでもない。人と、妖精とは違う。それに目をつぶって、自分に都合の良い夢を見ようとした。

それが、ぼくの罪。そのために、君を長く苦しめてしまった。でも」

ピアニストの青年が、立ち上がる。

愛おしげにピアノを見つめ、そして。

かたり、と。

ピアノの蓋をしめた。

「ぼくの音楽は、完成した」

その言葉と共に。彼の姿が存在感をなくす。幻のように、頼りないものとなる。

『イヤダ！ イヤ……俺ヲ、置イテ行クナ！』

悲鳴のように、黒妖犬が叫ぶ。立ち上がり、ぼろぼろの体で、光に向かう。けれど弾かれ、ぎゃん、という悲鳴を上げて倒れた。

「大好きだよ、ぼくの友だち」

『イヤダ……！』

「ずっと、一緒にいてくれてありがとう」

『イヤ、イヤダ』

「ごめんね。長い間、しばりつけてしまった」

『イヤダ……一緒に、一緒にニイル。一緒にニ！』

黒妖犬は、体のあちこちが焼け焦げていた。意識を保っているの

ももう、限界ではないかと思われた。それなのに、立ち上がる。ふらふらと立ち上がって、光に向かおうとする。

「もう良い。もう良いんだ」

ジョン・セバスチャンは大地に膝をついた。光が一線を描いている境界線のすぐ側に。黒妖犬は近づこうとして、倒れた。

もがきながら、それでも立とうとする。青年は、首を振った。もう立つなと言いたげに。

体が透けて、向こうの景色が見える。そんな儚い存在になってしまった青年は、それでも、しっかりと声を響かせていた。

「良いんだ。もう。これ以上、君を苦しめたくはない。頼むから」

『苦シク、ナイ。オマエ。オマエト。一緒ナラ』

「君をそうしてしまったのは、ぼくだ」

『苦シク、ナイ!』

ぐるぐるとなる黒妖犬に、青年は微笑んだ。

「ねえ、君。覚えておいて。

君が、いてくれたから。ぼくの音楽は生まれた。

君が、いてくれたから。ぼくの音楽は育った。

そうして、ここに。終わること completion した……ぼくは。これを生み出したことを、誇りに思う」

ふ、と。

風が吹いた。

アーモンドの花が散る。光に染まって。

ピアノが揺らぐ。黒く、翼を広げた鳥のような形のグランドピアノ

ノの輪郭が。水面に映る影のように揺れて。
彼の姿が。

「友よ。これだけは真実だ。君はぼくの宝。心の奥を照らす光だった」

『行……行くナ。行くナ……』

揺れて。

『行く、ナアアアア！』

ざざざざああああつ

吹き過ぎる、風。
花が散る。

大好きだよ、ぼくの友たち。

声は、風にまぎれて消えた。そして、光が。
静かに光が、その場を照らす。

誰もいなくなった、その場所を。

何もない。

そこには、何もなくなっていた。黒いピアノも、アーモンドの花も。

夢のように消えて、ただ。

やわらかな風と、穏やかな光が。そこにあった。

彼の姿もない。

先ほどまで、確かにいたはずの彼は。もう、いない。

去ってしまった。

人間が行くべき所。妖精には行けない所。

はるか彼方へと。

黒妖犬が、ゆるりと頭をもたげる。信じられぬと言いたげに。

震えて。立ち上がり。

ずりずりと、体を引きずるようにして、それまで彼を阻んでいた

境界線のあった場所を踏み越え。

ピアニストの青年がいたはずの所へ、身を運び。

どう、と倒れるように身を伏せると。顔を地面に押しつけた。

そのまま、しばらく動かない。

やがて彼は、そのままの姿勢で、うめき。

叫んだ。

グウォルルオオオオガアアアアアアアアアアアアアアア

その叫びは。

絶望を音にすれば、こうだろうと言っような、苦鳴。

喪失の痛みと、かつてあったものへの渴望と、それが決して戻らないことを悟った悲鳴の叫び。

それは長く、長く尾を引いて、続いた。

アアアアアガアアアア……アアアアアアアア

知っている。

俺は、この叫びを知っている。

じいちゃんの死んだ時。ばあちゃんが、こんな叫びを上げた。

自分の悲鳴で、自分の体を引き裂きたいとも言ったような。

叫ぶことでなお、自分自身を苦しめているような声だった。

ガアアアアアアアアグウオアアアアアア

袖が引かれた。

そちらを見やると、いつの間にか側に来ていたアーサーが、震えながら俺の腕をつかんでいた。

「タカシ……この、妖精、」

「ああ」

俺は身を屈め、一度アーサーを抱きしめた。それから、ケルピーの方に押しやる。

「向こうに行ってる。聞いていると辛いだろう。ケルピー、頼む」
「おう」

ケルピーがアーサーを抱き上げようとする。しかし、アーサーは抗った。

「待つて。タカシはどうするの?」

「俺は……、ここにいます。見届ける責任があるからね」

彼をこうしたのは、俺だ。

最後まで、付き合う責任ぐらいはあるだろう。

そう思って身を起こした俺は、息を飲んだ。トリスタンが弓を構え、矢をつがえていたからだ。

黒妖犬を狙って。

「やめろ、トリスタン!」

「なぜだね」

叫ぶと矢をつがえたまま、妖精騎士は問うてきた。視線を黒妖犬から外さないまま、静かな面持ちで。

「こいつは、もう……何もできない」

「そうとも。だからこそ、消滅させてやるのが、慈悲だ」

「トリスタン!」

「陰険騎士の言う通りだ」

ケルピーが、アーサーを抱き上げながら言った。

「俺にもわかる。消滅させてやれ」

「ケルピー!」

「間違っただけは言っていないぞ、俺は」

声を荒らげた俺に、水棲馬の化身の青年は、黒々とした瞳を向けた。

「そいつは得て、失った。最初から持っていなかったならともかく、得てから失った。その分、絶望も深い。」

それに、……黒妖犬の姿こそしているが。そいつはもう、黒妖犬ってわけじゃなくなってる」

俺は彼の言葉に目を見開いた。

「黒妖犬じゃない……？」

「人間の魂なんぞ、抱え込んで。無事でいられるはずがないんだ」

ケルピーは肩をすくめた。

「人の魂はある意味で、俺たちには毒なんだよ、タカシ。変化をしないはずの俺たちを、たやすく変え、染めてしまう。」

そこにいる惨めなやつは、黒妖犬であるはずの自分の中に、人の魂を抱え込んだ。それに染まり、変化を起こした。そうしてなくした。抱え込んでた、核になってたほどのものをな。

だからと言って、元に戻るわけでもないんだ。

歪みは歪みのままだ。どうにもならん。まだかろうじて、妖精ではあるけどな」

「妖精でないなら、何になるんだ」

「さあな。俺は知らん」

「影になるのさ」

そこで、トリスタンが静かに言った。

「喪失の痛みを嘆く影。ただ、それだけ」

「影……？」

俺が妖精騎士の方に目を向けると、彼は矢をつがえ、黒妖犬に視線を定めたまま、独白のように続けた。

「タカシ。われらは、死ぬことがない。消滅するまで存在し続けるのだ。人間のように、記憶が薄れることもない。

これはこの後、この絶望を抱いたまま、この苦鳴を上げ続けるまま、存在のなくなる時まで生き続ける事になる。

自分自身を失い、ただ嘆くために存在する影として。

それはもう、妖精とは呼べないだろう。さすがにわたしにも、気の毒に思えるよ」

俺はたじろいだ。トリスタンの言葉には、重みがあつた。彼は知っているのだ。この先、黒妖犬がどうなるのか……どんな運命をたどるのか。

それは、彼自身がたどるはずだった運命でもあるから。

俺は、トリスタンがかつて、何と呼ばれていた存在なのか知らない。

彼がなぜ、名を失い、記憶を失ったのかも。

俺と出会った時。彼は消えかけていた。名も、力も、記憶もなくし、自分自身の存在すら失いかけていた。理由は知らない。けれど、消滅しかけていたのは確かだ。

そんな経験をした彼だからこそ、わかるのだろう。己の存在をも変えるほど執着し、寄り添っていた魂を失った黒妖犬が……この先、どうなるのか。

だからこそ、存在を終わらせようとしている。けれど。

「弓を下ろしてくれ、トリスタン」

俺は姿勢を正した。断固とした意思を持ってそう言つと、妖精騎士は、黒妖犬に向けていた視線を外し、俺を見た。

「なぜだね」

「お前の言っていることは、わかる。ケルピーの言い分も。どうしてお前たちがそう言うのかも。でも、」

俺は首を振った。

「嫌なんだ。だからと言って、目の前で一つの存在を消滅させられるのは……嫌だ。頼む。やめてくれ」

トリスタンは、俺を見つめた。

その目に、愛しげな色と、悲しみの色が浮かんた。苦痛めいたものも。

それから彼は目を伏せて、それらの色を隠し。小さく息をつくとき、弓を下ろした。

「人である君は、時にわたしたちよりも残酷だな」

声音は静かで、いつも通りだった。けれど、彼の中に何か、葛藤のようなものがあつた事が、俺にはわかつた。

「そうかもな」

それに気付かないふりをして。俺は彼の言葉に、ただ同意した。

「でも、彼……ジョン・セバスチャンは。俺とある意味同じだった。その彼が愛した、彼の残した最後のものだ。消したくはない」

「あの青年は、自分の音楽を世界に還して旅立った」

トリスタンが言った。

「世界から受け取ったものを、自分の内で昇華させ、再び世界へと還す。音楽とは、そういうものだ。

しがみつき、自分のものにし続けるなら、それは醜い歪みとなる。だが彼は、それを還した。それにより、音楽を完全なものとした。だから、彼の音楽はもう、どこにもない。全てが世界に還元されたのだから。

もし何かがあるとするのなら、……残り滓だよ、タカシ」

「俺は、そうは思わない」

俺は首を振った。

「こいつもまた……彼の音楽の一部だ」

ふと、叫びが止まった。

突然訪れた静寂に、誰もが黒妖犬の方を見た。大地にうずくまる、ぼろぼろになった犬は弱々しく、荒々しく暴れ、牙をむいた姿が嘘だったかのように見えた。

よろめきながら、ゆるゆると、黒妖犬が立ち上がる。

そうして、低くうなるような声で言った。

『オレ、ガ。アレ、ノ一部、ダト……？』

俺たちの会話が聞こえていたのだろう。黒妖犬はふらつきながら、四肢を大地に踏ん張り、のろのろと身を起こした。

『オレ、ガ。アレ、ノ……』

低く、うなるように言う。

『一部。一部。ナラバ、ナゼ』

ぐうおる、と喉の奥でうなり声を響かせる。

『ナゼ、オレハ、置イテ行カレル。一緒ニ、行クコトガデキナイ』

輪郭が、崩れかけていた。かろうじて犬の姿はしているが。

ぼろぼろになった毛並みの先が、細かな砂のようになり、霧のようになくなってゆくのが、離れていてもわかった。

存在が、薄れている。

「それでもおまえは、彼の一部だ。かつて。今も」

それが正解なのかわからなかったが、俺は言った。

『オレハ、残サレタ』

「それでもだ。おまえは、彼がこの世に存在したという証」

ガ、ガ、といううなり声が響いた。

ガ、ゲゲ、ガ、とそれは、時折途絶えながら、断続的に続いた。

それが、笑い声であると気づくまでに、少しかかった。

『ソレ、ニ。ソレニ。何ノ。何ノ意味ガ』

黒妖犬はまるで、うめくように、体の底から振り絞るかのように、笑い。叫んだ。

『オレハ、捨テラレタ。オレハ、置イテ行カレタ。

失ツタ。失ツタ。イナイ。モウイナイ。イナイノニ。

ナノニ。一部ダト。オレガアレノ、一部ダト。

ソレニ、

何ノ意味ガ、アル！』

があ、と吠えて。

ところどころ、存在を薄くして。輪郭を崩し、それでも黒々とした姿で。目から、炎を噴き出しながら。

黒妖犬は、俺に向かって飛びかかってきた。牙を剥いて。

ひゅっ、

風を切る音がした。続いて、どすっ、という音も。

「あ、」

もんどりうつて、黒妖犬が倒れる。
腹に、矢を生やして。

「トリスタン！」

振り向いた先に。弓を構えた妖精騎士。つがえた矢を放したばかりの。

「なぜ、」

「これは君を狙った」

「本気じゃなかった。殺気なんてなかったじゃないか！」

俺は叫んだ。そう。黒妖犬に殺気はなかった。

彼に、俺を殺すつもりなんてなかった。

「それでも、君に触れようとした」

弓を下ろすと妖精騎士は、冷たい表情で倒れた黒妖犬を見やった。崩れる。

存在が薄れ、ちぎれ、輪郭がゆらぎ。さらさらと。

端からさらさらと、輪郭が崩れてゆく。

「猟犬風情が、わたしの守護する者に手をかけようとは。許せるものか」

「そんな話じゃないだろう！」

「そんな話だ。わたしにとっては」

トリスタンは俺に視線を戻した。

「タカシ。これは、確かに良くやった。ただか猟犬の位階にしかない身でありながら画策し、人間の魂を虜にし、逃げ出さぬよう、惑いとまやかしの封を幾重にも施した。

すべて、君に看破され、壊されて解除されてしまったがね。

それでも良くやった。見事と言って良い。そのことに対して、称賛するのはやぶさかではないよ。

だが、君に手を出すとなれば別だ」

「殺気はなかった。俺をどうこうするつもりなんて、」

そこで、気づいた。

「射られるとわかっていて、……わざと飛びかかったんだ」

彼方へ去ったものへの悲嘆と絶望の中で。

黒妖犬はトリスタンの目の前で、俺に危害を加えるふりをした。ぼろぼろになった今の状態で、シーリーコートである妖精騎士の矢を身に受ければ、ただでは済まない。それがわかっていて。わざと。

滅びを選ぶために。

黒妖犬は、何も言わない。ゆるやかに崩れ続ける体の中で、目にはまだ炎がともっていた。それも、次第に力をなくしてゆく。

「黒妖犬。ジョン・セバスチャンは、おまえに生きていて欲しかったんだ。だからおまえを解放した」

そう言つと、小さく、薄くなりながら、黒妖犬は笑った。

『望マナイ』

どこか満足そうだった。

一緒にいたい、と叫んだ妖精。

人の子の魂を欲しがって、自分自身が歪んでも、一緒にいたいとただ、叫んだ。

そうしてそれを失えば、ただ滅びを望む。

それに対して生きると言う人間は……、残酷なのか。俺の言葉は行動は。

黒妖犬を解放したジョン・セバスチャンの行動は。

それでも。

それでも、こんなのは。俺は、嫌だ。

「俺は境界に立つ者で、おまえたちのことは多少は知っている。ちよつとならわかる部分もある。でも基本は人間なんだよ」

そう言つと、俺は消滅しかかっている黒妖犬に向かい、一歩踏み出した。

「タカシ」

「邪魔をするな、トリスタン」

声をかけてきた妖精騎士にそう言つと、彼は黙つた。俺は黒妖犬の側まで歩くと、力なく倒れている彼を見下ろした。

「知っているか、黒妖犬。音楽家はロマンチストではあるが、ある部分ではとてもわがままなんだ。ジョンもわがままな奴だった。そうじゃないか？」

ピアノも弾きたい。おまえとも一緒にいたい。両方欲しがつておまえを振り回した挙げ句、曲を完成させたいとほざいてさつさと弾き終わり、一人で行ってしまった」

黒妖犬が俺を見上げる。俺は小さく笑つた。

「そうしてな。俺は音楽家じゃないが。やっぱりわがままなんだよ。目の前で、自分の関わった存在が消滅するのを見るのが嫌だ。ただ、

嫌なんだよ」

『ヤメロ』

何かを感じたのか、黒妖犬がうめいた。俺は微笑んだ。

「やめない。悪いがあきめらせてくれ」

『ヤメロ』

「たぶん、俺は残酷なんだろう」

そう言つと、俺は黒妖犬を、『視た』。自分自身の持つ、『真実の目』の力を使って。

『真実の目』。

それがどんな能力なのか、はっきりとは知らない。俺にとってはただ、物事の姿が当り前に見えるという、それだけの力にすぎないからだ。

けれど、この妖精郷で。

妖精を前にして使うのであれば。それは、明確な意志の力として発現する。

それも、『真実の舌』の力の後押しがあるとすれば、どれほどの力となるか。

「『黒妖犬。かつてそれであったもの』」

自分自身の奥からやってくる力に、道をつけてやる。どの方向に向かうのかを指示してやれば、力はたやすく俺を通って発現する。

「『死と不運を運ぶ、アンシーリーコート。触れた者は即座に命を落とす』」

大気に響くのは俺の声。漂うそれが、何かを固定する。黒妖犬を。黒妖犬である存在を。

「『おまえは内に、人の魂を抱いた』」

薄れかけていた黒妖犬の姿が、鮮明になる。彼は目をぎらつかせると、『ヤメロ』と言った。

「『そのゆえに歪み、黒妖犬という己を失った』」

『ヤメロ』

「『ゆえにおまえはもはや、黒妖犬ではなく』」

『ヤメロ。オレヲ、』

「『新たな存在となる』」

『オレヲ、存在サセルナ!』

滅ぼせと。

自分を滅ぼせと黒妖犬が叫ぶ。

輪郭がしつかりとなり、黒々と存在が強くなる。目の中に燃える

赤い炎。

きしむ。

大気が。大地が。

重く陰る。

『オレ、ハ、オレハ』

「『新たなもの』」

『チガウ、オレハ、』

「『おまえは……』」

ガ、ガアアアアッ!

黒妖犬が吠えた。ゆらゆらと揺れる大気。黒々と歪む気配。けれどその中に。ひとすじの流れが『見える』。彼の歪み。

アンシーリーコートであるはずの彼の中の。存在するはずのない、歪みの種。

『オレハ死ヲ、運ブモノ。輝キヲ、闇ニ墜トスモノ』

ゆるり、と首をもたげて黒妖犬が言う。

『滅ボシ、滅ビル。ソレガオレノアルベキ姿』

「『それは正しい。けれど誤りでもある』」

俺の舌が動く。何かのイメージがひらめいて、目の前を横切る。

じいちゃん。

あれは、いつの事だった。

『生命とは不思議なものだ。変化し、変化し続けて、その先に何があるのか自らは知らず。それでも恐れる事なく変化をし続ける』

降り注ぐ月光。蚊遣りの煙の匂い。ぬるい風。虫の音色。

『意味わかんないよ、じいちゃん』

『変わり続けるのが、人だという事さ。いや、人だけじゃないな。あらゆる命がそうだ』

そつと頭に置かれた手。あの手が俺は、好きだった。

あの手の持ち主が、俺は。

『どうして生命は変わるの』

『生まれてくるからさ』

『生まれてくると、変わるの』

『世に生まれ出でしものは、すべて、死ぬ運命にあるからね』

じいちゃんは、月を見上げた。

『妖精にすら、死は免れ得ないものだ』

『そうなの？』

『人間の死とは違うがね。彼らの最後は滅びと消滅。それも、この世においては変化の一つなのだろう』

『変化の一つ？』

『変わらないものはないのだよ、隆志。存在するものの中で、変わらないものはない。永遠に見える山や海ですら、変化する。太陽も月も、星々もそうだ。ただ、人間が気づかないだけで』

『気がつかないの？』

『人間の時間と、太陽や月や星の時間とは、とても違っていているからね』

しらじらと輝く月の色。降る光。

『お月さまは、毎晩形を変えてるよ。おれ、知ってる』
『そうだね』

ふふ、とじいちゃんは笑った。

『ほかに、おまえの目は何を見ている……？』

おれの、目。

『星はキラキラしているよ！ いつもキラキラ。そうしてね。キラキラはいつも同じじゃないんだ』

『そうか』

『毎日、違うんだ。同じ光り方は一度もしないよ』

『そうだな』

『葉っぱが光に透けてざわざわする時、やっぱり同じざわざわはないんだ。似てるけど、でもいつも違う。そんな声を上げてるよ』

『そうだな』

『どうしてかな？』

じいちゃんは、おれを見た。

『どうしてだろうな？』

『じいちゃんにも、わからないの？』

『ああ。……ただ、こういう言葉を知っている。海は……、』

「『海はこの世に生まれた時から、二つと同じ波を持たない』」

おれの唇が動いて、あの時じいちゃんが言った言葉をなぞった。

「『ただ、生まれ。うねり、消えるその瞬間まで。波はただ、波で

あり。そうして、この世に海が存在し始めた時より。二つと同じ波はない。

それは人に似ている。人のあり方に……」

目の前の黒妖犬。

「『それは、妖精にも似ている。妖精のあり方にも』」

変化とはなんだ。

この妖精が消滅を望むと言うのなら。それは。

「『生まれ、死にゆくものは常に、変化をし続ける。芋虫がサナギになる時、それは一つの死であるだろう。芋虫であった己は消滅するのだから。』

サナギから蝶が生まれる時、それもまた一つの死であるだろう。サナギという死の状態から生まれ、新たな死に向かって飛翔するのだから。

それでも変化は起こり、彼らは決して後悔しない。

滅びを願うと言うのなら。おまえもまた、変化を望んだのだ、黒妖犬」

15・(後書き)

部屋にクーラーがないもので、午後六時ぐらゐまでサウナです(+)
| +)

グオオオオオ……オオオオオアアアアア

黒妖犬が吠えた。

叫びは黒くしみのように、世界を汚し、浸食してゆく。

グオオオオオアアアア……アアアグウォルルルオオアアア

長く続く。遠く響く。

怒りと、嘆きと、憎しみと。それらの全てと、それを超える攻撃する力を声に込めて。

オオアアア、グウウル、グウォルルルアアアア

大地が染まる。黒に。風が浸食される。腐臭に。

輪郭を崩した犬が、どろりとした粘着質の淀みに変わる。

ぐっおる

ぐっおる

ぐっおると、うなり、叫びながら。

崩れた大地がぼこぼこと泡立ち始める。そこから伸びてくる淀みが、俺の足元に迫ってくる。
風が腐る。大気が腐る。

『俺、八閻、閻、デアリ、死ヲ、死ヲ、運ブモノ』

淀みの中からひび割れた声がした。

『憎、恨、怨、……奪ウモノ、閻ニ落トス、モノ』

それはまるで、魂を萎縮させようとするかのように、陰々とした響き。
けれど。

「『閻の中に見える、ひとすじの力。
あかく、夜をこえて燃え上がる。
それは、何か』」

俺の中からあふれる、言葉。陰々とした響きをそれは、押し退ける。

『憎。怨』

「『炎のように』」

『恨。腐』

「『おまえの内を照らす』」

『奪。壊』

「『それは、何か』」

『壊。壊。壊壊壊壊』

「『何か』」

ぐうおる。ぐうおる。

ぐうおうおうおうおうおうおうおおおおおおおおお

どろり、と溶けた漆黒の影が、泡立って立ち上がる。攻撃する意志を込めて、俺を威嚇する。

『怨。怨。怨』

陰々と、声が響く。その奥に。
それが、見えた。

「……それは、祈り。世界が美しいバランスを保ち、かくあるようにとい願う、最もシンプルで、尊い祈り」

俺は言った。

「おまえが、ジョン・セバスチャンに対して願い、彼もまたおまえに対して願った……祈りだ」

溶けた漆黒の中に、ひとすじの祈りがあるのが、俺には見えた。それは炎のようで、光のようで、風のようで。大地の力強さ、水の流れのようで、音楽や歌のようで。涙のようでもあった。

「『かくあるように』」

その祈りを、音でなぞり、俺は口にする。

「『水が流れ落ちるように。風が木々をすりぬけるように。大地が横たわるように。炎が燃え上がるように。』

世界がそのように、美しくあり、

おまえもまた、そのように存在するように。

かくあるように。この言葉を、

友よ。わたしは、おまえに贈る』

……これが、おまえの中に今もある、彼の祈り」

不意に。

しん、と影が静まり返った。

「わからないのか？」

俺の問いかけに、淀みが震えた。

「消えてなどいない。それは、今も。おまえの中にある」

ぴし。

かすかな音がした。

ぴし。ぴしぴし。ぱき。ぱきん。

動きを止めた漆黒の影の、どこからか。何かが割れる音がした。

ぴし。ぴきぴき。ぱし。

音は、次第に大きくなり。

ぴち、ぱき、
ぱきききき……、

影の全身から響き。そして、

ばしいいっ！

大きなひびが、影の中心から一直線に生じた。それは影を引き裂くかのように鋭く、一気に現れ。続いて細かなひび割れが、その周辺に次々と現れた。

が、が、ががが、がああああっ！

淀みが悲鳴を上げた。その間も、ひび割れは止まらず。内側から引き裂くかのように、いく筋も、いく筋も、

光が。

黒妖犬であつた漆黒の淀みの。内側から。

涙のように。

音楽のように。

生まれ、あふれ、膨れ上がり、外へ。

外へと。

ぎゃ、が、があああああああつ！

淀みがのたうった。伸び縮みしながら、苦痛の叫びを上げる。その間も、ひび割れは大きくなり、黒の崩壊は続いている。

コワイ。

そんな叫びが、聞こえた気がした。

コワイ。

「そうじゃない……」

ジョン・セバスチャンは、おまえを苦しめたくて祈りを残したわけじゃないんだよ。

俺は目を閉じると、あのきらめきを思い起こした。去っていったピアノリストの残した、最後の音楽。

彼の、祈り。

「Wohl mir, dass ich Jesum habe,
(イエスを得た私は幸いだ)

O wie feste halt ich ihn, (ああ、
私はなんと固く彼を抱きしめることか)」

最初のコーラル。俺の口は自然に動いて、彼の弾いただろう音楽、そのピアノの中に込められた歌をなぞった。この部分は、黒妖犬によつて、呪縛の一つとして使われた。けれど。

「Das er mir mein Herz lebe,
彼は私の心を慰めてくれる」

Wenn ich krank und traurig bin.
（病める時も、悲しみの内にある時も）」

この歌がなければ。

始まりと出会いを象徴する、この歌がなければ。

「Jesus hab ich, der mich liebet
（私はイエスのもの、彼に愛される）」

Und sich mir zu eigen gibet;
イエスは私に自分自身をも与えてくれた」

最後のコーラルにつながる。

終わりが、存在できないものとなってしまうのだ。

「Ach drum lass ich Jesum nicht,
（ああ、だから私はイエスを離さない）」

Wenn mir gleich mein Herz
bricht. (私の心が壊れ果ててしまおうとも、決して)「

びし！ ばきばき、ばきっ！

ぐうおおおおおおおおお！

最初のコーラルを歌い終わると、激しい音を立ててひびが広がった。

影が崩れる。崩れて別の何かが内から現れようとする。

それを恐れて、影は叫ぶ。苦しみの声を上げる。

俺は姿勢を正すと、息を吸い込んだ。続けて、ジョンが最後に弾こうとしていた歌詞を歌った。バッハのカンタータ、最後に歌われるコーラルを。

「Jesus bleibet meine Freude, (イエスはずっと、わたしの喜びのままであるでしょう。)

meines Herzens Trost und Saft,
(わたしの心をなぐさめ、うるおし、生きる力を与え続けてくれるでしょう)「

聞いてくれ、黒妖犬。これが、ジョンがおまえに伝えたかったことなんだ。

「Jesus wehret allem Leide, (イエス

はわたしのために、すべての悲しみに立ち向かってくれる。）
er ist meines Lebens Kraft、（そのゆえにわたしは、彼から生きる力を与えられる）「

彼は感謝していた。おまえに、感謝していた。

「meiner Augen Lust und Sonne、
わたしの目には、彼は太陽。そのように輝かしい。）
meiner Seele Schatz und Wonne;
（わたしの魂には、彼は宝。そのように喜ばしい）「

きっと彼の目には、おまえはそうに見えていた。
大切な友。かけがえのない宝物。

「darum lass ich Jesum nicht、（だからわたしは、イエスを離さない）「

祈りを、ただひたすらに。おまえの中に。

「aus dem Herzen und Gesicht、（顔を彼に、心を彼に向け続けるのです）「

残した。

「アア、ガアアアアアッ！」

一際高く、影は叫び声を上げて。

内側から現れた光により、……砕け散った。

ふわり。

ひら、さら、さらら、

さら……。

静寂の中。柔らかな光が、そこにあつた。

崩れ、消え去った影の代わりに、そこには光に包まれた、何かがあった。

さら、さらら……。

光が、さざ波のように揺れている。

そのものを包んで。

不意にそれが身じろぎ、ゆるり、と頭を上げた。

『傲慢^{じゆうまん}なるは、人の子』

それは言った。どこか、大地に降るさやかな光に似た声で。

ささやくように、それでいて、その場にいた者全てに聞こえるよ

うな声で、それは続けた。

『願い。求め。そして躊躇なく手を出し、成す』
「記憶はあるのか」

俺が問うと、それは答えた。

『われはかつて、それであった。ゆえに記憶を持つ。人の子よ。あなたはなんと傲慢であることか』

「ああ、それが俺だ。だが、後悔はない」

答えて俺は一步進み出ると、地面に膝をついた。光に包まれるそれを見つめる。

「そうして、傲慢による罪を、ここで仕上げる事にしよう。
俺の目におまえは、輝くものに見える」

びっくり、とそれが震えた。

「喜ばしいものに見える。幸いなるもの。祝福された、喜ばしいものの。」

世を巡り、巡り続け、水に、大地に、大気に、光に。全てに喜びを運び届け、祝福を運び届けるもの。

安らぎと、優しさをおまえは運ぶ。迷う者には道を示す小さな光となるだろう。

音楽はおまえにとって喜びの泉となり、おまえはまた、その喜びを他に伝え続けるだろう。

おまえ自身もまた、世に現れ、贈られた祝福であるから」

ちゅ。ちゅ。

さ、さ、しゃ、しゃ、ら、ら、らん……

それが変化する。かすかな歌声と共に。それはまるで、目覚めようとする世界の中、流れる小川のせせらぎのよう。

東の空の明るさを感じ、声を上げ始めた小鳥の歌声のよう。

「そのように、俺はおまえを見た。
そのように、俺はおまえを見定めた」

しゃ、しゃ、しゃら、しゃら、ら、ら、りん、ろん、……

世界の目覚めるのを待つ、命の真摯な願いにも似て。
羽化を願う、祈りにも似た、ささやき。

その歌を、俺は。尊いと思った。
ただ、尊いと。

「ゆえに、そのように、俺はおまえを呼ぶ。今からも、これからも。おまえは幸いなるもの。祝福を運ぶもの」

りいん、りいん……りん、りん、ろん、り、ろろん、……

「そして、美しい祝福そのものだ」

……りいりい……んんん……

一瞬の静寂の後。

涼やかな歌を放ち、光は収縮し。翼を持つ何かに変化した。

真っ白な毛並みに、穏やかな青い目。背に一对の白い翼を持つ、輝く獅子に。

獅子ではあったが、風のようなだった。風のようなはあるが、力の具現でもあった。

空を思わせる青い目には、熱と輝きが宿り、周囲に揺らぐ事のない強さを、歌のように振りまいた。

風を思わせる一对の翼には、喜びと内省による悟りが宿り、周囲に優しいなぐさめと、明るさを放った。

ジョンのピアノだ。

そう思った。これは、あのピアニストが、世界に向かって贈り続けていた音楽……。

『われは新たな存在として、定まった』

それは顔を上げると、翼を広げ。鈴の音のような響きの、力強い声で言った。

『もはや、元には戻るまい。死んで新たに生まれたのだから。呼ぶ声がする。行かねばならない。』

新たなものとして、行くとしよう。人の子よ。そなたが望んだ通りに』

そうして輝く獅子は、俺を見つめた。明るい音楽の調べを秘めた空色の目で。

『礼を言つべきか、恨み言を言つべきか。今もわからぬ』

「俺は、俺のしたいようにしただけだよ」

『そうだろうな。人の子よ。そなたは、かつての我が愛した男にそっくりだ』

そう言うと、獅子は笑い。俺の方に足を踏み出すと、額をなめた。ちり、と何かが燃えるような感触が走った。

しかしそれは、すぐに消え。獅子は俺から離れると、駆け出した。大地を蹴って。

翼が広げられ、力が星の光のように集まる。それは大きくはばたくと、

風に乗り、空の高みに駆け登った。

疾走はさらに早くなる。

天高く駆け上がったそれは、やがて、ひととき強い光を放った。
まるで、小さな太陽のように。
そうして流星のように尾を引きながら、彼方に向かって飛び去って行った。

後にはただ、たゆたう光の残響と、大気に溶けた歌のきらめきだけが残った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5323g/>

妖精の輪と時のロンド～妖精たちのいるところ

2011年11月15日08時21分発行